

---

# オンライン・オフライン

KOU

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オンライン・オフライン

### 【Nコード】

N4312R

### 【作者名】

KOU

### 【あらすじ】

国内最大手MMO『ジェネシス・オンライン』弱小ギルドに所属する「ライア」こと神谷礼には秘密があった。これは所詮ネットゲダとは間違っても言えなくなってしまった男の子のお話。

## 事のはじまり

学校から帰ると即行でパソコンの電源をつける。

やべー！もうそろそろ攻城戦始まるじゃん！！マスターに怒られる！！！！

パソコンを立ち上げるとすぐにショートカットアイコンをダブルクリックして、ログイン画面へと急ぐ。

『ジエネシス・オンライン』

今、俺がはまりにはまっているのがネットゲであり、この『ジエネシス・オンライン』なのだ。『古の大地に封印された魔物が甦り何とかかんとか』とかいう新しさなんかまったくテンプレートなMMOなのだけれど、豊富なアイテムとダンジョン数に職業、絶妙なゲームバランス、グラフィックの美麗さ、そして大規模なギルド・ウォーや攻城戦など、もうつめられるものは全部つめました！！というポリュームが魅力で、国内MMOとしては確固たる人気を築いている。

ログイン画面には空に浮かぶ島々。中央の島には門があり、その開かれた門には光が渦巻いている。急いでログインネームとパスワードを入力する。キャラクター選択画面に映ると俺はメインキャラクターのファイターを選んですぐにログインした。ログインした瞬間にチャットを打ち込む。

『ライア：ごめん！！ごめんなさい！！おくれた！！』

緑色の文字で表示された俺のチャットの後に次々と緑色の文字が表示されていく。

『風巳： こん！！急いで！！攻城すぐはじまるよ！！』

『LILIE： ライぼう遅い！！』

『黒白猫： お、来たw 場所はノイトマな！一階出口で皆待機してっから！！』

『NANAKO： はよこいポケ！』

『シシリア： ライアキター！マジいそいで！！』

『星龍： ばんわー！城攻めましょー！！』

一気に流れ出すギルドチャットに思わずにやりと笑いながらチャットを打ち込んでいく。

『ライア： 今日は割りと人少な目？にあさんとかは？』

俺が書き込むとすぐにチャットに返事が打ち込まれていく。

『NANAKO： にあさんは今日はバイト』

『黒白猫： だよー！だから火力足りねえwww』

『シシリア： らいががんばるしかねえよw』

『LILIE： ライぼうポータルある？迎えにいく？』

ありゃ。にあさんは今日はこないのか。このメンツでも十分攻められるけど。

『ライア： りょーかい今いく！>リリさんだいじょうぶポタ持ってるから！！』

街から出るとすぐに最寄のダンジョンまで走る。入り口近くでメニ

ユー画面を開くとアイテム欄からノイトマを記録したポータルを選んでクリックした。一瞬でキャラクターが光に包まれ、ロード画面へと移り変わる。ノイトマのダンジョン入り口に到着すると急いで一階の出口まで走る。

『風巳： おk ギリまにあつた(。(。 )』

マスターからパーティー申請が飛んできたのですぐさまOKボタンをクリックする。

『黑白猫： 皆固まれー!』

くしねさんの号令で皆が一箇所に固まる。移動速度、攻撃力、防御力、魔法耐性上昇の補助魔法を一気にかけてもらつと、皆が一斉に黄色や赤や青や紫の光で包まれる。

『LILIE： 今日攻城側少ないからいけるかもよ!』

『星龍： ですね!がんばりましょ!』

『NANAKO： 邪魔する奴は皆殺しじゃああああ』

『シシリア： WWWWWWWWWWW』

『風巳： (。口。(。 )』

『黑白猫： ちょWWW』

こいつ・・・狂ってやがる・・・などと内心想いつつ、時間が来るのを待つ。

俺の所属するギルドの名は『OVERLOAD』。『ジエネシス・オンライン』の5つのサーバーのうちの一つ、ケイディアルサーバー。そこに数多あるギルドの中の一つであり、メンバー数が、皆のサブキャラを含めても30人に満たない、はつきり言って弱小ギル

トだ。

でも俺はこのギルドが大好きだ。このメンバーが大好きだ。

『ライア： よっし絶対落とす！！ブチ殺すぞ！！！！』

『NANAKO： さすがの私もそれは引くわ』

『風巳： (。□。;) (。□。;)』

『LILII： W』

『黒白猫： W W W W W W W W』

『シシリア： な W W W W な W W W W W W W W W W W W W W W W』

『星龍： ななこさん W W W W』

・・・やっぱ今のなし！！一部の奴を除いて大好きだ！！！！

「・・・お前な！！」

ずり落ちてくるヘッドフォンを掴みながらマイクを口元まで持つていく。オンラインゲームをしながらの音声チャット。それが俺の日課だった。そして、その日課の相手こそが、その一部の奴なのである

「・・・何？」

「何って！！俺だけスベったみたいになってるし！！」

「アホか。安易に私のポケにおんぶにだっこするからじゃん」

こいつは芸人か？

「いいから！ほら、そろそろ始まるんだから、神谷<sup>かみや</sup>先頭はしってよ」

「何で壁にしようとするんだよ」

「してないしてない」

ちよつと語尾ふるえてんじゃねーか！笑いかみ殺してるだろ！！

「ライア頑張れ」

「キャラ名で呼ぶな！！」

キヤツキヤとヘッドフォンごしに笑う同級生の声を聞きながら、こいつのことをキャラ名の「ななこ」で呼ぶことは冗談でも俺には出来そうにないなと思った。

俺の名前は神谷礼<sup>かみやれい</sup>。キャラクター名は本名をもじったものにしてある。そして今、俺と音声チャットをしているのが、野崎奈々子<sup>のやまななこ</sup>。何を隠そう、俺の通っている高校の、同じクラスの、席は微妙に離れていて、教室でもめったに話さない、同級生だ。

何でそんな微妙な距離の奴と音声チャットしながらオンラインゲームなんてやっているのか？

それは今から約2ヶ月前までさかのぼるのである。

高校2年のクラス替え。仲のいい奴らとクラスが離れることもなく、俺は新しいクラスに満足していた。特に俺のクラスの4組は、他のクラスから可愛い女子が多いクラスとして羨ましがられていた。俺自身はそうだろうか？という気がしないでもなかったが、それでも

確かにちらほらと可愛い女の子は紛れていた。

その可愛い女の子の一人に数えられていたのが野崎であり、それが初めて俺がこいつを認識した瞬間だった。が、だからどうだという話でもない。野崎奈々子は皆が振り向くような美少女という感じではなかった。むしろ俺の最初のイメージは、何かギャル入ってる、だった。完全なギャルというわけではないのだけど、やたら短いスカートに、何故か第2ボタンまで開けられたシャツを眺めながら、「うわ、ギャルだ」と思ったのである。

だからうちのクラスの、<男子が狙っている女子ランキング>で、野崎が割りと高めの4位に入っていることを知ったときはえらく驚いたのだった。皆ギャル好きなんだなあ、と。

まあ、野崎がギャルっぽいのはおいておこう。そんな当時、女子にしては露出多目の野崎に、はっきり言って俺はびびっていた。何を隠そう俺はそこら辺に転がっている煮え切らない系男子の筆頭である。小学生時代に「神谷くんって面白い!!」などというクラスの女子の黄色い声を勘違いしたまま、面白いヤツはモテるというやや勘違いな自信を盾に思春期を過ごして、「\*ただしイケメンに限る」というこの世の真理に辿り着けなかった、哀れな羊が俺なのだ。はっきり言って、俺はギャルが怖かった。彼女たちは男の顔面偏差値に対して厳しい目を持っている気がしたし、事実そうだとも思う。まあよく考えれば俺達煮え切らない系男子でさえ、女子をランキングで差別しているのだから、さもありません、なのだけど。でも俺はそんな風に女子に値踏みされていると思うのがひどく怖かった。だから、野崎の周りのグループを含めて、野崎に自ら話しかける、なんてことは無かった。

そうして2年になってからあつという間に一学期が立った。この間



に俺はクラスの大人しめ女子の高倉さんに恋をしたり、その高倉さんがサッカー部のイケメンに告白して付き合いだした事実には涙を流したりと、色々あったわけなのだが、まあそこは端折る。

とにかく期末テストが2週間前に差し迫った頃である。俺はクラスで他のやつらとともに掃除をしながら雑談をしていた。内容は詳しくは覚えていないが、テスト勉強だるいやな、俺ゲーム買ったばつかなのに全然してねーよーみたいな感じだったと思う。

そしてその時、俺は自分でも気がつかないうちに、地雷を踏んでいたのだ。

その時俺は、矮小な虚栄心から俺、テスト2週間前だけど全然余裕で勉強してないぜアピール>をしてしまったのだ。

「俺、全然ゲームしてるわ」

「え、マジで？余裕だな神谷。何のゲーム？」

「ネットゲ！『ジエネシス・オンライン』！！」

「・・・はあ？ネットゲかよ！！うわー引くわー！！」

何故か俺の発言に引いた友人を前に、俺はムキになって反論してしまった。

「何で？面白いんだぜ、『ジエネシス・オンライン』！！レベル上げまくってさ、もうレベル100近いんだよな」

「ふーん・・・」

『ジエネシス・オンライン』の上限レベルは200なので、100近くまであるというのはそこそこ頑張っている方なのだが、そんな知識などまったく持ち合わせていないであろう友人の態度は、ひどく冷たいものだった。

俺が若干涙目になっていると、何か視線を感じたような気がしてふとその方角まで視線を移した。

クラスメイトの野崎奈々子が、何故か俺を凝視していた。

しかも何か目が爛々としてる。猫じゃあるまいし、目が爛々と輝くなんてなかなか無いことだろう。でも確かにその時野崎の目は輝いてた。キラッキラしてた。不覚にも俺はドキッとしてしまった。ただしそれは野崎が魅力的に見えたとか、そんな意味じゃない。何だか嫌な予感がしたのだ。心臓に悪いほうのドキッだったのである。

俺の勘は当たる。しかも悪いほうに。

放課後、帰宅部である俺が、さつさと帰って『ジエネシス』やーろうつなどどとるんるん気分を下駄箱からローファアを取り出していた時だった。

「ねえ、ちよつと」

斜め後ろ後方から届いた声に、俺はまったく反応しなかった。つかんだローファアを放ると、そのままかかとを潰して履く。

「ねえ。神谷、聞いてんの？」

・・・

え？俺？

頭の上にクエスチョンマークを貼り付けたまま振り返ると、そこには野崎が何故か腕を組みながら仁王立ちしていた。花の女子高生が仁王立ちである。一瞬で俺は野崎に何かしてしまったのだろうかと考えた。何もしてねえ。っていうか何も関わりがねえ。

何で野崎が俺に話しかけてくるのか？突然の事態に混乱して俺が言葉を発せずにいると

「・・・暇？」

むすつとした顔のまま野崎が問いかけてきた。

「・・・暇だけど・・・何、何か用？」

警戒しているせいか、すげーぶつきらぼうな言い方をしてしまった。そんな俺の言葉に野崎は一瞬顔をしかめたが、すぐに気を取り直したようでニヤリと笑った。

「ちよつと話あんだけど。空き教室これる？」

え？・・・え？

俺が何もいえないうちに野崎は踵を返すとスタスタと廊下を歩いていく。俺は半ば浮遊霊のように、何も考えないまま野崎の後ろを付いていった。

「……は、話って何なの？」

皆さんには先にお伝えしておきたいのだが、俺は煮え切らない系男子であると同時に勘違い系男子筆頭でもある。はっきりいって放課後、空き教室、呼び出しの最強方程式を目の前にして、俺の中のT H E勘違い野郎はゴリラばりにウホウホ言っていた。つまりすごい興奮していた。「野崎と全然しゃべったこともないじゃん」「野崎が俺に興味持つ可能性なんてほとんど無い」「そもそも女の子に告白されたこと無いだろ」などという至極全うな俺の理性たちはゴリラパワーによってことごとく粉碎されていた。

俺は自分の鼻息を抑えるのに精一杯だったので野崎の顔がよく見えなかった。

「……あのさ、いきなりこんなこと言うの無しかなくて思ったんだけど。っていつか、皆には秘密にしておいて欲しいんだけど。まあ、神谷なら、誰かに言うとか無いと思うんだけど……」

ややためらいがちに言葉を紡ぐ野崎。かたや俺は変な汗を大量にかいていた。完全に来てる。完全に流れが来てる。ついに俺の時代が来た。まさかの大逆転。いや、しかし、野崎とは全然話したことの無い俺が、安易に返事してしまっているのだろうか？ちらっと顔を上げて野崎を見る。野崎は今まで見たことがないくらいに顔を真っ赤にして俯きながらもじもじとしている。はいもう全然おっけーもう全然問題ない。めちやくちゃ可愛い。めちやくちゃ可愛いじゃないか！！俺の中の勘違い野郎が俺という殻を突き破って飛び出してくる寸前だった。

「……神谷さ、私のところ……ギルド入らない？」

ん？

え？

思考が完全に停止する。ギル……ド？

「あの『ジエネシス・オンライン』の……わ、私もやってるんだ。レベル120の……魔術師……」  
ソーサレス

俺はどんなアホ面で野崎を見ていただろうか。ただ、夕暮れに染まった空き教室で、夕暮れよりも紅い顔で俺に「告白」をした野崎に、俺はこう答えたのだ。

「え……あ、うん……」と。

## 事のはじまり（後書き）

完全に見切り発車ですが、よろしくお願いします。

3月26日

さかのぼり期間を1ヶ月前から2ヶ月前に修正  
レベル上限150 200へ修正

5/2 誤字修正 一部台詞修正

## あつという間の出来事

その時の俺を包んでいたのは完全なる戸惑い。ドラマとかでよくある、人が道路に飛び出してそこにトラックが来て景色がスローモーションになってトラックを見つめ続けて、いや、お前そこまで見つめる余裕あつたら避けるよ！！って突っ込みたくなるあの時間。あの時間が俺に訪れていた。

そんな俺の、透明度の高い心からの「え、あ……うん……」

その答えを聞くと野崎は一瞬すっげー嬉しそうに口元を綻ばしたけど、すぐにそれを手で隠した。

「……神谷、ギルド入ってないんだ？」

「……ああ、まあ……今はソロ……」

この「今は」のニュアンスは「彼女？今はいないかなー！！」と使いは同じである。つまりは、正直な話そんな経験一回も無いけどこっから先も無いなんて信じたくない、夢を見させてよ系の「今は」である。

だが、俺の返事は野崎を満足させるものだったらしい。何かそんな気がした。

「ふーーーーーん……キャラは何なの？」

「……え……ファイター……」

「・・・ファイターか・・・」

そのまま口元に手を当てて考え込む野崎。

「キャラ名は？」

俺は少しうろたえた。ネトゲのキャラ名なんて、クラスの女子にはらす前提で付けてなんかいないのだ。はっきりいってどんな反応されるのかと思うと言いたくない。

「・・・私は普通に『ななこ』なんだけど。あ、私の名前ね。ローマ字の大文字でNANA KO」

聞いてねー！そんな丁寧に教えてくれなくても！完全に流れが俺も教えなくちゃダメな感じになってる・・・。分かった。言うから。

「・・・ライア」

「ライヤ？」

聞き取れてねえー！！もうやめてくれ二回も言わせないでくれ。俺が溶けてしまう。

「・・・ライ『ア』！」

「ライア？どういう意味なの」

掘り下げてきた・・・掘っても何も出ないのに・・・

「・・・俺の名前、神谷礼の『礼』と『谷』を並び替えて『レイヤ』



だから、ちよつともじつて『ライア』……。」

「カタカナ表記？」

俺は野崎から一刻も早く逃げ出したかった。でも野崎はガンガンに掘り下げてくる。何なんだ。

「カタカナだよ……。」

「ん、分かった」

ようやくと野崎は追及の手を緩めてくれたようだ。

「家帰ったらすぐ、フレンド申請飛ばしておくから」

「……え？」

今何て言った？

野崎はすでに空き教室のドアを開けたところだった。ドアを通りながらこつちを見つめてくる。にこにこというよりはニヤニヤに近い笑みを零しながら。

「帰ったら、ログインね」



と表示されていた。

すぐさまOKボタンを押す。するとすぐに反応が返ってきた。

『NANAKO： 家着くの早いね』

当たり前のように返されるチャットに何とも不思議な気分になる。間違えようも無くこの「NANAKO」は野崎であり、あいつがパソコンを前にチャットを打っているのだろう。もちろん。その事實はネットゲという相手が誰かも分からない不透明感が漂う世界の中で、あまりにもはつきりとした色を持ちすぎているように感じた。

頭がおかしいと思われるかもしれないが、俺はチャットを打ち込みながら、学校に居るときよりも圧倒的に野崎を身近に感じた。

うん、頭がおかしいな、これは。

『ライア： そっちのほうがい早いじゃん』

『NANAKO： 私んち学校から20分ない』

『ライア： そうなんだ』

『NANAKO： 待ってて今そっち行く』

『ライア： え？場所わかんのか？』

『NANAKO： フレンド画面開けば相手のいる場所出るから』

『ライア： マジか』

『NANAKO： すぐ行くから倉庫の前に居てよ』

『ジェネシス・オンライン』にはどの街にもNPCが存在する。武器屋、防具屋、クエストを頼んでくれるおっさんとか。倉庫というのは名前の通り道具を預かってくれるNPCのことだ。

『ライア： 分かった』

『NANAKO： さっそくだけど』

『ライア： ？』

『NANAKO： ほんとにギルドはいつてくれる？』

『ライア： うん』

『NANAKO： そっか』

『NANAKO： うちのギルマス連れてくから』

『NANAKO： とりあえず話したいんだって。来たらパーティー組んでいい？』

『ライア： 分かった』

『NANAKO： じゃあ待ってて』

しばらく倉庫の前で直立不動のまま野崎とギルマスの人を待つ。倉庫前は人がたむろするため、見つけられるだろうかと少し不安に思っただけだった。

『パーティー申請が来ています。許可しますか？』の文字。

『キャラクター名：風巳』

この人が、ギルマスでいいのだろうか。

パーティー申請にOKするとキャラクターに表示されている名前の色が白から黄色に変化した。それと同時にすぐ横に立っていた魔術師と聖職者の名前も黄色へと変わった。

『風巳： どうもはじめまして！』

『ライア： はじめまして』

『NANAKO： ライア、この人がうちのギルドのマスターで、かぜみさん。』

『風巳： このギルドのマスターしてますかぜみっていいいます』

『風巳： よろしくです』

『ライア： こちらこそ、よろしくおねがいします』

『NANAKO： え』

『風巳： ？？』

『ライア： え？』

『NANAKO： もう話おわり？』

『風巳： ？？』

『NANAKO： 入団テストとか人間性診断とかは？』

おいおい、野崎。誘ったのはお前じゃねーか。

『風巳： ないないw ななこのリア友なんでしょ？いらないよ』

リア友？俺と野崎が？野崎がそういつて俺を紹介したのか？・・・どうなんだろうか。別にそう思われて嫌だとかでは全然ないのだけど、むしろそう思うのは野崎に悪い気がするんだけど、そこんとどうなんだろうか。

そう思ったのはどうやら俺だけではなかったようだ。やや間が空いて、チャットが打ち込まれる。

『NANAKO： ライア、どうですか』

『ライア： いや・・・それこそこっちが聞きたいんだけど』

『NANAKO： え』

『ライア： え』

『NANAKO： ・・・リアル知り合い』

『ライア： うん。リアル知り合い』



『 星龍 : よろしくお願ひします!! 』

あつという間に青文字いっぱいになったチャット欄にあっけに取られていると、少し遅れたタイミングでまた挨拶が流れる。

『 NANAKO : よろしくお願ひします 』

俺は何だか変に楽しくなってしまうてニヤニヤ笑いながらチャットを打ち込んだ。

『 ライア : はじめまして!! こちらこそよろしくおねがひします!! 』

俺のキャラクター名の上には緑色の文字で<OVERLOAD>と表示されていた。

こうして俺はギルドOVERLOADの一員となったのだった。

## あつといつの間が出来事（後書き）

読んでくださってありがとうございます。ありがとうございます。



## 教室での距離

どんな男でも、年に少なくとも2回位はソワソワすることが許されてると思う。バレンタインとか、文化祭とか。気になるあの子の気を引きたい、みたい。だって、ソワソワって潤いじゃないですか。恋する女の子は綺麗になるっていうじゃないですか。かたや、男はソワソワしてみっともなくなると思うんですけど、そこんことどうですか？あ、どうでもいいですか。はい。前置きが長くなったが俺は今、年に2回位許されているソワソワ状態にあった。

とにかく、今の俺は甘じょっぱい系男子筆頭・・・もういいかこういうの。はつきりいって全然余裕が無い状態。もう今、行進させられたら完全に手と足が一緒に前に出る。

昨日は野崎に誘われるがままに『ジェネシス』にログインして、フレンド登録して、ギルドに入って。皆すげーいい人たちで、さっそく皆でパーティー組んで狩りにいったりして。

オンラインゲームだつのに、ギルドにすら所属しないで、勧誘とかも全部蹴ってた俺がですよ？クラスの女子の一声でギルド入りですよ。爆笑。お前ただけ女に弱いんだと。下心満載じゃねーかと自分で突っ込みたい位なんですけど。

実際のところ、野崎に声をかけられて断れなかったのは、それまで「よく分かんないけどギョルっぽくて怖いし、どういう風に思われてるのかも気になっちゃうから苦手」という感じで、遠巻きに見てるだけだった野崎が、実は俺が勝手にレットル貼ってただけなんじゃないのかって思ったから。恐る恐る蓋開けてみたら自分の大好きなゲーム仲間という事実。しかも何かよく分かんないけどギルドに誘ってくれたという事実。・・・この二つが相まって、俺の野崎に

対する気持ちに変化が訪れていた。

・・・野崎は本当は一体どんな子なんだろう？

授業も終わって、俺は周囲にバレない位のさりげなさで野崎に意識を向ける。視線の焦点を何も書いてない黒板に向けつつも、視界の端っこに野崎がギリギリ入るようにする。何という視野の使い方。サバンのシマウマか俺か、位の視野の広さ。でもはっきりいって俺相当気持ち悪いことしてるな。野崎もまさか俺に視界のすみっこで観察されてると思ってもいねーだろうな。なんか本当にごめんなさい。

でも、だからといって野崎をガン見して、周りの誰かに見つかったり、あげくの果てに本人に見つかつたりした時のことを考えるとこうせざるを得ない。野崎と俺は今までまったく接点が無かつたんだし、野崎は『ジエネシス』をやっていることは周りに秘密みたいだし。

まあ、でもネットゲやってますよ！なんて、声高に叫ぶやつはそうはいないだろうし、女の子だから恥ずかしいって気持ちもあるのかもしれないし。でもだからこそ尚更、日ごろ接点のなかつた俺をわざわざ誘うなんてリスクの高いことをした野崎に対して、質問の1つでもぶつけてみたくなくなってしまうのだ。

視界の隅っこに野崎を捕らえ続けていたら、段々と馬鹿らしくなってきた。何をしているんだ俺は。野崎がギルドメンバーを探していたら、同じクラスにちょうど同じネットゲをしているクラスメイトがいて、しかも高レベルそうだったから誘っただけの話じゃないか。それ以上でも、それ以下でもない。気心のしれた仲より、距離感のあつた間柄のほうが、遠慮して妙に近寄ってくることもない。

野崎はきつとそれを見越して俺を誘ったのだろう。ゲームはゲーム。現実世界では視線すら交わることのない間柄。それでいいじゃないか。ごめんな野崎、変に踏み込もうとして。俺は野崎を視界から外すとトイレに行こうと席を立った。

・・・俺を誘ってくれた理由は、『ジエネシス』のフレンドチャットで聞こう。それが俺の野崎への礼節のある付き合い方だ。

嘘でもすつきりしたとは言えない心持ちで、それでも自分を納得させながら廊下を歩いていく。トイレ近くの人通りの少ない渡り廊下に差し掛かったところだった。

「・・・神谷」

「うわっ!？」

急に声をかけられて驚いて振り返ると、野崎がいた。は？何で？さつきまで教室にいたのに。何で？え？今俺のこと呼んだの？

「の、野崎・・・」

俺は若干仰け反りながら野崎を見つめる。・・・あれ、何か、何か・・・怒ってないか？

「・・・神谷さ、私のこと嫌いなの？」

は？

「・・・え？」

「・・・朝から目も合わせないし、今も態度すごいビクビクしてる

し」

ちょっと待ってくれ。ちょっと待ってください野崎さん。

「いや、違う違う!! だってほら、さ……。野崎は『ジエネシス』  
やってるのって周りには内緒なんでしょ? ……俺が声かけて迷惑  
だったらアレだしさ!!」

何で俺はこんな焦っているんだろう。目の前の野崎はすげー眉を潜  
めてる。唇とかへの字になってる。やばい。怖い。怒ってる女の子  
ってこんな怖いのかよ。何で俺怒られてるんだろう? やべー何言っ  
てるのかもよくわかんない。

「……迷惑って何……」

「いや、俺も声は掛けたかったんだけど……俺あんま野崎と話し  
たことないし……」

もう野崎の視線が痛くて視線も合わせられない。若干右の方に視線  
をずらしながらしどろもどろに弁解をする。何で? 気遣ったつもり  
が完全に逆効果になってる。野崎怒ってる。俺テンパってる。あれ  
? これ何かゴロいいな。ノザキオコッテルオレテンパッテル。

ダメだ完全にテンパってる。ゴロいいな? じゃねーよ。帰って来い  
俺。

「……だって声かければいいじゃん」

本当だよな! 野崎の言うとおりだよ! 何で俺一人で勝手に納得して  
たんだろう! これだからコミュニケーション能力足りない奴は困る  
よね! そりゃ、前日誘っつといた相手がシカトぶっこいたら誰だって

怒ります！馬鹿！俺の馬鹿！

「……うん。……ごめん」

ダメだ、めっちゃちっちゃい声しか出ない。聞こえてる？俺の声聞こえてる？何かもう俺の中の横隔膜が「俺頑張れない」って言うてる。言うてる気がする。何で俺こんなに凹んでいるんだろう。

……ああ。野崎と仲良くできるチャンスを自分でふいにしたからか。

「……私、すごい嬉しかったのに。昨日、神谷が教室で『ジエネシス』の話してるの聞こえて。ギルドにも入ってくれてるって言うてくれて、すごい嬉しかった。……何で全然リアクション無しなの？チャットもすごいしてくれたじゃん！！だから私今日すごい楽しみに学校来たのに！！」

野崎の語気がどんどん強くなっていく。俺をなじる声に身がすくむ思いがする。そんな風に思ってくれてたのかっていう嬉しさと、その気持ちを踏みにじってしまった申し訳なさが同時に来て、もう俺はわけが分からなくなってしまうた。こんなに感情をそのままぶつけられることに、俺は慣れてない。でも、それって俺がよく分かっ  
てなかったってことなんだろう。気を遣ったつもりが、相手を傷つけるだなんて最低だ。

「野崎ごめん！！」

勢いよく頭を下げる。野崎の上履きが視界に入るくらいの直角おじぎだ。

「・・・俺もすげー嬉しかった。誘ってくれて。俺今までギルドとか避けてて。だって俺人付き合い苦手だし、知らない人たちの輪とか怖いし。だから誘ってくれてすげー嬉しかったです。今日も本当は野崎と話したくて仕方なかったです。でも俺ぐだぐだ考えてて声かけられなかった。だから、本当ごめんなさい！」

とにかく謝ろう。野崎が許してくれるかはもう問題じゃない。引かれてもいいや。野崎はすげえいい子だった。それが分かったただけで十分じゃないか。

頭を下げたまま、野崎が何か言ってくれるのを待ったけど、野崎は何も言ってくれない。

あれ？・・・恐る恐る顔を上げる。

・・・口元に手を当てたまま、黙りこくる野崎。

はい、完全に引かれてしまいました。俺も途中でテンション上がりすぎて何言ってるのか自分でもよくわかんないし。もう泣きそう。

「・・・神谷携帯だしてよ」

うわー怖いよー、すげー怒ってるー。これはもう許してもらえないな。・・・そうだな。携帯。・・・は？携帯？

「・・・え？」

我ながら間の抜けた声が出る。野崎はむすつとした顔のまま、ポケットから携帯を取り出した。ピンクのカバーがかかっているスマートフォンだった。

「・・・神谷もスマートフォン？」

「・・・え？いや、俺は普通に二つ折り・・・」

「私の赤外線出来ないから、このコード読み取って。これでメルアドと電話番号出るから。」

「コード読み取りは付いてるでしょ？」

「・・・付いてる」

「携帯出して」

意味が分からん。え、誰か説明して。え？あの流れで何でメルアド交換なの？

ぴろりろり〜ん。ものすごいアホっぽい撮影音が渡り廊下に鳴り響く。

「・・・メールで私にも神谷のメルアドちょうだいよ。電話番号もむすつとしたままの野崎がそう言うので、その場で野崎にメールを送る。」

「・・・うち帰ったらスカイプのID、メールで送るから」

「え？」

スカイプ？・・・いや、知ってるよ。あれでしょ、無料でネットで通話し放題っていうアレでしょ。俺もインストールしたもん。コンタクトはクラスの野郎ばっかだけど。

・・・スカイプのIDを野崎が俺に送る？何で？

野崎は俺からのメールを確認すると、顔を上げて睨み付けるようにして言った。

「・・・学校で話せないなら、いい。『ジエネシス』しながら音声チャットすればいいし」

「・・・」

今度こそ口を開けて何も言えなくなった俺をまた暫く見つめた後、野崎は振り返るとそのまま渡り廊下を去っていった。

その後俺はトイレに行ったことをすっかり忘れて呆けたまま教室に戻り、結局授業中に「先生トイレ」と手を上げる羽目になった。



## 教室での距離（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。とても励みになります。

## 友人たちとの会話

さっきまでの自制心はどこにいったのか、次の休み時間、俺は気がつけば野崎を見つめていた。慌てて視線をそらしても、どうしても野崎のことが気になる。だが野崎はいつも行動をともしているグループの女子達とわいわい喋っていて、こちらをちらりとも見るそぶりがない。さっきまでとはまるで逆だ。

「神谷、お前ギャルっぽいからあそこら辺のグループ苦手とか言っ  
てなかった？」

後ろの席の石田が決して周りには聞こえないように声を潜めながら話しかけてきた。

お前寝てたんじゃないのかよ。そのまま寝ててくれて良かったのに。

「・・・何が」

「いや、お前さっきからあっちチラチラ見てるから」

それは完全に挙動不審だな。もう見ないようにしよう。

「何なに、神谷っち。仲良くなりたい子でもいるの？協力してあげようか？」

気がつけば俺は前と後ろから口撃を受けていた。

「・・・よっちゃん。それはない」

鋭すぎる質問なので天邪鬼に返しておこう。前の席から身をよじら

せて話しかけてきたのは大野良美。通称よっちゃん。何と云うか歩くトプニツプニツって音がしそうな女の子だ。誤解のないように言っておくとよっちゃんは別にふくよかではない。何か、イメージがそんな子なのだ。いつもニコニコしててなんかよくわかんないけど幸せそう。高校2年だっというのに身長が150位しかない。そんなよっちゃんは、何故か席が前後になつた時からやたら振り返って俺に話しかけてくるので、人見知りである俺ですら、気がついたらこの子を「よっちゃん」と呼ぶようになっていた。再び誤解のないように言っておくと、恋愛感情を持っているわけではない。俺にとってはクラスの中でも気兼ねなく話せる数少ない貴重な女子なのだ。

「よっちゃん、こいつにそんな気回す必要ないから!!」

石田がやや早口で言う。よっちゃんはなんていうか、誰しもが自然とよっちゃん、と呼びたくなるような雰囲気を持っているのだ。別に俺だけが男子の中でこの子をよっちゃん呼ばわりしているわけじゃない。むしろ、男子からも女子からもよっちゃんって呼ばれているのだ。ただ、石田の場合はちょっと事情が違う。こいつ、よっちゃんにベタ惚れなのだから。

「だって神谷っち女の子と全然話さないでしょー？男の子たちの輪の中だと凄いはちゃけてるところとか見るけどさー。・・・女の子に興味ないの？」

「よっちゃん、俺の名誉のために言わせて貰うけど、女の子は大好きだよ」

たまらず答える。よっちゃんは若干天然入ってる。石田いわく尚良し、らしい。

「そつえば神谷つてどんなのがタイプなんだ？」

石田、会話をつなげて行きたいのは分かるけど、もうこの話題良くないか？よつちゃんもすげー食いついてきてるけど。俺そんなテンションじゃないよ。

「・・・あー。タイプ・・・。タイプか・・・何だろ、あんま考えたこと無い・・・。」

「何それ神谷つちぼんやりしすぎ」よつちゃんが楽しそうに笑う。

よつちゃんだってほんわかしすぎだぞ。あ、これ突っ込みでも何でもないや。石田お前息止まつてるぞ生きるよ。

「・・・やつぱ可愛い子かな」

「えー！神谷つち面食い？」

よつちゃんが眉を潜める。石田、いいんだぞお前は息をして。顔まっかつかじゃねえか純情か。

「いや、顔つていうか・・・雰囲気とか・・・そついうの。私服が可愛いとか？」

「ええー？よくわかんないけど、神谷つち女の子の服装にこだわりとかあるの？」

「うん。わりとシンプル目でき、ロングスカートとか履いても野暮ったく見えない子とかオシヤレだよね」

「・・・神谷つち、そういうところ見るんだ。意外・・・」

よっちゃん。君は俺をどんな人間だと思ってるんだ。

「確かに神谷つて服のセンスいいよな。こいつの私服見たことある？よっちゃん」

「え、無いよー！神谷つちそんなにオシャレなんだー？見たいー！」

石田お前俺を餌によっちゃんを釣ろうとしてないか？よっちゃんはまたキラキラ目を輝かせるしそれを見て石田は蕩ける寸前だし何かもう二人だけで話せばいいのに。

どうにかして話題の中心を自分からずらそうと奮闘する。

「よっちゃんも私服とかこだわってそうだよね。・・・何かあれだね。森ガールつて感じるもん」

・・・我ながら適當すぎるな。森ガールつて言っとけば何とかなるみたいな。でも系統としてはよっちゃんはそっち系統な気がするんだわ。歩くと音がしそうだしね。

「えー？私は特にこだわりはないなー？でもロングスカートね！今度挑戦してみようかなー！」

「あ、持ってないの？」

「うん、ロングスカートを着こなすよ私！」

いつからそんな話になったのかよく分からんけど、よっちゃんが楽

しそつで何よりだ。

何か石田がさつきからおとなしいな。お前せつかくよつちゃんと話せるんだからもつとがつついてこうよ。俺は他人のこととなると俄然強気になれるタイプだった。要はひとでなしだった。

ちようどチャイムが鳴って皆が席に付きだす。

「今度神谷つちの私服見せてよー」

よつちゃんがそう言って来たので俺は得意の<肯定とも否定とも捉えにくいけど何となく場は持つ愛想笑い>を放ってその場を強制的にお開きにした。あそこまでハードル上げられて私服は見せられねーよ。

それから結局放課後が過ぎても、俺と野崎の視線が合うことはなかった。でも、休み時間の野崎の発言が頭から離れなかつたので、若干早足で帰路に着く。すると家まであと10分といったところで、携帯が震えた。間髪いれずに取ると、野崎からのメールだった。題名にはスカイプIDらしきものが書かれている。本文を読むと

「スカイプIDです。登録しておいて」と書いてある。

ダッシュで家まで帰り自室に入ると、まっさきにパソコンの電源を

入れた。ほとんど使わなくなっていたスカイプを起動する。コンタクト追加にメールのIDを入力するとコンタクトの中に「奈々子」が表示された。「？」のままなのでまだ相手方には承認されていないようだ。まだ帰ってないのかもしれないな、と思った瞬間だった。

「？」マークが消え、同時にチャットが送られてきた。

『相変わらず家帰るの速い』

いや野崎、お前人のこと言えないだろ。

## 友人たちとの会話（後書き）

オフライン描写でもう1話くらい使いそうです。早くオンラインの話も書きたいです。



## はじめての通話

しばらくキーボードの上で指を遊ばせる。どう返信すれば正解なのだろうか？休み時間の野崎の様子を思い返すと、安易に返事をするべきなのか迷った。暫くパソコンの画面を見つめる。チャット画面は動かないままだ。

野崎は一体どんな子なのか。俺はそれを知りたいと思った。それなのに、いざそのチャンスに恵まれたら、びびって動けずにいる。俺はこの気持ちをよく知っている。相手のことは知りたい。でも自分のことは知られたくない。侮られたくない。失望されたくない。馬鹿にされたくない。俺の心の奥底に根付いて取れない、煮え切らない気持ち。

馬鹿馬鹿しい。それで相手のことを知りたいだなんてどうして思えたのだろうか？一人で悩んで、結論付けて、相手のことまで勝手に分かった気になって。何様のつもりなんだ俺は。完全に一人相撲じゃねえか。

野崎は少なくとも俺とつながりを作ろうとしてくれる。その事実だけで十分だったのに。

『何せ若干の早足だったから』

チャットを打ち込む。完全に嘘だ。全速力で家まで帰った。何をやるよりも真っ先に電源を付けた。

『そう。その頑張りに免じて昼間のことはナシにする』

思わず頬が緩む。顔が見えないのは、気楽だ。文字だけのコミュニケーションは、安心する。我ながら情けないことに、俺は野崎に怯えていたのだ。厳密に言えば、クラスの中でのお互いの位置。お互いの所属するグループの位置、クラスでの雰囲気、男子と女子という違い、俺が野崎に持つコンプレックス、俺の今までしてきた対応。そういう有象無象に縛られて、俺はあるうことが逃げることを選ぶとした。野崎はそれに気がついて俺を責めた。それでも、そこから歩み寄ってくれた。

野崎、マジでごめん。俺は心から野崎に謝った。チャットには打ち込まなかった。

『神谷、通話できる?』

『できるけど』

『ん、じゃあしようよ』

野崎お前ぐいぐい来るなあ。俺は完全に押されっぱなしだった。チャットまではまあ、問題はない。でも実際に通話となってくると話は別なんじゃないか?だって肉声なわけだし。何か声ってすごい生々しいってというか、距離感がすごい近い気がする。

でもすぐさま思い直して、そんな気持ちも押さえつける。よく分かんないけど、俺はかなり野崎にびびってる。でもそれは俺が野崎に対してまだレッテルを貼ってるってことだ。

野崎がどんな奴で、どう思ってる、俺とこうやって関わりようとしてるのかも、話してみなきゃ何も分からない。

『準備するから、あと5分待って下さい』

腹を括ろつ。俺は仕舞ってあったヘッドセットマイクを机から取り出し、パソコンへ接続した。

息を長く吐いてから、チャットを打ち込む。

『準備できたぞ』

少し間が空いてから、チャットが流れる。

『OK』

ぷーっぷっぷーぷーっぷっぷー

何とも言えない電子音が響く。音量の大きさに思わずのけぞって慌てて音量を調整した。

「……聞こえてる?」

数時間前、固くひび割れたような響きを持っていた声が、こんどは無表情に耳元で響く。

「……うん、聞こえてる」

「……何か神谷声違つ」

「え。そう?」

「うん、やっぱりマイク通すから？」

「そうかな？野崎の声は別に普通だけど」

「ふーん、そっか、別にいいんだけど」

「野崎、今時間大丈夫なの？ていうか部活とかは？」

「私部活入ってないよ。神谷と同じ」

「あ、そうなの？野崎って運動神経いいから、何かやってるのかと思ってた」

「別に何も。神谷だって中学では陸上やってたんでしょ？」

「え？何でそんなこと知ってるの？」

「何か神谷やたら足速かったでしょ去年のマラソン大会。閉会式で前に出てたじゃん」

「あー、あれか」

「神谷、あれ何位だったの？」

「6位」

「は！？」

「いや、学年ごとの表彰だから別に凄くはないだろ」

「・・・神谷、それ意味分かって言ってる?」

「は?意味?」

「・・・なんでもない。・・・何か、神谷と私普通に喋っててウケるんだけど」

「いや、誘ってきたの野崎じゃねーか」

「そうだけど。何か面白い。っていつか神谷って結構普通に話すだね」

「話すわ!どついうことだよ!」

「でも今日あんな態度取られたし」

「・・・それはマジでごめん」

「別に責めてるわけじゃないよ。単純に不思議っていうか。今全然普通じゃん。話しかけた時なんか、凄い話しかけるなオーラ出てたのに」

「え・・・、いや・・・マジでそんなつもりは・・・」

「ぶっ」

「えっ」

「凄い声小さいんだけど」

「!?!」

「ウケる。神谷って面白い」

「……褒められてるのか。それ……」

「まー、でもこうやって普通に話せるなら、良かった。……迷惑だったかなってちょっと思ったから」

「野崎」

「ん？」

「もし良かったら『ジエネシス』これからやらない？」

「……私も今そう言おうと思ってた」

くすぐったそうに言う声を聞きながら、俺は『ジエネシス』のアイコンをダブルクリックする。

たった数分、会話しただけだ。俺はまだ野崎のことなんか何も知らない。明日学校に行ったら、俺は野崎に話しかけることも出来ないのだろう。今はまだそれでいいと思える。焦ることはない。今すぐじゃなくても少しずつ、仲良くなっていければいい。

耳元に心地よく響く野崎の声を聞きながらそう思った。



「野崎！無理！！ここは二人じゃ無理！！いくらなんでも湧きすぎ、うわあああまた湧いたあああ」

「……！！！」

すでに野崎は声も出せないようだ。

瞬く間に新しく出現したフレイムボムにタゲられ、一瞬で囲まれる俺ことライア。

「うわ、全然動けない！！めっちゃクリックしてるのに！！野崎！笑ってないで！！ライトニング撃って！！」

ハイポーションを湯水のように使いながら、NANA KOをターゲットにしている何匹かのフレイムボムに向けて、ファイター唯一の全範囲攻撃である斬撃<ブレードウェーブ>を打ち込む。

今俺のキャラクター、ライアが行っているのは俗に言う「釣り」という行為だ。野崎の操っているキャラクターNANA KOの職業は<sup>ソサレス</sup>魔術師。全職種の中でも高い攻撃力と、攻撃範囲を持つ。だが、豊富なMPに比べてHPの伸びは悪く、モンスターたちに囲まれて逃げ場を失えば、あつという間にHPが尽きる。それに引き換え俺の操作するライアの職業は戦士<sup>ファイター</sup>。物理攻撃、物理防御では他職を凌駕する。それに加えHPの伸びも全職業の中で秀でている。このそれぞれの特性を活かしたのが「釣り」。

つまりは防御力とHPの高い戦士<sup>ファイター</sup>や騎士職<sup>ナイト</sup>がモンスターたちの前をわざと走り抜けてアクティブにし、自分にターゲットを向けることで、攻撃力は豊富でもHPが低く、囲まれた場合窮地に陥りやすい



ソサレス  
ブリスト  
魔術師や神官などからターゲットを外して安心して攻撃できるようにするのだ。そして、この「釣り」の最も大きな意味が、釣り役が大量のモンスターを集わせて一度に殲滅させることができる、ということである。

フィールドにおいて湧いてくるモンスターの数やタイミングはプログラムで決まっている。フィールド上のモンスターのほとんどを一箇所に固めて倒せば、また一気に次のモンスターが湧いてくる。効率的に狩りを行うことができるため、時間を費やしたソロ狩りよりも圧倒的な経験値を得ることが出来る。

野崎とパーティーを組んでやってきたのはダンジョン<アラム>の地下3階。

適正レベル105 110であるこのダンジョンはレベル120である野崎に取っては安心して狩りの出来る場所だろう。だが、レベル94である俺にとってはかなり厳しい。

おまけにこの<アラム>の地下3階のこのフロアは上位モンスター、フレイムボムが倒しても倒しても間髪いれずに湧いてくる、所謂「沸き場」の狩場なのだ。

本来なら4 5人で、少なくとも3人で狩りにやってくるような場所だ。だが野崎がどうしてもというのでやってきてみればこの有様である。無理。死んじゃう。

『NANAKO： 誰かアラム3階きてください。ライアさんとい  
ます。面白いもの見えるよ！』

『LILLI： ！？』

『黒白猫： アラムってwwwライアさん大丈夫なの？』

ログインメンバーの反応を見返しながら叫ぶ。

「……野崎お前チャット打ってんじゃないよおおおお！！！」

ヒイヒイ笑い続ける野崎に叫びながら必死で<ブレードウェーブ>を放つ。フレームボムのレベルは105。ライアに比べるとおよそ10もレベルが違う。はつきりいつてかなりきつい。ウェーブ一発でHPを4分の1ほどしか減らすことが出来ない。そこに続いて、画面上部に出ていたアイコンが点滅するのに気づく。残り時間が30秒を切っていた。

「……野崎！30秒ちようだい！効果切れる！！もう一回<エグゾースト>使うわ！！！」

「……はあ、ウケた。ん、30秒ね」

俺は走り回るのをやめる。と同時にNANAKOがまた<ライトニング>を打ち込んだ。あつという間に吹き飛んで地面に消えていくフレームボム達。だがすでにもう何匹か新しく湧き始めている。NANAKOは雷属性の単体魔法、<シヨックシヨット>をフレームボム達に打ち込んでいく。ターゲットがNANAKOへと向けられる。次々と押し寄せるフレームボム達を<ライトニング>で吹き飛ばしていくが、次々と湧き出てくるフレームボムに、殲滅数よりも出現数の方が段々と増えていく。

俺はすぐ様キーボード上の「X」ボタンを押す。ショートカットボタンに設定されていたのは「エグゾーストスキル」。右クリックで

の発動攻撃が、<ブレードウェーブ>から切り替わる。

右クリックを長押しし続ける。ライアが右腕を天に掲げたポーズで停止し、地面には光り輝く魔法陣のエフェクトが現われる。発動と同時に見る見るうちにMPゲージが減っていく。右クリックを長押ししてMPを消費させればさせるほど、「エグゾースト」の効果は持続する。MPゲージが0になったのを確認して、指を離した。

ファイター  
戦士の「エグゾーストスキル」の1つ、<バーサーカー>。

このスキルは使用したキャラクターの攻撃力と攻撃速度を通常時よりも引き上げる。まだスキルレベルは4でしかないが、この時点で攻撃力&攻撃速度上昇率は24%になっている。

高レベルにならなければ覚えることも出来ず、MPを一度に大量に消費し、また使用するには「魔石」というアイテムも消費しなければいけないこのスキルだが、その分効果は絶大だ。

MPは空になってしまったためしばらくは通用攻撃しか使用出来ないが、すぐさまNANAKOに群がるフレイムボム達を圧倒的な攻撃力と攻撃速度で次々と蹴散らしていく。

「おおー。神谷、ここでソロ狩りもいけるんじゃない？」

「お断りだよ!!!」

何かちょっと前までの雰囲気どこいったって感じなんですけど！野崎すげえ笑うんですけど！俺もうすでに2回マジで死に掛けたからね！1回死ぬだけでデスペナがしゃれになっていないからね！うわまた湧いたじゃないですかー！やだー！

すると画面端から人がやってきた。

・・・LILIEさんと黒白猫さんだ!!

『 LILIE : 何してるの二人とも!? 』

『 NANAKO : ライアさんを餌に狩り中!! 』

『 ライア : し め 』

『 黒白猫 : ライアさん W W W W W W W W W W 入りたてなのにこの仕打ち W W W W W W W W 』

黒白猫さん、助けてくださいいほんとひどいんですよ、<ライトニング>のデイレイタイム(冷却時間)絶対終わってるのに野崎ぜんぜん魔法打ってくれないんですよ!!

「神谷、モテモテじゃん」

とかいうんですよこんなごっついモンスターに囲まれても何も嬉しくないんですよ!!

「神谷、言い寄られて悪い気はしてないんでしょ?」

とか言うんですよ信じられないですよ!!あとすいません黒白猫さん正直何てお呼びすればいいんですか?「くろしろねこさん」でいいんですか?あ、このタイミングで聞くことじゃなかったですよね!すいませんせめて死ぬ前に聞いとこうと思って!!

俺達に近寄ってきた二人の表示名が緑から黄色に変わった。どうやら野崎が二人をパーティーに参加させたらしい。

『 L I L I I : ライアさん大丈夫? 』

『 黒白猫 : ライアさん囲まれすぎ W W W W N A N A K O は D S だなあ W W W 』

次の瞬間に画面が一瞬止まる。急な処理でラグったのだろう。凄まじい範囲の<ライトニング>が放たれた。フレイルボムが一匹残らず吹っ飛んで消えた。

『 黒白猫 : さすがリリ姉だわ。相変わらずの火力 』

『 L I L I I : えへへ 』

『 黒白猫 : よっしゃ、ここは俺もとっておき出すよ! 』

あっという間にパーティー全員に補助魔法が掛けられていく。<ウインドフォース>、<ウインドウォール>、そして<クイックムーブ>。それぞれが攻撃速度、物理防御、移動速度を上昇させる技だ。

『 黒白猫 : 何つつても全部スキルレベル M A X ですから! ! ライアさんちょっとその爆弾1匹殴ってみ! ! 』

言われたとおりにフレイルボムに通常攻撃をお見舞いする。早送りにしたような連撃が続く、コミカルに吹っ飛んで地面に沈んでいった。

『 ライア : . . . えええ 』

『 LILIE : その反応いいなあw 』

『 黒白猫 : W W W W W W W W 』

『 NANA KO : くしねさん、あまりリアアさんを甘やかせるのはちょっと・・・ 』

おいしい!!!

「野崎!!!いくらなんでもそれはひどいから!!!」

思わず叫ぶとヘッドセットの向こうから笑い声が漏れる。

「いいじゃん、神谷。うちのギルドにももう馴染んでるって感じで」

「完全にやられキャラじゃん!!!」

「あれ?神谷って実際そうなんじゃないの?」

『 黒白猫 : ななこ辛らつ W W W W W W W W W W W W W W 』

現実の会話とチャットの会話が妙にシンクロしているのを見ながら、俺はチャットを打ち込みながら言った。

『 リアア : テンション上がってきました 』

「それはない!!!」

## はじめての通話（後書き）

お気に入り登録や感想ありがとうございます。

## なめくじとギルドマスター

くしねさん（黑白猫さんの読み方はこれが正解だそうだ。野崎教えてくれてありがとう）

とLILLIさんが加わったことでパーティー全体のレベルが上がってしまったので、狩場を移動することになった。全員で狩場からフィールド画面に移動する。

ちなみにくしねさんのレベルは111、LILLIさんに至っては何とレベル125だ。今はログインしていないメンバーも、この前パーティーを組んだがほとんどの人のレベルが3桁だった。OVERLOADは実は高レベルギルドだったのだ。俺はこのギルド入って本当に良かったのだろうか？

ちなみにパーティーレベルというものを説明すると、普段ソロ狩りしている場合は自分のレベルからプラスマイナス5までのモンスターを相手にするのが一番経験値が貰えるために、おおよそ自分と同じレベルのモンスターを狩るのが一般的だ。しかしパーティーを組むとパーティーメンバーのレベルの平均値が反映される。パーティーで低レベルの人が歓迎されるのは平均を引き下げて高レベルの人が狩りを容易に行えるからだ。

俺達の現在のレベル平均値は94 + 120 + 111 + 125で112.5となるため、フレームボムだと効率が良くない。少なくともレベル108のモンスターが望ましい。

『黑白猫： ラセル城でもいく？』

『LILLI： うーん、でもPK怖いですよね・・・』



『NANAKO： それじゃ、チアソートの最下層とか』

『ライア： 俺チアソート行ったことないけど、大丈夫ですかね』

俺の今のレベルでは湧いてくるモンスターのレベルが高すぎるために、足を踏み入れたことがない狩場だ。

『黒白猫： ……マジか。行つとく？WWW』

『LILII： なめくじ退治だね』

『ライア： なめくじ？』

『NANAKO： 行けば分かるよ>ライア』

「……なあ、野崎なめくじってどういう……」

野崎になめくじの意味を聞こうとした瞬間にギルドチャットが流れる。

『風巳さんがログインしました』

「あ、風巳さんだ」

野崎が妙に明るい声を出した。わざと今の質問の流れをぶったぎった気がしたのは気のせいだろうか。

『風巳： ……ノこん』

『黒白猫： かぜみんおいすー』

『 L I L I I : こんー! 』

『 N A N A K O : こんばんは! 』

『 ライア : かぜみさんこんばんわです 』

チャットを打ち込みながら野崎にふとした疑問を口にする。

「あれ、風巳さんって社会人なんだよね？まだ夕方なのにINできるの？」

「ああ、風巳さんってね、自営業？なんだって。私もよく分からないけど」

「そうなんだ」

「ちなみにくしねさんは大学生だし、L I L I Iさんは専業主婦だよ」

「・・・マジかよ」

まさかのL I L I Iさん人妻かよ。『ジェネシス』のユーザー層の幅広さハンパじゃないな。

『風巳： 皆狩り中? 』

ギルドチャットのログを見たのだろう。風巳さんの言葉に皆で返信する。

『黒白猫： そうだよー！かぜみんも狩ろっ』

『 LILIE ： チアソート最下層だから風巳さんの得意分野ですよー！』

「・・・ふふっ、得意分野」

LILIEさんの発言に野崎が笑い出す。

「え、どういふこと」

「風巳さんがレベル110前後だったときに引きこもってたからね、チアソート」

「ああ、なるほど」

「・・・風巳さんパーティー入れたら平均が117だからなめくじギリギリ大丈夫か・・・」

「・・・ごめん、野崎。さっきからいつてるけどなめくじって何」

「・・・百聞は一見にしかずだから」

「・・・お、おおう・・・」

何となく野崎の有無を言わせない感じに何も言えなくなる。ギルドチャットの流れは止まっている。しばらくして風巳さんがようやくやく反応した。

『風巳： 。（。口。〜）』

「え、何この顔文字」

風巳さんは割り顔文字を駆使用するタイプらしい。でもなんだこの顔文字。

「嬉しいんじゃない？」

「いや、あきらかにひきつってるだろ。白目むいてんじゃないか」

「……白目むく位嬉しいんじゃない？」

「嬉しくて白目むいちゃう人に会ったことねーんだけど」

何となく不穏な空気を感じつつもギルドチャットは流れていく。

『黒白猫： ラリアさんOVERLOAD入ったばかりだし、一緒に狩りしたいでしょ？』

『LILIE： 風巳さん一緒に頑張りましょう？』

「……LILIEさんの発言おかしくない？」

チャットの流れの不自然さに思わず呟く。

「え、わかんない」

「いやわかんなくないでしょ！野崎どうした!？」

「……神谷ってなめくじっててどっと思っつ…」

「脈絡なさすぎるだろ・・・何その質問・・・」

「・・・やっぱ神谷って顔合わせてないと突込みとかも出来るんだね」

なんだこいつ！？でも実際その通りなので何も言い返せない！！

『風巳：（、、、、）』

「おいおい風巳さんとうとう顔文字でしか会話できなくなってるけど」

「大体いつもこんな感じだけどね」

「え、いつもこんな眉毛下がってるの？すげえ切ない顔に見えるんだけど」

『黒白猫： かぜみん！ここはやっぱトラウマを克服するべきじゃないよ！』

「くしねさん今トラウマつつつたよ！？」

「え、ごめん神谷が何言ってるかわかんない」

「いやいやいや！チャット見ろって！！」

『 L I L I I : 大丈夫ですよ、風巳さん。怖いことなんて何もありませんよ』

「野崎！…LIEEさんが専業主婦どころか母性全開なんだけど！」

「神谷さ、テスト勉強とかもうしてるの？」

「ゲームしてる！！今！！ごめん野崎、ちょっとほんと話聞いて！？」

「・・・神谷ほんとキレキレだね。学校でもそんな感じで話せばいいの？」

何それ恥ずかしい！顔真っ赤になるわ！何なのこの子！？

『風巳：・・・ライアさん、チアソートいったことないんです？』

おっと、話を振られたぞ。ここは・・・正直に返してみよう。

『ライア： そうなんですよ、一度も無いんですけど』

『風巳：・・・じゃあ見せてあげたいから・・・頑張る・・・）  
、・・・、（』

『ライア：大丈夫なんですか！？』

もうこの顔文字イコール風巳さんみたいになってるんだけど！

『NANAKO： じゃあ私ポタ持ってるので』

『黒白猫： つしゃ行こう！...！』

『 LILIE : ななこさんありがとう！よろしくね 』

えええ、皆言質とつたら行動早え！！

NANAKOが光に包まれて姿を消す。ポータルを使ってチアソートに向かったのだろう。

パーティーを組んでいる場合、メンバーの一人がポータルで移動したダンジョンに残りのパーティーメンバーを召喚することが可能だ。

『 NANAKO : 最下層まで走るのでちょっと待っててください 』

「チアソート久しぶりに来たなあ」

野崎がなつかしそうに言うのを聞きながらも俺の不安が収まることは無かった。

『 風巳 : 大丈夫(´・`・´) 大丈夫(´・`・´) 』

「野崎！！風巳さんが！！風巳さんが自分を励ましてるんだけど！！」

「そろそろ最下層につくから」

「野崎！？聞いている！？」

画面中央にウィンドウが開く

『 NANAKOから召喚の依頼が来ています。召喚を許可しますか？ 』

俺はYESボタンをクリックする。ライアが光に包まれて、ロード画面になった。

「うわ、うわうわうわ……」

チアソート最下層に召喚された俺の目に飛び込んできたのは、ライアの背丈の倍もあるであろう大きさのモンスター。

カーソルを合わせると「イビルイーター Lv112」とある。

見た目はイソギンチャクとなめくじを足して2で割ったようだ。どぎつい紫の模様が描かれ、触手をうねうねとくねらせながら、顔と思しきところをぶんぶんと左右リズムカルに振りながらこちらに近づいてくる。

「うわ、キモ……」

なんつうビジュアルしてんだこのモンスター！しかもこのフロアにいる数がハンパじゃない。うっじゃうじゃいる。なんかもうまさに巢。

でっかい触手付なめくじが頭をぶんぶん振りながら一斉に押し寄せてくる。



『風巳： ああああ、（、、、、、A、）ノ』

何だこの顔文字！？なかなか使いどころないぞ！？でも何か風巳さんが追い詰められてるのが伝わってくる！すげえ！！

『風巳： きもいよう』

『黒白猫： W W W W W W W W W W』

『LILIE： うわあ、すっごい湧いてる』

『NANAKO： 最下層まで降りる人あまりいないですからね』

『黒白猫： 補助かけるから！皆固まって！！』

『ライア： 了解です！！』

皆が一箇所に固まるとくしねさんが次々と補助魔法を掛けてくれる。補助魔法のエフェクトに囲まれながら皆それぞれが右手を掲げだした。エグゾーストだ。

時間を稼ぐ為、近寄ってくるイビルイーター達にくブレードウエーブを放つ。

次々とイビルイーターが近寄ってくる。うわあマジきめえ！！

皆のポーズが解け、金色の光を纏う。風巳さんと黒白猫さん達<sup>ブリスト</sup>神官のエグゾーストスキルは<ソウルオーバー>。発動者の攻撃力を引き上げるスキルだ。<バーサーカー>の<sup>ブリスト</sup>神官版と<sup>ブリスト</sup>いい。NANAKOとLILIEさん達<sup>ブリスト</sup>魔術師が発動したエグゾーストスキルは<コンフリクト><エクストリーム>。2種類のエグゾーストス

キルを、MPを半々に振り分けて発動させたダブルエグゾーストだ。  
<コンフリクト>はキャストイングタイムとディスプレイタイムを縮小  
させ、全体範囲魔法を連発可能にさせる。<エクストリーム>は魔  
法攻撃力の大幅上昇だ。

はつきりいつてオーバーキルな気がするが、今回ばかりはそれも  
何か許せる!!

『 LILIE : ライアさんありがとう!』

『 黒白猫 : つしゃあ、狩りますか!』

目まぐるしいスピードでフロアを駆け巡りながら次々となめくじ、  
じゃねーやイビルイターを殲滅していく皆を横目に、俺も<バ  
ーサー>を発動させる。

『 ライア : どんどん釣っていきますね!』

『 黒白猫 : おお!さすがファイターだわ!まかせた!』

『 LILIE : 頼もしい!』

『 NANAKO : ある程度釣ったら風巳さんにパスしてあげて!』

「 野崎!?!」

『 風巳 : (。。。)』

この後約2時間続いた狩りの間、結局風巳さんの発言は顔文字だけ  
だった。

## なめくじとギルドマスター（後書き）

今回はギルドメンバー3人に焦点が当たっています。他のメンバーもどんどん出していききたいです。

感想、お気に入り登録ありがとうございます。頑張ります。

## 外側からの風景

朝のHRが終わって、教室が再び騒がしくなる。教室の後ろでは男子が騒ぎ出し、教科書を取り出す紙のこすれあう音があちらこちらから聞こえてくる。

机から上半身を乗り出して、肩を叩く。前の席に座る、奈々子がこちらを振り向いた。

「奈々子、テスト勉強はかどってる？」

「え？・・・うん、はかどってるよ」

奈々子が少し微笑みながら言う。嘘だ。奈々子は普段から無表情で、愛想笑いなんてものはほとんどしない。そんな奈々子はクラスの男子からはとっつきにくいと思われるらしい。まるで見る目がない。私が男だったら奈々子みたいな女の子、絶対にほっとかない。

「そう？今回範囲広めだから厳しいよね」

「そつだ・・・ね、ちゃんとやらなくちゃね」

無表情を装ってても私には分かる。今の私の発言を受けて途端に不安になってる。勉強しないと駄目かな？って考えてる。ほんと素直。

「・・・志保しほは？」

奈々子が尋ねてくる。視線を逸らしてるのは後ろめたいからだろう。可愛いやつめ。

「んー、あんまやってない。ってかまだ10日位あるし、大丈夫でしょ」

「そっか・・・」

ふつと表情が緩む。良かった、まだ大丈夫だよなって思ってるんだろう。あまり苛めるのも可哀想だから、これ位にしておこう。

それにしても。私は心の中で独りごちる。ここ数日の奈々子の行動の理由は何なのだろう？

3日ほど前から様子がおかしい。放課後に教室に戻ってきたと思ったらふにゃふにゃになってたし、次の日は凄い不機嫌で、今日来てみれば目に見えて上機嫌だし。って言っても私達位しか分からないだろうけど。

学校から真っ直ぐに家に帰りがるのも、テスト勉強をしたいからだと思っていたけど、そうじゃないみたいだし。

・・・普通、考えられるとしたら、男絡みなんだけど。1年の時に奈々子に告白して散っていった人数は、私が把握してるだけで4人もいる。奈々子は相手のことを考えて、絶対にそれ関係の話を自分からは喋らないから、もう2〜3人はいるんじゃないかと踏んでいる。

それでも、奈々子はかなり恋愛に関して不器用だから、話したこともない相手と付き合うなんて考えもしないはず。でもこの数日を振り返ってみても、奈々子が男子と仲良さそうに話している場面なんて無かったし。

「・・・志保？」

奈々子の怪訝な声にはっとする。

「あはっ、奈々子に言われて改めてテストどうしよーって思っっちゃった」

「……今日図書館で勉強しようか？里奈りなと智代ともよも誘って」

「あ、いいね、それ」

奈々子つてばホントに優しい。こんなに可愛いんだから、彼氏できないのホントおかしいって思う。実際、文化祭に来て奈々子を見て一目ぼれした中学の同級生を、奈々子に紹介したこともあった。でも奈々子はメールもすごい素っ気無いし、遊びに誘ってもなんだかんだとかわされてしまったらしく、そいつはすっかりしよげかえってた。私は奈々子が可愛くて仕方ないし、いい恋愛もいっぱいして欲しいけど、本人がなかなか乗り気にならないのだからしようがないと思ってた。

でももし奈々子に好きな人が出来たらなら……私は精一杯応援してあげたい。

元々奈々子と私は1学年で同じクラスだったけど、最初はまったく絡みなんてなかった。

奈々子は最初凄い地味で、全然喋らなかつたからのグループにも属してなくて、何となく浮いてた。私は最初から何人かの子たちとつるんでたけど、何だか凄い奈々子のが気になった。すごい無表情なわりに、心細くて泣きそうな顔に見えたから、ほっとけなかつた。

席替えをして奈々子と席が近くなったのをきっかけに、私はほとんど奈々子に話しかけていった。メルアドも交換して、休み時間も話そうにした。私は自分で言うのもなんだけど見た目思い切りギャルだし、奈々子は戸惑ってたけど、懲りずに話し掛けてるうちに警戒も解いてくれた。私が日ごろつるんでいた里奈と智代とも少しずつ話すようになって、奈々子を見た目も私達に合わせるようになっていった。……ってどうか私達が奈々子の服装をどんどん変えていったんだけど。奈々子がすっかり垢抜けた頃、ようやく奈々子の可愛さに気づいたバカ男子達が騒ぎ出したけど、私はそのバカさ加減にイライラした。奈々子に関心のある奴らのほとんどは、地味だった頃には奈々子を見向きもしなかった奴らなのだ。

見た目は確かに派手になったかもしれないけど、奈々子の性格は全然変わってないし、言葉少なだけど擦れてるわけじゃないし、まして男子に媚びてるわけじゃない。

奈々子の変化を「男が出来た」だの「遊んでる」だの好き勝手抜かしてたデリカシーゼロ野郎が奈々子に告白しようとしていたのを知ったときは私達3人が全力で潰してやった。

学年が変わって、また4人とも同じクラスになったとき、一番喜んでいたのは奈々子だった。私達も教師の采配に感謝した。私達みたいなギャルは、同じクラスにわざと固めておくのが定石なのかもしれない。そこに奈々子を加えてくれたことに感謝した。

奈々子は私達にとって、可愛い可愛い秘蔵っ子だ。4人で居る時に羽目を外したり、大声でキャツキャと笑う奈々子を見ると私達3人は胸がキュンキュンして堪らなくなっているのを、奈々子自身は知らない。





<><><><><><>

朝のHRが終わると誰が誘うわけでも無しに、自然と教室の後ろへと集まる。

「なあ、礼ちゃん。勉強どこまで進んだよ」

最後にやってきた礼ちゃんに話を振ると、何故か目を見開いた後下を向く。ややあつて、ためらいがちに顔を上げた。

「・・・やつ・・・てない」

「「ええええ」「」

その場にいた全員で非難の声を上げる。

「え、だって礼ちゃん、ここの所即行で家帰ってたっしょ!?!」

ノブが思わず礼ちゃんに突っ込んだ。

「いや、うん、帰ってたけど。ゲームしてた」

「うわ!?!出た!?!またネトゲ!?!」

「そろそろ勉強しとけて、今回数学範囲すげー広いぞ」

ツトムが呆れ顔で言う。

「今日から!?!今日からやるから!?!」

礼ちゃんが慌てて宣言しだす。周りの奴らが勉強していると途端に不安になんだよなこいつ。

「うーん、そっか。俺も今日からやるかな」

思わずそう呟く。

「そつだな。まあ俺も今日から頑張るわ」

ツトムが頷く。

「俺は明日からでいいや」

ノブがやる気なさげに宣言した。

「……え、ええええええー!？」

間延びした叫びが響き渡る。

「え、何？礼ちゃんどうした」

「いやいやいや、おかしいでしょ、完全に今俺だけ勉強してない流れだったじゃん」

「何なに、何か釈然としなかった？」

「釈然としなかったねえ!!お前ら全員勉強してねーじゃねーか!何だよ、俺「……し……てない……」みたいなリアクションしたけど全然セーフじゃん!!すげー不安に駆られてただけど!!!」

「・・・え、何々、どれ位？」

「は!？」

「どれ位の不安に駆られてたの？」

ニヤニヤ笑いながら礼ちゃんを見つめる。ノブもツトムも下を向いて微動だにしない。

礼ちゃんがぐつと詰まる。俺のほうを睨み付けながら必死の形相だ。

「くはじめてのお使い>位だよ!！」

「ぶっ」

ノブが噴出す。ツトムも肩を震わせて耐えていたが、やがて噴出した。

「・・・っし!！」

礼ちゃんがガッツポーズをしてからはつとしたように突っ込んだ。

「・・・いや、まさやん!!今その流れじゃねーだろ!！」

『振りが来たらボケきる。かつ、誰かを笑わせる』

これが俺達の暗黙の了解だった。部活もバラバラだし、1年の時同じクラスだったのは礼ちゃんと俺だけ。2年になってノブとツトムと絡むようになったのも、笑いのツボが近いからだろう。

それでも俺達は礼ちゃんに話を振ってボケさせるのがパターン化していた。礼ちゃんはいじってナンボだと思っている。

高校に入つて、初めて礼ちゃんを見たときの印象は「暗くて、ガード固い」だった。礼ちゃんはクラスでは目立つほうだった。やたら足はえーし、勉強も出来るし、イケメンだしで、当初はクラスの女子からも注目されていた。でも、傍から見ても、「いやいや、お前それはねーだろ」って思わず突っ込みたくなる位、女子に対する反応が冷たかった。目は合わせないし、微笑みもしないし、その場をすぐ離れるし。＜何かよく分からないけど感じ悪いし、怖い＞っていうイメージが定着するのにそんなに時間は掛からなかった。

でも、俺らに対する反応は全然普通だし、まだガードは固いなんて感じだったけど話してくうちにちよつと羽目外すようなことも言うようになって、それを聞いてたら「おっ？」って思うことが多くて、自然と一緒にいるようになった。

そんで話してくうちに気づいた。礼ちゃんは本当にちぐはぐな奴なんだ。まず自己評価がかなり低い。自分に対する女子の反応が悪いのも完全に自分の態度のせいなのに、「自分が不細工だから」だと思ってる。入学当初キヤーキヤー言われてたのにまったく気がついてない。完全にバカ。女子に対する素っ気無さも「自分と話してつままないと思われたら怖いから遠慮してる」らしい。あの態度が遠慮！？気を遣ってる！？完全にバカ。

何か手札に最高のカードがそろってるのに自分ルールでどんどん切っていくってカスにしてる＞って感じのバカさ加減だった。しかも俺らが散々指摘しても理解できない。何か過去にトラウマでもあったの？って位、歪んだ物の見方をする。

ここだけの話、2年になってから礼ちゃんが好きになった高倉さんも、思いつきり脈があった。脈があつたくせに礼ちゃんが高倉さんを前にテンパつて、避けるような態度を取り続けた所為で、高倉さんは優しくして気が利くことで評判のサッカー部の小野寺と付き合い合ひだした。過ぎた話だし蒸し返すつもりもないけど、完全に礼ちゃんにはバカ。

そんな礼ちゃんを見てるとドン引きしつつも、何だかほっとけないような気持ちになるのも事実だ。たまに本気で殴りたくなる位煮え切らない奴だけど、悪い奴じゃない。

ただ、救いようもないくらいちくはぐなんだ。

俺らの前では思いつきり笑つて、ボケて、楽しそうにしてる礼ちゃんを見ると、「いや、それ女子の前でやれよ！！イチコロだぞ！！」つて思わず言いたくなるけど、まあ、いいか放っておいても。

それに最近はやっちゃんと仲が良いみたいだ。よっちゃんは不思議な子で、あの礼ちゃんが最初から普通に話してた。俺らは度肝を抜かれた。俺らの中では礼ちゃんは警戒心の強い野生の動物レベルだったから、一時期はやっちゃんかムツゴロウか、位の評価だった。

でも良く見てたらよっちゃんはかなり頑張つて話しかけてることが分かった。俺らはニヤニヤしながらそれを眺めることにした。礼ちゃんに春が来るのもそう遠くは無いだらう。

「・・・まさやん」

「あ?」

「今どこいったの？」

「どうやら完全にぼーっとしてたらしい。」

「ごめん走馬灯見てた」

「まさかの臨死！？このタイミングで！？」

全員で笑いながら思う。この救いよりの無いちぐはぐ野郎に、どっかいいことがありますようにと。

## 外側からの風景（後書き）

リアルの方も固めていきたいと思えます。

お気に入り登録ありがとうございます。

## 視線の行く先

放課後、俺達は教室に残った。テスト前なのでほとんどの部活も休みだ。6時位まで、皆で残ってテスト勉強をしようということになった。それ自体には何の異論もなかったので、こつこつと教室に残ったのは良い。机を向かい合わせに4つ固めて座る。

教室には野崎も残っていて少しドキリとする。いや、ドキリとする意味が分からん。別にやましいことなんてないはずだ。ただ、野崎達も残って勉強をする様子だ。教室の後ろの方に固まった俺達と教室の前の席で固まっている野崎たちとは距離もあるけれど、何だか落ち着かない気分になった。気を取り直そう。

「・・・つしや、やりますか」

各々教科書やノートを取り出す。俺は未だどの教科も手付かずなので、とりあえず英語と数学の範囲をざっくり見直そうと思ひ、それらを机の上に広げた。

「ガチでやるうな。あんま話とかしない感じで」

まさやんが言う。

「おっけー。無駄に笑い取っていかない感じね」

俺達も神妙にうなづく。

「んじや、まあやりますか・・・」



パラパラと教科書を捲り始める。

野崎たちや、他にもチラホラ残っているクラスメイト達も目的は勉強のようで、わずかに小声で不明瞭な会話が漏れてくる程度だった。

「……」

「……」

「……ふあ……」

動きがあつたのはツトムだった。

「……ふあ、ふあ……!」

俺達はツトムの様子を伺う。

「……ふあああ!……あ、出ないわ」

「……」

「……」

「……」

「ごめんごめん」

不発に終わったくしゃみに、俺達はすでに興味を失い勉強を続ける。

「……」

「・・・」

俺は授業中に要点をまとめ、赤で書き込んだノートの記述を赤シートで隠しながら暗記していく。

するとまさちゃんがおもむろに顔を歪ませ始めた。

「・・・おっ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・よおっ・・・よおおっ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・よおっ・・・っしや！！！！！！！！！！」

まさちゃんがガッツポーズをしながら思い切り吹き出した。

「・・・」

「・・・」

「……あー、悪り。花粉がやべえわ」

「……」

「……」

「……」

皆反応を返さずにシャーペンを走らせ続ける。

するとまたまさやんが顔をしかめ始めた。

「……よおおおっ……」

「ちよっ……ごめん、ごめん、まさやん」

ととと耐え切れずに顔を上げてしまっ。

「よっ……!!え?」

「ごめん、え?……え?ごめん、ちよっといい?」

「何?」

「いやいや、『よ……っしゃ!……!』って!……何それ!……何それ!……?」

「は?くしゃみだよ?」

それまでだんまりを決め込んで下を向いていたノブとツトムも耐え



結局、2時間の勉強会で俺がこなせたのは英語のみの範囲の三分の一位だった。このペースではまずい。英語自体は得意な科目なので、まだ危機感は少ないが、このペースでは身につくものも身につかないだろう。

『ジェネシス』にログインすると、すぐにチャットを打ち込んだ。

『ライア： こんにちは』

『風巳： こんにちは。』

『シシリア： こんにちは』

『LILIE： こんにちは!』

『にあ： お、こんにちは!』

『ライア： あの、実はそろそろテスト期間で、ちよと10日位IN控えます!』

『にあ： ありゃ』

『風巳： おkです』

『シシリア： あ、ライアさんも学生なんだ』

『LILIE： シルバーさんも最近INしないから何でかなと思っただけそうか』

『にあ： それじゃー仕方ないですよー。ライアさん今度俺とも狩りいこうね!』

『ライア： あ、是非是非!』

『にあ： じゃあ今週は城攻め厳しいかもですね』

『 LILIE : そうですね』

『風巳： テスト頑張ってくださいd)・・・(b』

『シシリア： 頑張つて!』

『ライア： ありがとうございます!じゃ、失礼します!』

『シシリア： ノシ』

『にあ： ばいばいー!』

『風巳： (。(ノシ』

『 LILIE : 頑張ってくださいー!』

皆の激励を見届けてからログアウトをする。まだOVERLOADに入ったばかりでインを控えるのは少し気が引けたが背に腹は変えられない。

野崎もインしていなかったな。きっと野崎も暫くはインしないだろう。そう思うと少し残念な気がしたが気を取り直して俺は机の上に勉強道具を広げた。



うちのクラスのイケメン達が徒党を組んだようなメンバーで、うちのクラスの女子からは

『サムライ』と呼ばれていた。イケメンはイケメンなんだけど軽い性格の子達では無くて、その纏う雰囲気から付けられたものだ。女子の前だと寡黙な人達で、特に神谷君はひどくて、私が話し掛けた時は目も合わせなかった。それがいいって人もいるんだろう。私はどうかと思うけど。ただ、休み時間ごとに教室の後ろで固まって、本当に楽しそうに騒いでいる姿はクラスの女子の目の保養になっている。

智代は元々1年の時から矢野君のファンでずっとキヤーキヤー言ってるけど、矢野君は中学の頃から付き合っている彼女がいるみたいで、そこからの進展はまるでない。

「趣旨変わってるし。せつかく奈々子が頑張ろって言ってるのにい。ねー、奈々子？」

甘ったるい声を出しながら里奈が奈々子の頭を撫でる。

「・・・え？」

頭を撫でられて初めて里奈に気がついたとでも言っような声を出す奈々子。

「何その気い抜けた声　！奈々子が言いだしっぺなのにさあー！うわっはっはー！！」

何が楽しいのか笑い出す里奈。っていつても里奈はいつもこんな感じだけ。ここから更にテンションが上がると太ももを叩き出し



たり拍手しだしたりする。

「まさか奈々子も『サムライ』に興味津々かー!?うははー!」

「里奈!」

奈々子が鋭い声で里奈を咎める。

「里奈、声でかい!」

智代も慌てて里奈を制する。里奈はばつが悪そうな顔で

「い、ごめん」

と謝った。里奈はテンションと声の大きさが比例するので内緒話には向かない性格をしている。

『サムライ』たちは黙々と勉強を続けているようだ。皆一様にほつとする。私は何か引つかかるものを感じただけで、それが何か分からないまま、教科書を取り出すことにした。

「ふああああ……!」

教室に間の抜けた声が響き渡る。声のしたほうを見ると遠藤君がくしゃみが出そうにしている。

「……出ないわ」

遠藤君が呟く。他の子たちは無視だ。

「出ないのかよ!」

里奈が小声で突っ込んだ。その後は静寂が続くかと思われた教室に、程なくまた間の抜けた声が響く。

「よおっ・・・」

「・・・よおっ・・・よおおおっ・・・」

思わず声のした方を見ると矢野君が顔を歪めてこぶしを握っている。何事かと思っていると教室中に響き渡る声で矢野君が叫んだ。

「・・・よおっ・・・っしゃ!!!!!!!!!!」

派手にくしゃみをする矢野君。綺麗なガッツポーズをしている。その様子を見て里奈が下を向いて震えだした。さっき注意されたので笑いを堪えているのだろう。手もぎゅっと固く閉じられている。いっつもだったら太ももを叩き出すところだ。

『サムライ』の他のメンバーは矢野君のくしゃみに対して何のリアクションも起こさない。

いつもならきつと怒涛の突っ込みが続くんだけど、皆勉強に集中しているのだろう。

「よおおおっ・・・!!」

だが矢野君がまた同じようなくしゃみをしようとしたので私も思わず吹き出しそうになる。

「ぶひっ!」

里奈が変な声を出した。

「ちよっ……ごめん、ごめん、まさやん」

とつとつ耐え切れなくなったのか神谷君が顔を上げる。

「よっ……!!え?」

「ごめん、え?……え?ごめん、ちよっといひ?」

「何?」

「いやいや、』よ……っしや!!!』って!!!何それ!!何それ!?!」

「は?くしゃみだよ?」

里奈が顔を歪める。ぎよっとして見ると声を出さずに爆笑していた。凄く芸当だ。

「どついつくしゃみだよ!」

「……え?何かおかしかった?」

「どう聞いてもおかしいだろ!』よっしや』て!!大体』よおおおお』って溜めが入るのおかしいだろ!!一本締めし始めるかと思っただわ!」

神谷君がどんどん突っ込んでいく。智代もとつとつ耐え切れなくな

ったように笑い出した。

「いや、おかしいも何もこれが俺のくしゃみだから……」

「つーかガッツポーズしてんじゃん！！完全に故意だろ！！」

「気持ちが入ってくからさ……」

「気持ちを込めるくしゃみって何だよ!？」

神谷君の怒涛の突っ込みに私も気がつけば頬が緩んでいる。おかしくって奈々子に同意を求めようと視線を向けると、私は思わず真顔に戻ってしまった。

奈々子が微笑んでいた。

私の心臓が思い切り跳ねたのが分かる。それ位可愛らしく奈々子は笑っていた。こんなに奈々子が優しく笑うことなんてめったに無い。教室の後ろの掛け合いに笑っているのではない様な笑い方だった。

思わず奈々子の視線の先に誰がいるのか探る。

……奈々子の視線は神谷君に注がれていた。

## 視線の行く先（後書き）

何だかりアル話ばかり書いていますが、次話からオンラインがメイ  
ンの内容になると思います。

お気に入り登録して下さいと思っている方が思ったより居て驚いています。  
ありがとうございます。

## 夏休みの始まり

『ジエネシス』へのログインを控えてから10日間。プリントの裏で作ったテスト勉強の計画表も何とか計画通りこなすことが出来た。そして怒涛のテスト期間。直前であがいたお陰か、テスト自体の感触は・・・たぶん大丈夫。たぶん。いや、分かんないけど。

『ジエネシス』のインを控えたことで、必然的に野崎との音声チャットもこの10日間していない。ちょうどまさやん達と教室で勉強会をした日の夜に、野崎には「テストやばいのでジエネシスしばらく控えます」ってメールはしたんだけど。「分かった」とだけ返信が来た。さすがに野崎もあれからはログインしてないんだとは思う。確認してないけど。

まあ、とにかく何が言いたいのかつーと、とりあえず学期末のイベントごとは終了し、今俺達は体育館にいて、壇上上がって校長が生徒の心意気みたいなの話をしてるってことで。まあ、何でかって言うとうちの学校、長い休み明けると髪が茶になつてたりする子が結構いるから。「だめだぞー」って、そういつてるわけで。

はい！！来ました夏休み！！

校長からの心意気を綺麗に受け流した後、教室に戻る。後は夏休み中の課題の配布や、諸連絡をして今日は終わりだ。明日から夏休みに入するため、皆かなり浮き足立っている感じで教室はガヤガヤとうるさい。部活に入ってる人は夏休み中も部活で忙しいのだろうけど、俺は帰宅部なので夏休みがフルで休みになっただけ。つまり、『ジエネシス』がやりたい放題なわけで。自然と頬が緩む。やべーテンション上がった。

「神谷っち嬉しそう。夏休み予定いっぱいなの？」

前の席からよっちゃんが話しかけてきた。

「いや、遊ぶ予定とかはまだ入ってないよ！あ、でも皆で旅行行くぜって話になってる」

「えー！いいなあ、私も旅行行きたいなあ」

「行けばいいじゃん！！戸田さんとか、三国さんとかと」

「そうだねー！そうしよっかなあー……。あ、そうだ神谷っち」

「ん？」

よっちゃんがごそごそとポケットをいじりだす。携帯を取り出すと

「私、実は神谷っちのアド知らないんだよね。交換しよう？」

と言ってきた。

「あれ？そうだった？」

「そうだよー？っていうか神谷っち、クラスの女の子とアド交換とかしたことないでしょー？私もタイミング掴めなかったのさあ」

よっちゃんがおどけて言う。つーかさつきから俺の後方からすげープレッシャー来てない？石田じゃない？石田からの俺に対する気当たりが凄いですけど。絶対振り返らないけどな！！

「あー……。あはは」

野崎のことが頭をよぎるけど、ここで正直に言うことでもないと思  
い、黙っておく。ガヤガヤと騒がしい教室でよっちゃんとメルアド  
交換をした。

「おっけ、登録したよ」

携帯に「大野良美」と登録しようとして、ふと思い直すと「よっち  
ゃん」で登録し直す。登録完了画面をよっちゃんに見せるとふにや  
つと笑った。あ、後ろからの圧がやべえ。

「……神谷つち、夏休み、もしね、もし暇だったら遊ばない？遊  
びたいな、私」

「あ、マジで？全然おっけーだけど……」

返事をした途端によっちゃんが驚いた顔をしたのでそれを見て俺も  
驚いてしまった。え？何？

「ほんと？」

「え！？あ、うん。え！？うん！！」

「じゃあ、映画見に行きたいなあ！！」

よっちゃんがニコニコしながら言う。いやあ、よっちゃんの笑顔は  
癒されますね。



「いいね！あ、日時とか調整しなきゃいけないから、まさちゃんかのメアドも教えようか？」

「え？」

よっちゃんが戸惑った表情をする。あれ？俺変なこと言った？

「あ、本人に確認取らないで教えちゃ駄目か。じゃあ、とりあえず俺がよっちゃんに連絡取ればいいよね？よっちゃんの他は戸田さんと三国さんってことでおっけー？」

「・・・うん！！私も女の子誘っておくね！！そのメンバーになると思う！！！」

「じゃあ具体的な日時とかはメールして決めようか」

「うん！あ、それじゃあ私早速2人に話してくるよ！」

そういうとよっちゃんは仲の良い戸田さんと三国さんのいる席へ行ってしまった。見ました？歩いてるだけで音がしそうですよ？あ、全然伝わらない？あ、はい。

「・・・石田」

後ろを振り返らずに石田に話しかける。

「・・・何だよ」

「映画見たく「超見たい」ね？」

返事早えよ!!!!!!

HRも無事に終わり、何となしに野崎の方を見ると天野さん達と楽しそうに話していた。たぶんだけど、夏休みの予定でも合わせているのだろう。・・・野崎は夏休み中忙しいのだろうか?『ジエネシス』どれ位するんだろう。そんなことをぼんやり思っていたら必要以上に野崎のグループを見つめすぎていたせいか、天野さんとはちり目が合ってしまった。

咄嗟に視線を逸らす。ギャル怖い。

帰り支度をしているとまさやん達が寄ってきた。

「礼ちゃん、この後暇? 駅でマック寄ってから帰らない?」

「あ、あー・・・。ちよつとごめん、俺今日用があるんだわ」

「マジで? 何?」

「あー・・・ね?」

やっべ何も言い訳を考えてなかった。

「……まさか、まさかとは思うけど、ネトゲしたいから、とかじや……ないよね？」

ノブが眉を潜めながら言う。

「いや、まさか！まさか、俺らの誘いを断ってネトゲを優先するのはありえないっしょー？」

ツトムが声の調子を変えて言う。

「まあ、無いとは思うけど、無いとは思うけれども、もしも万が一そんな理由だったら……礼ちゃんも夏の間中ハブということになりますなあ」

まさちゃんがわざとらしく言う。「ここは、冷静に切り返さないとやばい。」

「いいいい、いやいや！そそ、そんなわけな、ないじゃないですか！……！」

「完全にクロじゃねえか」

「嘘発見器の目盛り振り切ってるレベルのリアクションだろそれ」

「はい、礼ちゃんお持ち帰り決定」

ノブとツトムに両脇を抱えられたまま俺は駅前のマックへと連れ去られていった。

込み合う店内でかろうじて4人座れる席を確保する。ハンバーガーに食らいつきながら夏休みの計画を立てることになった。

「まあ、俺は部活の合宿がすぐにあるけど、盆休みは取れるから、やっぱそこら辺でしょ」

まさやんが話を切り出す。まさやんはサッカー部でレギュラーを張っているので、部活を休むことは原則として考えられない。まあ、それはノブもツトムも一緒だろうけど。

「まあ実際、部活やってたらそうだよなー、まして俺ら部活全然別だし」

「礼ちゃんには悪いけど、俺らに合わせるもらうってことで」

「おっけー」

「・・・あれ、でも盆って今から宿取るの無理じゃね？」

ノブの発言にはととする。確かに。お盆はどこも予約でいっぱいかもしれない。

「漫画喫茶でいいじゃん」

ツトムが何でもないように言う。

「漫喫？」

「そうそう。2泊位だったらどっかの漫喫でもいけると思うよ。フラットシートなら全然寝れるし、ナイトパックで8〜10時間とかあるしさ。金も1500〜2000円とかそこらじゃない？」

「え、だって風呂とかは？」

「いや、全部が全部じゃないけどシャワー付いてる漫喫あるからさ。それでいいじゃん」

「・・・それでいく？」

「まあ、何とかなるんじゃない？」

「最悪、野宿でいいじゃん!!」

ノブが明るく言う。本当に最悪だなそれ!!

「頑張れ礼ちゃん!!」

「よ!!..!野生児!!..!」

まさやんとツトムがにっこり微笑みながらこっちを見つめていた。

「いや、俺だけかよ!!..!」



『ライア： こんにちは！皆さんお久しぶりです！！テスト終わりました！！』

『LILIE： お疲れ様〜！！』

『tsilvert： 僕も終わりましたよ！！夏休みですね！！』

『ライア： あ、そうなんです！お疲れ様です！！>silverrさん』

『星龍： テス・・・ト？』

『黒白猫： レポー・・・ト？』

『ライア： ！？』

『LILIE： この2人も今日から夏休みだからね！』

『ライア： お2人とも記憶喪失みたいになってますけど』

『tsilvert： www』

『黒白猫： ライ・・・ア？』

『ライア： くしねさん！？』

『星龍： それはさすがに乗れないwww』

『黒白猫： wwwwwwwごめんライアさんwww何かいじりた

くなる W W W W 『

『 L I L I I . : 1 2 3 4 5 6 7 8 9 『

『 ライア : ばちこいすね 『

『 星籠 : 頼もしい W W W W 『

ニヤニヤ笑いながらチャットを打つ。チャットを打ちながら、ふと野崎は今日はログインするのかな、と思った。



## 夏休みの始まり（後書き）

理由がまったく分からないのですが、12日からアクセス数が急増しました。読んで下さって、ありがとうございます。

## シーズンイベント

夕飯を食べるために離席して、戻ってきてても野崎はログインしていなかった。まあ、今日は夏休み一日目みたいなものだし、きつと天野さんや中村さん、渡辺さん達と遊びにでも行っているのだろう。

野崎には悪いけど、はっきりいってこっちは夏休み突入でテンションがめちゃくちゃ上がっている。それに加え、『ジエネシス』は「シーズンイベント」といって、季節の移り変わりで年4回の大規模なイベントが存在するのだけど、そのイベントが開始目前なのだ。

今回のイベントのタイトルは『セイブ・ザ・クイーン』。イベント期間中、全てのダンジョンのモンスター達がランダムでドロップするイベントアイテム「魂の欠片」を集めて、ワールド中央、『ジエネシス』内最大の都市国家「帝都アスタリア」に構えるアスタリア城内のNPCであるお姫様に渡すと交換で色んなアイテムが貰える。

『風巳さんがログインしました』

『風巳： ー（ ）ノこん』

『ライア： こんにちは！おひさしぶりです！』

『星龍： マスターこんにちは！』

『黒白猫： かぜみんこんこーん！！』

『+silver+： 風巳さんこんばんは』

『 LILII : こん!』

『 風巳 : ライアさん、シルバーさんテストお疲れ様です ) . . .  
( 』

『 ライア : どもです!』

『 tsilvert : はい!今回は結果が良かったので、すぐ帰  
つて来れましたw』

『 黒白猫 : w w w w』

『 LILII : 良かったですね!』

『 星籠 : レポートも大事だけど、イベントも大事なんだよ . . .  
( 』

『 tsilvert : w』

『 風巳 : 今回のイベントアイテムの内容見ました??>公式』

『 黒白猫 : 見たよ!』

『 ライア : ちよろつとですけど、公式覗きました!』

『 tsilvert : 見ましたよ!鞆出るんですよ』

『 黒白猫 : 見た!!すっげーよ今回のコンテンツ!!』

『 LILII : 鞆欲しいですね~!』

『星龍： 鞆もそうだし、新装備も欲しいー！なかなか出無そうだけ』

OVERLOADの皆も今回のイベントで浮き足立っている。何でかって言うと、今回のイベントで手に入れることの出来るアイテム候補が、かなりのレアアイテム揃いなのだ。

ざっと挙げていくと、まず鞆類。『ジエネシス』にはアイテムの重量制限というシステムがある。スモールポーション1個にだって重さは割り当てられている。もちろん、各種装備品にも。それらの重量がキャラクターの持てる重量を超えてしまうと、重量過多になってキャラクターは走ることが出来なくなり、移動速度がぐくつと落ちてしまう。そうすると、ダンジョンでは圧倒的に不利だ。っていうかまず戦えない。STRに振ることで重量制限の上限は上げることができけど、ファイター戦士やナイト騎士は元々装備品の重量が他職に比べて重いので、極力狩りをしてドロップしたアイテムは倉庫にぶち込むことにしている。前置きが長くなったけれど、そういった重量制限を圧倒的に軽減してくれるアイテムが鞆なのだ。防具とか武器とかと同じようにキャラクターに装備させるのだけど、今回のイベントアイテムには重量を500軽減してくれる「レザーバック」や総重量の510%を軽減してくれる「ボストンバック」など、喉から手が出るほど欲しいアイテムが入っている。

次に、これもかなり注目されているのが各職の新装備だ。ほぼ1年前になるけれど、公式企画の中で「イラストグランプリ」という、ユーザーから装備のデザインをイラストで投稿してもらって、グランプリを取った各職の防具一式と武器を実際に『ジエネシス』に登場させよう、っていうイベントがあった。俺もその時公式を覗いたけれど、かなり気合の入ったイラストや、明らかにネタ装備だと

思うイラストなんかが掲示板に投稿されていて、なかなか楽しめたのを覚えている。グランプリを取った各職の防具一式と武器は、かなり良さ気なデザインばかりで、早く実装されなかなーなんて思ってたものだ。それが今回、何とイベントアイテムとして先行入手できるらしい。課金アイテムじゃなくていいのか？

個人的には鞆も欲しいけど、戦士ファイターの新装備「赤面あかおもての鬼人」装備がかなり欲しい。鬼をイメージしてデザインしました、と投稿者のコメントに書いてあったように、真っ赤な鎧に鬼の面、金棒の両端に刃が付いた両手剣などが、和風でかなりかっこいい。正直欲しい。

『ライア： 新装備欲しいです！一式もらえたらなー・・・』

『黒白猫： SETアイテム一式貰えるんだとしたらかなりいいよね』

『風巳： どうなんでしょうねえ？もしかしたら各部位ずつなのかも』

『LILLI： 別職の装備が出たらちょっと悲しいかも』

『t silver t： 新しいレンジャー装備がすごい欲しいです』

『星龍： たぶん明日からこのダンジョンもすげー混むんでしょうねえ』

『ライア： ですよね』

『風巳： 特に沸き場なんて占領組が出てくるかもですね』

『 L I L I I : 城には近づかないほうが良さそう。PKが増えそうですね』

L I L I Iさんの言っている「城」、というのはさっき話に出た「アスタリア城」とは違う意味合いだ。『ジエネシス』ではプレイヤーの所有できる城が何十と存在する。毎週決まった曜日、決まった時間に「攻城戦」がはじまり、勝者がその城を占有することが出来る。「攻城戦」以外の時間、それぞれの城は開放されてダンジョンとして機能するのだけれど、普通のダンジョンよりも出現するモンスターが強く、アイテムのドロップ率も比較的高いので、城はかなり魅力的なダンジョンなのだ。ただし、城は他のダンジョンと一線を画して危険度が増す。城内はPKが解禁されているのだ。かくいう俺も、城でざくざくモンスターを狩っていたら後ろから突然PKされた、なんていう経験は数え切れない。『ジエネシス』にはPKを行った際のペナルティとして存在するのが「キャラクター名表示の色の变化」と「一定時間のNPC使用の制限」だけで、どちらも30分で解除されるため、PKを行う時の抑止力としてはかなり弱い部分がある。まあでも、他のMMOとかにある「PKされた側は一定の確率での装備ドロップ」なんていうえげつない仕様にはなっていないので、『ジエネシス』内でのPKは実質の被害はデスペナルティだけなのだけど。とはいっても、レベル3桁に突入している人なんか、一回PKされるだけでどれだけの経験値を失うことになるのか考えるだけで恐ろしい。まあ、死亡してもデスペナの発生しない「守護の護符」っていうアイテムもちゃんとあるんだけど、課金アイテムだ。おいそれとは手が出せないのが学生の悲しいところだ。

『風巳： 護符いっぱい持ってアッシュ城行こうと思ってます(。 )』

『黒白猫： おお、さすがかぜみん』

『LILIE： 私も護符買おうかな・・・』

『ライア： うーん、どっかの最下層に引きこもって狩りまくるしかないですね』

『t silver t： 普通のところで頑張りますか』

『星龍： 俺もしばらく露店巡りは控えて久しぶりに狩りするか』

『風巳： もし皆さんのご都合があれば、明日はパーティー組んでアッシュ行ってみませんか？護符はお渡ししますので』

『黒白猫： お、いいね！あ、護符は持ってるから大丈夫だよん』

『LILIE： いいですよー！私も護符は大丈夫です』

『星龍： おっけーです！』

『ライア： あ、いいですね！護符はいただくのは悪いので露店で買います！』

『t silver t： OVERLOAD総出でイベント参加ですね！賛成です！護符は僕も2枚なら持っているので大丈夫です』

『風巳： 遠慮しなくていいのに・・・』

『黒白猫： かぜみんは金銭感覚が薄いんだよwww課金アイテム

ぼんぼんあげちゃ駄目www」

「LILII : お気持ちだけで嬉しいですよ」

「ライア : お気持ちだけ受け取っておきます！」

「星籠 : ですね！」

「風巳 : 皆いい子)\*、。( )、。( )、\*( )ネー」

「tsilver† : w」

「黑白猫 : wwwwww」

「LILII : w」

「ライア : w」

「星籠 : OVERLOADはいい人しかいないよねw」

「風巳 : 自慢のギルドです」

「黑白猫 : よせやい)\*、。( )」

「LILII : くしねさん照れてる？w」

明日からのイベントが楽しみだ。微笑ましいギルドチャットを眺めながらそう思った。



## シーズイベント（後書き）

たくさんのお気に入り登録ありがとうございます。

4 / 2 4 一部文章修正 4 / 3 0 誤字修正

## イベント開始が待ちきれない

目覚まし時計に起こされることもなく、ぼんやりと覚醒する。だるい。時計を確認したら10時だった。10時で。夏休みの素晴らしさに感謝しながらベッドから這い出る。リビングに行く、ソファに座った美雨みうがテレビを見ながらでっかいマグで何かを飲んでいた。

「あれ？お父さんとお母さんは？」

「買い物」

「美雨は行かなかったの？」

「うん」

「朝飯は？もう食べた？」

「ううん、食べてない」

「そっか。食う？」

「食べる」

「あいよ」

美雨は俺の2個下の妹で今は中学三年生だ。まあ、特にこれ以上付け加えることないや。兄妹仲は悪くない・・・と思う。でも美雨はすっげー気分屋で、マジで二重人格なんじゃねーかと俺は疑っている。機嫌がいい時はハンパじゃなく甘えてくる。でも機嫌が悪い・

・っていつか虫の居所が悪い時は話しかけただけでキレル。そういう時は目が据わってるので、あ、今日は駄目だなって思ったら話しかけないようにはしている……。んだけどこいつ勝手に部屋に入ってくるんですよ。しかもノックとか全然しねーの。何なの？俺だつて思春期真っ只中なのに。入ってきて欲しくないから部屋のカギ閉めたことあるんだけど、こいつカギ開けるまで部屋の前で騒ぎまくったからね。完全にヒステリー。

キッチンに入ると味噌汁を温めるために火をつける。今日は油揚げと豆腐とねぎの味噌汁だ。俺はパン派なのでトースターに食パンをセットする。フライパンを取り出してコンロに置いてから、冷蔵庫からベーコンと卵を取り出す。

「美雨。パンと目玉焼きでいい？」

「うーん……。うん!!」

ソファから動く様子のない美雨が遠くから返事をするのを聞くと、さっそくベーコンを4切れフライパンにぶち込む。焦げないように注意しながら最初から強火で一気に焼いていく。思ったより油が出なかつたので一応オリブオイルを数滴垂らしてから卵を2個落とす。あ、皆さんは目玉焼き、どうやって焼きますか？俺は俄然、黄身はトロトロの状態で仕上げるんですけど。たまに黄身まで完全に固まった状態で食卓に並ぶと朝から悲しくなるんですよ。あ、聞いてない？はい。

皿を用意して、焼きあがった食パンを並べると、その上にベーコンと目玉焼きをそれぞれ乗せる。塩コショウを軽く振りかけてから、マヨネーズを網状にかけて、完成。

「美雨！出来たからー、運ぶの手伝って」

「んー」

マグの中身をごくごく飲みながらキッチンに入ってきた美雨にお椀によそいだ味噌汁を持たせると、俺も目玉焼きonパンを両手に後続く。和洋折衷もいいとこだが、どうしても朝からご飯が食べられないのが俺の体質なのだ。

「いただきます」

「いただきます」

もしかもしや食べていると美雨が俺のマグと牛乳を持ってきてくれたので飲む。

「どっか行くの？」

美雨が服に着替えていたので聞いてみる。どこにも出かけない時、美雨は基本ユニクロのスウェットだ。ていうか俺も今スウェットだけ。

「午後から塾」

「あー、ね？夏期講習か」

「違う。普通の授業。夏期講習はもうちょっと先」

「あ、そ」

「あ、そうだ。・・・礼さ」

「ん？」

ちなみにうちの妹は、兄である俺を呼び捨てにする。どつなの！？それってどつなの！？って思うけど、まあ俺も名前呼びだし人のこと言えねーか。

「最近夜中誰と喋ってるの？電話？」

「え」

「部屋から聞こえてくるよ、笑い声とか」

「おおっ・・・」

「あんまうるさくしないでね」

「・・・はい」

妹からお叱りを受けた俺はしょんぼりと残りのパンに嚙り付いた。

「あと、空いてる日あったら買い物付き合っつよ」

「いや、友達と行けよ」

「行くよ？でもいいじゃん、礼とも行きたいんだし」

「えええ・・・」



と逡巡していたらスカイプのチャット欄が開いた。

『神谷、居る?』

慌ててチャットを打ち返す。

『いるよ』

『あ、居た』

『どした?』

『神谷、昨日ジエネシスログインした?』

『したよ?』

『あ、じゃあイベントのことは知ってるんだ』

『ついかそれを野崎に教えてあげないと思ってた』

『そっか。あ、通話できる?』

慌ててヘッドセットを装着する。

『出来るよ』

『かけていい?』

『おっ』

返信をしてから数秒後に間抜けな「ぷーっぷっぷー」という音が鳴り響く。

「・・・何か、久しぶり」

野崎が恐る恐るといった感じで話す。確かに、思えば2週間弱は話していないことになる。学校で同じ教室にいても、俺と野崎の視線が交差することなんてめったにないのだ。野崎は学校でだって俺と喋ることに抵抗はないんだろう。ただ、俺がどうしても構えてしまふことは、実際に証明されたし、もし教室で野崎と話したらって想像したら、今みたいに話す自信はまだ無い。そんな状態で、音声チャットすら間を空けたのだから、まあこんな空気にはなるだろう。

「だなー。昨日は野崎ログインしなかったじゃん？あれ？って思った」

「ああ、昨日はね、志保と里奈と智代の4人でカラオケ行って・・・家帰ったらクタクタで気がついたら寝ちゃってて」

「あ、マジか。俺ら最近カラオケ行ってないわ」

「え、サ・・・神谷たちってカラオケとか行くの？矢野君は想像付くけど、遠藤君とか前橋君が歌ってるのちよっと思像できない・・・っていうか神谷何歌うの？」

「俺？いや、言っても分かんないと思う」

「言ってみてよ」

「・・・Over Arm ThrowとかNorthern19



とかStack44とかUNCHAINとか……」

「……?」

「ほら、やっぱりわかんねーじゃん」

「有名なの?」

「どうだろ、実際歌ってもポカーンってされるわ」

「ふふっ」

「野崎は?何歌うの?」

「……私?私は……割と古いの……今時の歌は分かんないし」

「例えば?」

「え……。BONNIE PINKとか……」

えええ!?!まさかの!?!ちょっと聴いてみたいわ。言わないけど。

「……イベントだけど、内容凄くない?私、絶対靴出したい!」

しばらく関係ない話をした後、野崎が興奮気味に言う。こいつ、ほんと『ジエネシス』好きだなあと思い、俺も嬉しくなる。

「ね!俺も絶対手に入れたい!このイベントじゃないと手に入れられない気がするし!」

元々鞆は生産系のアイテムで、普段から入手出来ないアイテムつてわけでは実は無い。でも、鞆の生産に必要な素材を入手するためには最高レベルのボスモンスターを倒したり、ある一定の城を所有したりしないと駄目なのだ。そのため、鞆はその性能も相まってかなり貴重なアイテムとなっていて、露店にはまったく出回っていないのが現状だ。

「ね！神谷、今日予定ある？」

「いや、入れてない！『ジエネシス』やる気満々だった」

そう言うと野崎はキャツキャと笑った。ちよつとドキツとするくらい幼い笑い方だった。

「だよね！こんな一大イベントあったら外出れないよね！！私今日は夜まで狩る！！」

「もち、そのつもりだわ！！」

すっかり意気投合した俺と野崎はそのテンションのまま公式サイトに突撃したが、まさかのイベント開始がメンテナンス後の15時からだということを知ると声のトーンが落ちるほどテンションを下げた。

「・・・あと1時間位でメンテあるけどどうする？」

「あ、でも私全然ログイン出来てなかったから、インする」

「あー、ね？俺も露店巡ろうかな」

そう言いながらお互い『ジェネシス』のアイコンをダブルクリックした。

## イベント開始が待ちきれない(後書き)

礼はカラオケで皆の知らない歌を歌い、場を盛り下げるタイプです。

メンテナンスを待ちながら

『NANAKOがログインしました』

『黒白猫： お』

『ライアがログインしました』

『黒白猫： やっほー』

『にあ： こん』

『シシリア： 久しぶりー』

ログインしてみると、思ったよりもギルメンがログインしていた。やっぱり夏休み効果なのだろうか。まだ俺はギルメンのリアル事情には詳しくはないけど、くしねさんも星龍さんも大学生みたいだし、にあさんもシシリアさんもそうなのだろうか？まあ、イベントはソロで参加するよりは皆でワイワイやったほうが楽しいに決まってる。今まで散々、単独行動をしてきた俺は、このイベントへのワクワク感が尋常じゃないのだ。

『NANAKO： こんです』

『NANAKO： お久しぶりです』

『ライア： こんですー！』

『にあ： あとちょっとでメンテだよー！』

『黒白猫： イベント始まったら皆一気にログインしてくるよね』

『シシリア： たぶん、そうですね！ 狩場空くかなあ』

『ライア： 風巳さん来るでしょうか？』

『にあ： うーん、どだろ？』

『シシリア： マスターね、本気で店開けるか悩んでたよ』

『黒白猫： ちょｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ』

『NANAKO： ええ』

『にあ： 風巳さんｗｗ』

『黒白猫： 何て店長だｗｗ』

『ライア： え！？風巳さんは店長さんなんですか！？』

『シシリア： 喫茶店のマスターなんだよｗｗ＞ライアさん』

『にあ： リアルでもマスターっていうｗｗ』

『ライア： すげえ！！』

『マジかよ・・・リアル店長って』

思わず声を上げると、野崎もマイクの向こうで笑い声を上げる。以

前、野崎が風巳さんのリアル事情をちよつとだけ漏らした時のことを思い出した。あの時野崎は「風巳さんは自営業だけど詳しくは知らない」って言っていたはずだ。けど、チャットのやり取りや今の様子を見るに、知っていて俺には教えなかったのだからうと思えた。きつと「マスターはリアルでもマスター」というネタを少しでも引つ張りたかったのだろう。いやいや、俺じゃあるまいし深読みしすぎか。

俺は露店を巡ろうとしたが、思ったよりも出店が少なかったため諦めた。よくよく考えれば、メンテナンスが入れば強制的にサーバーからログアウトさせられるのだ。露店を出店していてもどうせそのうち追い出されるとなれば、やる人も少ないのだろう。あまりにも暇だったので、今のうちに移動をしまおうと思い、初心者ダンジョンのある大陸までポータルで移動をした。

「神谷はどこで狩りするの？」

「ん、まあ沸き場でやるっかなって思ってたんだけど、効率考えたら初心者ダンジョンでもいいのかなって」

「ああ、初心者ダンジョン込み合いそう」

「ね。早いとこ最下層まで潜って、場所確保しようと思って」

「……あ……のち」

「ん？」

野崎にしては随分齒切れの悪い口調だ。珍しいことだなとぼんやりと思っていると、野崎が少し早口になりながら言ってきた。

「い、一緒に狩りしない・・・」

「え、するでしょ。普通に」

「・・・え」

「いやいや、野崎。こんな通話までして、別々に狩りするのが逆におかしくない？え？俺、最初からそのつもりだったんだけど・・・」

あれ？俺また何か勘違いしてた？今度は踏み込みすぎた感じ？

「そ、そう？・・・」

あれ？何だ？この空気。何か若干気まずい。え、野崎もつと喋ってこうよ。何故か野崎はだんまりを決め込んでいる。

「あと10分位？メンテまで」

「・・・そうだね」

「そろそろログアウトしとく？」

「うん」

言葉少ななままの野崎に若干戸惑いながらもチャットを打つ。

『ライア： じゃあ一旦落ちますね！メンテ終わったらまたすぐインしまーす』



『黒白猫：俺も落ちるわ！皆また後で！』

『にあ：あ、落ちます！！』

『シシリア：あ、俺も！！後でねー！』

『NANAKO：一旦〆です』

ログアウトを済ませると、手持ち無沙汰になったことに気づく。メンテが終わるまで後一時間だ。あれ？後一時間・・・あと一時間何すんの？

「・・・神谷、待ち時間何するの？」

「ね。何もすることない・・・」

何も考えてなかった。つーか、あと一時間・・・野崎と通話したまんまじゃねーか・・・！！ぶっちゃけると、『ジエネシス』をやつてない状態で野崎と会話繋げる自信がぜんっぜん無いんだけど。

「・・・」

「・・・」

うおおー！！駄目だ！この空気駄目だわ！！すでに沈黙ですよ！俺？ううん、一言も発してない！！これ？これは心の声だから！！めっちゃ大声を発してるっばいけどその実、お口はチャック状態だからね！お口はチャックで！！今日び小学生でも言わないわ！！

自分でも何を考えてるのかよく分からないけど、正直冷や汗がすこ

い。この空気凄い。通話だつーのに、まるで日ごろ女の子と対面で接する時ばりの無言を貫いてしまう。あれ、おつかいな！？さつき通話しはじめた時はそうでもなかったのに……。あ、野崎からの発言が無いからか。え、何でだろ、俺変なこと言った？この空気作り出したの俺なの？

「……神谷」

野崎さん！！マジありがとございます！！話しかけていただけありがとうございます！ヘッドホンが吹っ飛ぶ勢いで頭を下げたかったけど自制して心の中で土下座をしておく。

「な、何！？」

「……」

……何かさつきから野崎が変なんだけど。何か言いたいことでもあるんだろうか？

「……ギルドに誘ったじゃん……私……」

「え？……う、うん」

ん？今更またその話？野崎は凄く言いづらそうにぼそぼそと話し始めた。

「……最初、身近に『ジエネシス』やってる人がいたのが凄い嬉しくって……。だから結構無理やり誘って……。たのね？正直、神谷がどう思うのかとか、あんま考えてなかったし……」

「・・・だから、その後神谷が話しかけてくれなかったりして・・・私凄いい焦って・・・廊下で言ったことも・・・正直、神谷が悪いわけじゃないの分かってて・・・わざと責めるようなこと言ったんだ。そしたら神谷・・・きつと話してくれると思ったから・・・」

「・・・通話でもいいから、話したくて。『ジエネシス』のこと、話したりとか・・・狩りしながら話したりとか・・・凄いいしたくて・・・」

「・・・ごめんね」

顔は見えない。当たり前だ。パソコンの画面を睨みながら思う。でも、俺はパソコンの画面を凝視していた。暗い画面に映るブツサイクな自分の顔を眺めながら俺は言葉を返した。

「あのね、野崎。俺はね、知ってると思うけどめっちゃ女の子と話すの苦手なのね？」

「俺はね、女の子が凄いい怖いだわ。女の子がこっち見て何人かで話してるのを見ると、俺の悪口言ってるのかな？とか思うの。素で。すげえ被害妄想激しいの」

「でね、野崎とぜんっぜん教室で話さないのは、話せないのは俺に問題があるの。そこは野崎のせいじゃないわけ。俺の性格に問題があるわけ。だから、野崎は謝らなくていい。・・・前も言ったけど、俺はすげー野崎に感謝してるからね。ギルド誘ってくれたこと。でもってね、『ジエネシス』の話するの、俺もすげえ楽しいから」

「・・・だからね、俺別に無理してるわけじゃないから。俺無理してこうやって通話してるわけじゃ全然ないから。狩りも、一緒に行

きたいから誘ってんのね？」

「……うん」

「おっけーですか、野崎さん」

「……うん」

「……あと一時間はメンテ長いよね」

「……長い。……神谷何か面白い話無いの？」

「野崎、それは芸人ですら嫌がる話の振り方だぞ」

有り得ないくらい饒舌になった自分に内心ドン引きしながら野崎とたわいもない話を続ける。たわいもない話をしながら思う。女の子相手に、自分の思っていることここまで正直に話したの初めてかもしれないなど。……いや、だから何だっつうんだ。

メンテが終わったのは少し遅れて一時間半後だった。俺と野崎は一時間半、会話が途切れることは無かった。

## メンテナンスを待ちながら（後書き）

意識して引っ張ってるわけではないのですが、イベントがはじまり  
ません

## 欠片集め

メンテナンス終了時間になってもログインすることが出来ず、やきもきしていたが、30分後、ログインすることに成功した。

「あ、入れた！」

「ホント?・・・あ、ホントだ」

待ちかねていたイベントにようやく参加できる。早めに狩場を確保しなければ、すぐに埋まってしまうだろう。野崎と色々相談して、まずはアインガルドの最下層で狩りをすることに決めた。適正レベルが25〜30の狩場のため、経験値は期待できないが、初心者ダンジョンの中では湧きも悪くなく、最寄の町からでも、大陸と大陸をつなぐ通路を2回通過しなければいけない立地の悪さを鑑みて、あまり人は来ないだろうと予測した。って言うても同じような考えを持つ人もきつというだろうから、早めの行動が肝心だ。

『ライアがログインしました』

『NANAKOがログインしました』

『LILII : こんにちは』

『黒白猫 : おかえりちゃん!!』

『にあ : おかえり!』

『星龍 : こんにちは!』

『ライア：　どもです！』

『NANAKO：　こんです』

俺はログアウト前にいたフィールドから更に移動し始めた。

「野崎は今どこ？」

「え？もうアインガルドだよ。ポタに登録してあるから」

「あ、マジか。ごめん俺今走ってる」

「いいよ。待つよ」

『シシリアさんがログインしました』

『シシリア：　やっと入れた！！』

『黒白猫：　おか！』

『星龍：　こん！』

『ライア：　おかえりなさい！』

『NANAKO：　1時間半は長いですよね』

『LILIE：　ねえ！すごく待たされた気がするw　こん！>  
シシリアさん』

『にあ： あ、さつき掲示板チェックしたら風巳さんが書き込んで、今日は19時から皆で狩りいこうよって!』

『黒白猫： 把握!』

『シシリア： 今頃そわそわしてるんだろつなあWWW』

『ライア： 掲示板ですか??』

チャットの流れを止めるような気がしたが、思わず打ち込んでしまふ。と同時に野崎にも質問する。

「野崎、掲示板って何?」

「あれ、神谷に教えてなかったんだっけ?」

「ん?」

「あのね、OVERLOADメンバー専用のギルドホームページがあるの。ちよっと待って今アド教えるから・・・」

そういつてしばし無言になる野崎。そっか、ギルドならホームページを持っていてもおかしくない。・・・そういえば俺、OVERLOADのギルドールとかもすっかり把握できてないような。・・・ちゃんと聞かないと駄目だよな普通。

『黒白猫： ?』

『NANAKO： あ、そっか。掲示板知らない?』



『にあ： え!』

『シシリア： そっか!？あのね、ライアさん。うちのね、OVERLOADのギルドHPがあるんだよ!』

『ライア： そうなんですネ!俺、チェックしてなかったです』

『LILIE： 何だかライアさんって、ホント最近入ったって感じがしないから皆知っているものだって思ってたかも』

『黑白猫： ホントだよWWWWWW』

『にあ： そっかそっか。じゃあアド貼っておくから!』

そういつてにあさんはURLをチャットに貼り付けてくれた。

「あれ、野崎。まだ探してる?」

「ん、スカイプのチャットで送っておいた」

「ありがとう!!後で見えておくわ」

『LILIE： 狩場まだ空いてますね』

『にあ： そのうち混むかもね』

『黑白猫： 俺は今バファルの地下2にいるわ。ガラッガラよWWW』

『W』

『シシリア：何か意気込んでたけどそんなでも無いのかな？』

『星龍：いや、さっきノイトマ行っただけど入り口にすでに何人が居てさ、しかも一人が赤ネームだったから退散してきたwww場所によっては混んでるよきつと』

『にあ：ドロップイベントだと初心者Dのが混むんだよなあ』

『LILLI：さくさく狩れますからね』

『ライア：もう皆さん狩りされてるんですか？』

『黒白猫：いえーす！』

『LILLI：してるよー！』

『にあ：b』

『シシリア：俺も早く移動しようつと』

もう皆狩り始めてるのか。チャット中も移動を続けたライアはようやく通路を通り抜けた。フィールド上を駆け抜けてアインガルドに突入する。入り口からすぐのところにNANAKOが座り込んでいた。

「ごめん、行こう！」

パーティー申請をNANAKOに投げる。

「ずっと座ってたけど誰も来なかったから、大丈夫。ガラガラだよ」

「あ、マジか」

「でもそこらへんに湧いてるの何匹か倒したけど、ポーションしか落とさなかった」

拗ねたような声に思わず笑ってしまつ。

「まーだ始まつたばっかじゃん!!最下層行こう!!」

NANAKOが立ち上がる。

「ん」

「よっしゃ!!・・・あれ、何かテンション上がってきた!!」

「・・・ふふっ」

「やべえ超楽しい!!まだ何も出てないのに!!」

「ホントだよ!!」

弾むような野崎の笑い声を聞きながら改めて思う。やっぱり一人で狩りするより、誰かと狩りするほうが嬉しいし、楽しいんだなど。

道中に道を塞ぐモンスターを殴りながらも最下層へと降りていく。  
アインガルド地下4階。

「リザードマン」「やっビッグハンマー」など、かつては強敵だったモンスターたちも、レベル三桁に届こうかという今のライアにとっては剣を装備しなくても素手1発で吹き飛ばような相手だ。ただ、

読みはばつちりだったようで、最下層に他のプレイヤーの姿は無く、最下層はモンスターで溢れかえっていた。

「そうだ神谷、アイテムはランダムゲットでいいから」

思い出したように野崎が言う。パーティーを組んでいる時、経験値は等分されるが、アイテムの取得に関しては取得方法が選択出来る。モンスターを倒した本人のみがアイテムを取得できるデフォルト、倒したプレイヤーに関わらずアイテムが取得できるランダムだ。

「え？いいよ、偏ったら悪いし。つーか野崎のが狩り効率いいんだから、確実に野崎のが損するだろ」

「ううん、ランダムにしようよ。ね？」

なぜか頑なな野崎に説得されてアイテムはランダムゲットにした。律儀な奴。

「っしやー！じゃあ始めますかあー！！」

ライアをモンスターたちが固まっている場所へ走りこませる。次いでモンスターたちの中心で「ブレードウェーブ」を叩き込む。ライアを中心に、周囲のモンスター達が一気に爆散した。ポーションや魔石、それに小額のお金が辺りに散らばる。

「出ないー！！」

思わず叫ぶと野崎が吹き出した。

「そんないきなり出たら強運すぎるでしょ」

「確かに!!」

「神谷テンションどうしたの？」

「分かんない!!楽しくなっちゃってる!」

「ふふ、ね、楽しいね!!・・・どーん!!」

NANAKOが「ライトニング」で周囲のモンスター達を吹き飛ばす。視界に入っていたモンスターが一瞬で消えた。

「ちょ、俺の分も残しといてよ!!」

「どーん」

「野崎!!まだ湧いてない!!まだ湧いてないからね!？」

バカみたいなテンションで狩りを続ける。走り回りながらモンスターをたこ殴りにしていく。それでもイベントアイテムは一向にドロップしない。10分・・・20分・・・刻々と時間は過ぎていく。

「・・・なかなか出てこないね」

「んー、まあポーションみたいには出ないよなあ・・・でもイベントアイテムなんだからもっと出るよ!!とは思っけど」

「貰えるアイテムが凄いいもんね。仕方ないかも」

ギルメンの皆も同じような状態らしく、さっきから皆の発言が不満

気だ。

『黒白猫： うわあ！！すげえ人来た上に横された・・・狩場移動するわ』

『ライア： ありゃりゃ』

『シシリア： 皆気立ってんのかもなあ』

『にあ： 出ないよ！！みたいなの？』

『LILIE： こないだのGWイベみたいにとんどん出ればいいのに・・・』

『星龍： 何か運営のあんまアイテムあげたくない感が凄いですね』

『黒白猫： WWWW』

『シシリア： くれよおおお！！そこはああああ！！！！』

『ライア： 釣った魚に餌くれよ！！って感じですよね』

『にあ： WWWWWW』

『LILIE： WW』

『黒白猫： しかし出ない！！！！』

『NANAKO： もう30分以上狩ってるのに・・・』

『シシリア： まあ、まだまだ！！そのうち出るよ！たぶん！！』

「あ！！」

野崎が叫ぶ。

「出た！！」

「え！？」

NANAKOのいる場所にカーソルを合わせると確かに近くに見慣れないアイテムが落ちている。『魂の欠片』だ。

「うお！！マジだ！！」

「やった！」

「拾いな！早く拾いな！！」

野崎がすぐに拾う。

「あ、私に来た！！」

「うおー！俺も早く出そう！！」

もうこれ出ないんじゃないの、位まで下がっていたテンションが一気に回復する。よっしゃ！！リザードマンどこーん！！はい出たポーシヨン！！分かってたけど！！

『NANAKO： 欠片出ましたよ!』

『シシリア： マジかあああ!!!』

『黑白猫： キタ (。。( )

!!!!!』

『LILIE： おめ!!』

『星龍： うおお!!おめ!!』

『にあ： おめでとおおお!!!!』

『ライア： うおー!俺も出す!!』

リザードマンやビッグハンマーを次々とスモールポーションや魔石に変化させる。いや、『欠片』でろよ!!

「何貰えるかなあ?ねえ、神谷、何貰えるかな!？」

すでに野崎は交換した時のことを考えてウッキウキのようだ。声のトーンまで明らかに高くなっている。ちくしょう!!でもそこまで楽しそうにされると何かもう許せる!!

結局、皆で競い合うように狩ったが、『魂の欠片』はかなりドロップ率が低いのか、手に入れたのは皆1時間強ほど狩って、平均2個だった。

あ、俺?俺ですか?

「……本当にいらないの?神谷」



「いいって。それは2個とも野崎のもんでしょ」

はい、この1時間、ドロップしたのは野崎のみでした。更にランダムゲットで2回とも野崎に行くという。いや、それ自体はむしろありがたい話なんだけど。だって野崎が出したもんだからね。問題はそこじゃなくて。何で俺にはドロップしないのって話だよ!!

ちくしょう!!ポーションがアホみたいに溜まる!!魔石もやべえ!!もう当分エグゾーストには困らないわ!!

「でも……」

「……野崎、何かさ。いや、俺ギルドの人と狩りしてた時もあったんだけどさ」

「え?うん」

「こつやってさ、出たアイテムどうしようか?とかさ。ドロップ率悪いよね」とかさ。

そういう話出来るのってさ、超楽しいんだけど」

「……うん」

「だから、野崎が取ったときだよ。それ野崎のだから」

「うん。……ありがと」

何が「だから」なのか自分でもよく分かんないけど、言いたいことは野崎には伝わった……と思う。

強い装備作って、ボス狩りに行って。PK追い返して、レアアイテム拾って。『ジエネシス』はホント楽しい。でも何か、今は思うんだけど。楽しみ方ってそれだけじゃねーよなあ。

『風巳さんがログインしました』

『風巳： ー(・)』

『黑白猫： かぜみんキタ

(。°)

!!

!!』

『LILIE： こーーーん!!』

『星龍： お!!こん!!』

『ライア： マスター!こんです!!』

『シシリア： マスター!紅茶めっちゃ飲みたい!!』

『にあ： マスター、いつものやつ頼むよ!!』

『風巳： (。°)!!?』

『NANAKO： WWWW』

『星龍： WWWW』

『黑白猫： 悪ノリWWW』





「・・・俺ホントOVERLOAD入ってよかったわ」

しばらく笑い続けたあと、思わず口から出た言葉だった。そうだね！みたいなリアクションを返してくれると思ったのに野崎から返事が無い。

「・・・」

「野崎？」

「・・・」

「あれ？聞こえてる？」

「・・・神谷？」

「ん？」

何だよ聞こえてるじゃんか。

「楽しい？」

「めっちゃ！！めっちゃ楽しいな！！」

あれ、また無言じゃん。野崎？話しかけようとした瞬間、とんでも無い爆弾が落ちてきた。

「・・・私もすっごい楽しい！！」

何かもうガード全部降ろしたような人懐っこい声。もう何、ちょっと

と想像して欲しいんですけど、女の子にぜんっぜん慣れてない男がいるとするじゃないですか。で、ちょっと女の子に親密にされると勘違いしてのぼせ上がってしまうじゃないですか？もう俺は正直一瞬で勘違いしそうになったわ。それ位の破壊力。

マジで心臓に良くない・・・。

「・・・神谷聞いてる？」

一瞬でいつも通りのテンションに戻った野崎の声を聞きながら、俺はバクンバクン鳴ってる心臓を確かめながら、あ、そういえばここには心臓があったよな。なんていう頭悪いことを心の中で呟いていた。

欠片集め（後書き）

5 / 2 誤字修正

サムライ達がカラオケにいくとどうなるの？

結局、昨日はギルドの皆と延々と狩り続けた。んで、何とか皆がまとまった数の『魂の欠片』をゲットすることが出来た！！ランダムゲットにしたけど、結局トータルで出た数を人数で割って皆で分けた。パーティーを組んだからなのか、それとも単純に狩り効率の問題なのか、ギルメンでした夜の狩りはドロップ率が好調で、皆が2個ずつ『魂の欠片』を拾って狩りはお開きになった。

本当は、今日も朝から『ジエネシス』をやるうと思ってたんだけど、昨日の夜にメールがまさやんから来てて、どうやらノブもツトムも今日は空いてる日らしく、午前から遊ぶことになった。俺らはほとんど、っていうか俺を除いて運動部なので、言うほど夏休みは遊ぶ機会が無さそう。二つ返事でまさやんとノブ、ツトムに返信する。ちょっと迷ったけど野崎にもメールをすることにした。別に今日も午前から一緒に狩りをするって約束をしたわけじゃないし、かなり迷っただけ。

『おはよう！今日は、まさやんたちとカラオケ行くわ！野崎の話聞いてたら行きたくなった』

実際この短さのメールを作るのにマジで10分位かかった。我ながら引く。しかもかかった時間の割りに内容薄い。野崎からしたら聞いてねえよ！！って話だよなあ。でも何かなあ……。言わないのもなあと思っちゃうのは何なんだろう。ええい、ままよ！！

送信ボタンをクリックしてから、二つ折りの携帯を閉じたり開いたりしながらゴロゴロする。さ、そろそろ着替えないとな。











突然の来訪者によってテンションを適正値まで下げた俺達は、電モクを待ちながら無言でコーラをすすり続けた。暫くして店員さんが新しい電モクを持ってきてくれた。店員さんの気配が無くなるまでしばらくコーラをすすり続ける。

「・・・つしゃー!!」

まさやんの叫びを合図に皆がテンションを戻し始める。

「まあ、とりあえず!!一曲目入れるわ!!!!」

まさやんの選曲で一曲目を入れる。

「じゃあ行くぞ!!せーの!!」

「」「」「じゃんけんぽん!!ぽん!!」「」「」

「はい!ノブから!!」

「時計回り!?!」

「そう!!」

「おっけ?行くぞ!!!!」

裂帛の気合を入れる。と同時に部屋の真ん中で円陣を組む。今日はノブからのスタートだ。

俺らのカラオケは始めから普通に歌うことはまず無い。画面に出る歌詞を一人ずつ歌い、マイクを回していく。サビは基本皆で大合唱だ。その間は直前まで歌っていた人間がマイクを持ち続ける。そし

て、最後にマイクを握っていた者が負け判定となる。まあ、負けつつてもだから何？って聞かれるとすげえ困るんだけど。イントロが流れ始めると同時に俺達はぐるぐる回りながら踊りだす。歌の間は止まっても負けだ。とにかくバカになる。それがルール。

歌いながら踊り狂う。手を叩きながら合いの手を入れる。これが最高に楽しい。まあ最初からこの勢いだと、後半は目も当てられない状態になるんだけど。あ、でもあんま騒ぎすぎるとお店に迷惑だから、防音が効いてる範囲内で留めて置くのがポイントになる。結局一時間半強、俺たちは踊り続けた。

「……もう、動けないわ」

「俺部活並みに疲れてるんだけど」

「ちょっと休憩入れようよマジで……」

全会一致を見せた提案により、場はしばらく静寂に包まれる。

「……はい、『似てない物まね選手権』〜!!!」

「休憩短いなあ」

「……まさやん生き急くなあ」

まさやんがおもむろにタンバリンをたたき始める。

「はい!!!じゃあーまずは礼ちゃんから!!!……えー、ケイン・コスギ!!!」

「はあ!？」

「はい、3、2、1!!!」

「大丈夫、君なら出来るよ!!!ファイト 一発」

「あ、可愛い!!!」

「礼ちゃんセーフ!!!」

『似てないモノマネ選手権』は似てない物まねを延々と繰り返すゲームだ。若干似ている物まねをしてしまった人が出た瞬間に終了となる。ここで重要なのは、似てない!!面白くない、では駄目だということだ。似ている物まねが笑いを誘うのは当たり前のこと。けれど、似ていない物まねは場を冷めることにしか繋がらない。そこをあえて似ていない物まねで笑いへ繋げることが出来れば、ある時ふいに物まねを強制される場に放りこまれても、怖がることなんてない!!!俺達は誰と戦っているんだ。

俺は何とか自分の順番をパスし、ツトムへ繋げる。

「次!!!宮崎あおい!!!」

「森ガールつか?いやー自分、海派なんで」

「宮崎あおいはそんなこと言わねえよ!!!」

「うん!!!悔しいけどセーフ!!!」

「はい、次!!!ケンタッキーフライドチキンのカーネル!!サンダー」

ス!!!」

順番の回ってきたノブは一瞬表情を曇らせたが、すぐに立ち上がり、両手をひじの部分から挙げてポーズをとる。

「傘立てにも、なるよ!!!」

「店頭の人形じゃねーか!!!いや、置くなよ!!!」

「判定は!?!」

「ん!!!!!!!!!!!!!!まあ、セーフ!!!」

「はい、次!!!品川庄司の庄司!!!」

「ミ!!!!!!!!!!!!!!キティ!!!!!!!!!!!!!!」

「はい、若干似てるからアウト!!!」

「ええええ!!!?」

今日の罰ゲームはまさやんに決定だ。

「いや、ええええ!!!?今の似てた!?!」

「割りと。あとよくよく考えたら、まさやんの彼女の名前もミキちやんだし……」

「それは今関係なくない!?!」



アウトになった奴に待っているのはもちろん罰ゲームだ。罰ゲームって言っても場を締めるボケをさせられるだけで、うんまあ結局はボケさせられるんだけど。

「ちょっとごめん時間くれる?」

「何が」

「目……瞑って……くれる……?」

まさやんが上目づかいで媚びてくる。

「いいけど！普通に言ってくれよ……いや、むしろそれは彼女に言えよ……」

「ちょ、まさやんもう一回言ってくれ?」

「ツトムは何のスイッチが入っちゃったんだよ」

まさやんの言うとおり皆で目を瞑る。渋々って感じで目を閉じつつもツトムもノブもニヤニヤしていた。目を瞑らせることは自らハードルを上げることに等しい。俺達の期待は嫌でも高まっていく。

「……っしやー!」

暫くして聞こえたまさやんの気合の一言を皮切りに皆で目を開ける。

「ええー!」

まさやんが腰に手を当てて仁王立ちしていた。最高の笑顔で。

「すげえ！！はっぱ隊の葉っぱが無い人みたいになってる！！」

「っーか全裸じゃん！！まさやん！！さすがにそれは駄目だ！！」

「やってやった！！」

「やってやったじゃねえよ！！上手いこと言えてないからね！？」

「やって！！やった！！やって！！やった！！」

「跳ねんな！！履けよまず！！」

一瞬で満面の笑みを曇らせたまさやんは寂しそうにトランクスを履き始めた。

「ほんと俺らだから友達続けるけどマジでギリッギリだからな！！」

若干の説教タイムによりどんどん服を着始めたまさやんはようやく現代人レベルまで戻ってくることが出来た。やんちゃ過ぎる。

「・・・っーか・・・歌わね？」

至極全うなツトム提案により残りの1時間は穏やかな時間を過ごしたのだった。

サムライ達がカラオケにいくとどうなるの？（後書き）

パソコンがフリーズして1時間分の作業が吹っ飛んだ怒りを込めて  
みました。

## 兄妹

目覚ましを叩くこともなく目を覚ます。自然起床って素晴らしいですね。昨日は結局サイゼでミラノ風ドリアをつつきながら4人で話し込んでいたために、帰ったら23時を過ぎていた。そのまま風呂に入っただけで寝てしまったために、昨日は『ジエネシス』にログインできていないのだ。イベントは2週間続くとはいえ、ネットゲは時間をかけた分、結果につながっていく。イベントも同じだ。昨日の分を取り返そうと思い、もそもそと着替えると早速パソコンの電源を付けた。朝飯は後だ。今日は一日がっつり『ジエネシス』やろう！そして今度こそ、「魂の欠片」を取ろう！俺がそう心の中で叫んだ瞬間だった。

「礼、起きてる!？」

ノックもせず勢いよくドアが開けられると美雨がズカズカと部屋に入ってきた。

「うおつ。何!？」

「起きてるし。朝ごはんは？」

「え、後でいいよ」

「…またパソコン？朝ごはんも食べないですることじゃ無くない？」

「……」

実際その通りなので俺が何も言い返せずにいると美雨が近づいてき

てパソコンを覗き込む。

「…何してんの？」

「別に何でもいいだろ…」

「…っていつか何で隠すの？」

「隠してないだろ、別に…何？何か用？」

「あのね、私今日暇なのね。買い物行こうよ」

「…あー…」

「何か用事でもあるの？」

ネトゲがしたい。なんて言ったらこいつ絶対怒るな。…仕方ない。

「ん。いいよ」

「ホント？じゃあ準備終わったら教えてね」

そう言うと美雨が部屋を出ていった。部屋着のまま表に出るわけにもいかないのでクローゼットを開く。気に入ってる組み合わせは昨日一式着てしまったのでストライプの長袖シャツと七分のカーゴパンツに着替える。暑いかなとも思ったけど味気ないのでまさやん達に「木こりみたいだね」と言われたベストも羽織る。洗面所に行く。とワックスを手のひらに馴染ませて髪の毛を立てしてから、両手で掴むようにして髪をくっしゃくしゃにしてウェーブをかけていく。…夏休みだし後頭部とサイドにパーマでもかけようかな。

最後に前髪をワックスで整えて歯を磨いてからリビングに行ってみると、美雨がソファでテレビを見ていた。

「準備出来たけど」

美雨は振り返るとさっと全身をチェックするみたいに眺めて、頷く。

「おっけー。あ、ちょっと待って。お財布取ってくるから」

「…どこに行く？アウトレット？」

「うん！」

「ぜってー混んでるよな…この時間」

「夏休みだしいつ行ってもどうせ混んでるでしょ？」

「まあ、そうかもだけど」

美雨が自分の部屋に引っ込むのを見ながら俺も自分の部屋から財布の入ったバッグを拾い上げた。

家の外に一步出るとむわっとした熱気が襲ってくる。

「うっわ、あっつー!!」

思わず叫ぶと後ろの美雨も

「うっわ、何これ…焼けちゃっ」

とか言いながら日焼け止めを塗っている。準備いいな。

「美雨、なんか被るもん持ってないの？」

振り返ると首を振る。

「男もんだけど俺の持つてる帽子貸そうか？」

「…いいよ、この格好に礼の持つてる帽子合わなそうだし」

「あー…。なるべく日陰歩くか」

うちの家から駅までは割と近いけどそれでも歩いて15分はある。なるべく日陰のあるルートを選びながら駅まで歩く。

「美雨、勉強どうなの？」

「ん、順調だよ。成績も割と良かった」

「美雨は頭いいからな。別に心配することじゃなかったか」

「…礼は？」

「んー？あー…。通知表開いてないや」

「は！？自分の成績でしょ？」

「うん。家帰ったら見てみる」

「…信じらんない。お母さんもお父さんも何で突っ込まないわけ？」

「まあ、たぶんそんな変わんないでしょ」

「……礼、高1の三学期の成績は？」

「え？そんなん細かく覚えてないわ」

「…私の心配してる場合じゃない気がする……」

そんな風に会話しながら地元の駅に到着した。思ったよりも人の少ない電車に乗り込む。空調が効いている為随分と楽になった。座席が一つ空いていたので美雨を引っ張っていくと座らせる。そのまま立っているとこねたけど、無理やり座らせた。どっかの学校の部活男子と思しき連中が美雨をじろじろと見ていた為だ。別に見るのは一向に構わないんだけど。まあ、やっぱり本人ちよつと嫌そうだしね。だったらそんな露出多い格好すんなとも思うけど、まあ言ってもまだ子供だし。座った美雨にかぶさるようにして前に立って、美雨がそいつらから見えないようにした。

そんな俺の意図に気付いたのか気付いてないのか美雨は座席に座れたために電車を降りるまで終始機嫌がよかった。

目的地のアウトレットがある駅に到着すると電車から降りてすぐに自販機に近づく。無理無理。超暑い。朝取った水分はもう全部出たっつーかよく考えたら俺朝飯食ってないじゃん！！とにかく水分を欲していた俺はすぐさま自販機に泣きついた。アクエリアスを買うと午後の紅茶も一緒に買う。美雨に午後の紅茶を渡す。何故か不満気な顔をされた。

「あれ、喉乾いてなかった？」



「…私もアクエリアスが良かった」

「あれ、美雨午後の紅茶好きじゃなかったっけ？」

「…好きだけど、今はアクエリアスの気分だった」

「姫か！！内心で突っ込みながら美雨の手から午後ティーを取り上げるとアクエリアスを掴ませる。」

「…こっちは礼のでしょ？」

「あー、ね？俺は午後の紅茶の気分になった」

「…あ、そ」

ここで「ありがとう」位言ってくれろと俺も報われるんだけど、悲しいけどこれ、現実なのよね。

その後は美雨に言われるがままあちこちのアパレルを覗いて、楽しそうに服を選ぶ美雨を横目で見つつも自分の服を探したりして過ごした。結局ZuccaでTシャツを1枚だけ買った。

「これ可愛くない？」

美雨がワンピースを広げて見せてくる。デザインよりも思わず値札を見てしまう。アウトレットといえどもブランドものは大して安いわけじゃない。それに、中学生が着るものでも無い。まあ俺も高校生だけど。俺はせいぜい服やゲーム位にしか金をかけないけど、美雨は服に化粧品に小物に靴に鞆に…挙げたら切りがないほど金かける

からな。

「高くね？」

「私今日お金いっぱいあるよ。お小遣いきっちり貯めてるもん」

「…素晴らしい」

そしたらもう兄と言えることは何もないわ。どんだけ露出多めの服であっても…。

美雨も高校入ったらギャルと化すんだろうな。っていつかこいつ、すでに派手だもんな。

…野崎みたいになんのかな。まあ、いいか。なつても。

つーか野崎何してんのかな？昨日からインできてないしな、そんなしょっちゅう連絡取るわけでもないし。あいつ『ジエネシス』やってるかな今ごろ。「魂の欠片」何個集めたかな…。いいな、俺も早く集めたいなあ。

「……………」

気が付くと美雨が至近距離まで接近してこちらを覗きこんでいた。

「…何やってんの？お前」

「お前とか言うな。礼こそ何ぼーっとしてんの」

「ぼーっとしてた？」



「…礼さ、何かあった？」

注文を待っているとおもむろに美雨が質問してきた。

「は？何がって…何？」

「最近、よく笑うようになってない？」

「…どうで？」

「どこでも。今日も店員さんに話しかけられて笑ってた」

「…いやそりゃ笑うんじゃない？会話してたら」

「愛想笑いじゃなくて、凄い自然な笑い方。家にいるときとかと変わんない感じ」

「………？」

「女の店員さんだったでしょ？」

いや、そんなん言われても。確かに若い女の店員さんがすげえ話しかけてきたけど。

「ああいう時っていつもの礼だったら、強張った感じで相手するのに、今日は自然体だったよ」

「………そっ…かあ…？」

「自覚、ないんだ」

「あー…、うん」

「まあ、いいことだけど。私から言わせたら兄がコミュニケーション取れない人とか嫌だし」

そこで店員さんが注文したものをトレーに置いて持ってきてくれたので、受け取って机に置く。たっぷりマスタードとケチャップをかけたチーズドックにかぶりつきながら会話を再開させる。

「その言い方だと今までコミュニケーション取れてない人だったじゃない俺」

「だってそうじゃん。礼、今までうちに女の子連れてきたことなんて一度も無いし」

「………そんな美雨だってそうじゃん……」

めっちゃ小さな声で抗議したけど黙殺された。

「私が友達連れてきたときも超そっけなかったし」

「…いや、あれはさ」

「確かに桃達もキヤーキヤーうるさかったかも知れないけど」

桃ちゃん達というのは美雨の学校の友達だ。何度かうちに遊びに来たことがあったけど、何故か皆して俺の部屋に特攻をかけてきたことがあり、その時はかなり扱いに困った。

「…桃達うちに凄い遊びに来たがるんだけど」

ぶすつとした表情で美雨が言う。

「は？いいじゃん。遊びにすれば」

「……いいよ。今来たらきつと今以上に来たがるようになるし」

「は？」

「……話戻すけど、そんな感じだったのにずいぶん角が取れたんだなって」

「いや、そんな簡単に人は変わんないだろ……」

「何言ってるの？すぐ変わるよ…本人が気づかないだけでしょ」

目の前の妹が何を言わんとしてるのか正直よく分からない。まあ、俺みたいな根暗が女の子に対して自然な対応が取れるようになってきている…っつーんだったら、それは喜ばしいことな気がする。

「まあ、確かに変に構えるのは無くなったかも。人は見た目によらないんだなって思ったし、壁作るのは相手に失礼だなって思うし」

「…ふーーーーーん」

「……何その色々含んでそつな長さのふーんは」

「別に？まあ、でもいいんじゃない？今までがおかしかったんだよ」

「は？」

「美雨は礼が凄く優しいって知ってたしね」

「……は！？」

突然何言ってるんだこいつ。

「照れるなよ」

そっついながら美雨はひっひっひと笑った。

## 兄妹（後書き）

思春期かつ年近という難易度の高さでもこれ位の仲の良さの兄と妹が居ても

まあいいじゃないと思つのですが、どうなんでしょうか。



## 不安の色

帰り道を、美雨の買い物袋をぶらぶらさせながら歩く。

「せっかくの夏休みなんだし、もっと外出れば？旅行行くとかさ」

手持無沙汰な美雨がしきりに話しかけてくる。

「旅行？ああ、まさやんたちと行くわ。盆位に。大阪行く」

「へえ！いいね。私も桃たちとどっか行こうかなあ」

「おいおい、受験生」

「分かってるってば」

そんなことを話しながら家に着いた。もう3時か。正直、『ジエネシス』をやりたくて仕方なかった俺は、何故か部屋に招きたがる美雨を振り切って部屋に戻った。

「せっかく面白くなってきてるのに」

と不満顔で言われたけど、何言ってるのかよく分からん。何？俺自身が何か面白いことになってんの？

エアコンのスイッチを入れつつ、パソコンの電源も立ち上げる。はつきりいってイベントに関しては遅れを取ってる。後でもっとインしておけばよかった！なんて思わなくて済むように、暇さえあればインしよう。

『ライアさんがログインしました』

『風巳： こんにちは』

『LILIE： あ、こん！』

『NANAKO： こん』

『にあ： こんー！』

『シシリア： ちょうどいいときたなーライアさん』

『ジエネシス』にログインしてみたら、結構なメンツが揃っていた。あ、野崎もインしてた。そう思った瞬間、つぶやきチャットが飛んできた。

『NANAKO： 出かけてたの？』

つぶやきってほとんどしたことないなあと思いつつ返信する。前だったらソロ狩りがほとんどだったし、野良でパーティー組んでも効率優先な感じでほとんど発言なんかしなかったしなあ。今思うと殺伐としてんなあ。いや、それでもかなり楽しかったんだけど。ていうかギルチャで良くないか？と思いつつも、そういえば俺らがリアルで接点あるの知ってるのは風巳さんだけなんだと思いつく。

『ライア： 出かけてた！野崎は朝からやってた？』

『NANAKO： うん。それでね！』



ヘッドホン越しに野崎の笑い声が漏れてくる。

「いいでしょ！昨日ね、狩りしてまた欠片が3個手に入って、キリがいいから交換しに行ったの。そしたらね！2個目交換したら出たの！！」

「すげえ！！」

「すっごいでしょー！！！」

言いながらNANA KOがライアにアイテム交換を申請してきた。

『ジエネシス』ではキャラクター同士でのアイテム交換ができる。

パーティーメンバー同士でアイテムを上げたり、露店無しでアイテムを受け渡すことが可能だ。了承ボタンを押すとイベントリに見慣れないアイテムが表示される。

「ほら！」

『レザーバッグ 総重量+300』

「うわマジだ！！すげえ！！すげー！！！」

さっきからすげえしか言っていないけどすげえ！！いいなあ！！超羨ましい！！

「うわー！いいなあ！野崎良かったじゃん！どんな感じ！？使ってみて」

「凄いよ！重量超過にはもうめったなことじゃならなそう！ポーシ

ヨンいくらでも持てそうだし、装備の幅も広がりそう！！重くて着  
けないのとか結構あるからさ」

「そうだよなあ！！結構ギリギリな重量の装備だと、着れることは  
着れてもアイテムが何も持てなくなるもんなー。そっかあー！良か  
つたなー！」

「神谷も欠片いっぱい集めようよ！それで一緒にバツク出そうよ！  
！」

野崎の親しげな物言いにドキツとする。ダメだ。俺抗体なさすぎる  
わ。野崎が可愛くて仕方ないんだけど。

……いやいやいや！！マジありえないわ。ちょっと親しくされたか  
らってこんな感じになるか！？普通。勘違いも甚だしいわ。言つて  
も野崎がこういう感じで接してるのは俺が同じネットゲ仲間で、ギル  
メンだからなわけ。ホント我ながら怖いわ。野崎ごめん、あんま  
変に勘違いしないように努めるからさ。

心の中で謝りつつ、動揺したことが気づかれないように声を張った。  
「当然！！今日も本当は朝からインしたかったんだけどさ、ちょっ  
と出かけてたから」

「あ、そうなんだ。どこ行ったの？」

「佐野のアウトレット」

「あ、ホント？いいね」

「久しぶりに服買ったわ」

「私も新しい服欲しいかも。……っていうか神谷割とアクティブだね。私より全然外出てるんだけど」

「割とつて。いや、俺だつてそんな出ないから。今日だつて妹の同伴だし」

「……え？神谷つて妹さんいるの？」

野崎が驚いた声を出す。それに驚く。

「あれ？言つてなかったっけ？」

「初めて聞いたんだけど。えー？そうなんだ。神谷つて一人っ子かと思つてた。何となく」

「そう？そつという野崎は？」

「私は弟いるよ。超生意気だけど」

「うちのもすげえわがまま」

野崎がキャツキャと笑う。会話をしつつも、野崎を狩りにどうやって誘つかで迷う。この会話の内容からどうやってさりげなく狩りの誘いに持っていくか……。若干野崎を意識するようになってしまったせいで誘うことになり抵抗がある。もしかして俺は下心有りきで野崎を誘っているんじゃないかという疑い。せつかく出来た『ジエネシス』つながりのリア友を、安い下心なんかで失いたくはない。かなり悩んだ末に思わず口から言葉が飛び出した。

「……俺はこれから狩るけど野崎は？」

「……いや〜、我ながら超自然な誘い方っすわ。もう最っ悪！！  
ダメだー！俺ぜんっぜんダメだー！！

「え？」

「うわーもう最悪だわー！野崎のリアクションの薄さすげえもん！！  
うわー！帰りてえー！！自宅だけー！！

「何言ってるの？」

「ですよー！！

「……普通に狩るでしょー一緒に」

「ですよー！！

「えー？」

「……神谷が言ったんじゃないの？通話しててソロ狩り有り得ない  
って。忘れるの早くない？」

「……あ、ハイー！！」





『ライア： ダメだ！どこも狩場空いてないです』

『黒白猫： ね！お前らごんだけ夏休みなんだよ』

『シシリア： いやいや自分も含めてな！！』

『風巳： いやほんと、遊んでないで働けっと思えますね）、．．．』

『ライア： えーーーーー！！！？』

『にあ： W W W』

『LILIE： 今日もお昼そつめん？って言われました』

『NANAKO： リリさんW』

『風巳： お客さん全然来ないので調べものの振りしてモンスター殴ってます』

『黒白猫： かぜみんW W W W W』

『ライア： 自由すぎるW W W W W W W』

何とか飛び回って狩場を見つけ。場所はコルソの最下層。初心者ダンジョンでも、湧き場でもない、むしろ湧きが十分でない不人気の狩場だ。正直効率が悪いとは言えないけど、他にいく場所もないのでここに決める。

ギルチャによると風巳さんやシシリアさんは受注したクエストをこなしているらしく、そのついでに「魂の欠片」も出れば…という感じらしい。

『ライア： コルソ湧かない…』

『NANAKO： 全然湧かない』

『黒白猫： え、何二人で狩りしてんの！？こつちきなよ！…』

『LILIE： ノイトマにいるよー！』

『にあ： こつちきなー！狩場広めにとれてるよー！』

『NANAKO： あ、いいですか！？』

『ライア： かたじけない！…』

『黒白猫： 武士か！…』

『LILIE： WW』

『にあ： ただ、ノイトマだから護符は持ってきてねー！念のため！…』

にあさんの言葉で、ノイトマ近くのダンジョンに早速飛ばつとしていたのを慌てて止めた。

「ノイトマップできるもんね。何か公式の掲示板見たけどこのと

「ころPK多いらしい」

野崎が呟く。きつとイベントで増加したプレイヤーにつられて湧いてきたのだろう。PK。プレイヤーキルそのままの意味で、プレイヤーがプレイヤーをモンスターののように殺してしまうことを言う。通常のダンジョンでは出来ない行為だけど、城ダンジョンのようにPKが解放されている場所もある。そしてPKを仕掛けてきた相手を防衛手段として殺すのがPKK。プレイヤーキラーキル、で良かっただろうか？『OVERLOAD』のギルドルールの中には

1、『OVERLOAD』はPKを禁止しています。ただしPKされそうになった場合は、自衛手段としてのPKKを許可します。

という一文があった。こつちからは手出さないけど、黙って殺されなくてもいいよ！っていうのが『OVERLOAD』のスタンスのようだ。

「まあ、PKは湧くだろうなあ、夏だし。俺護符何枚かこの前買って余ってるけど野崎使う？」

「ううん、私も何枚があるから大丈夫」

そんなことを話しながらくしねさんとLEEIさん、にあさんのパーティーへと合流したのだった。

## 当たり前前の行動

ノイトマに飛んでみると入り口近くでくしねさんが座って待っていてくれた。

『ライア： すみません、お待たせしました』

『黒白猫： いやいや、俺もついさっきまで狩ってたから大丈夫よ』

『LILII： NANAKOさんも着きましたか？』

『NANAKO： はい。着きました』

くしねさんから来たパーティー申請を許可してから返事をする。

『ライア： パーティー入りました』

『にあ：おk。じゃあ呼ぶよー！』

次いで召喚申請が表示される。魔法陣に包まれてライアの姿が消えた。

「そついえば神谷、皆と城狩りは初めてなんじゃない？」

野崎に言われてそついえばそうだなと気づく。

「確かに。経験値うまいんだけどさ、ソロ狩りだとキツイじゃん。だから元々あんま足が向かわなかった」

「そっか。確かに私もソロは無理だなあ。PKも怖いし」

「警戒しといたほうがいいよね。PK」

「……うーん、大丈夫じゃない？」

野崎のまったく不安がっていない言葉にかえって俺が不安になる。

「大丈夫？この時間帯はってこと？」

「あ、そうじゃなくて、このメンバー的に」

メンバー？『OVERLOAD』の皆だから大丈夫ってことか？

「え、皆結構PK慣れしてるってこと？」

「うっん、皆PK来たらワールドに逃げちゃうから」

成程。『ジエネシス』ではダンジョンをいくら深く潜っていようと、どの階層からもワールドマップへ脱出することが可能となっている。もちろんメニューウィンドウを開く必要があるので、もたもたしているうちにPKやモンスターの餌食となる可能性は大きいのだが、慣れてしまえばキャラクターを死なせずに戦局からの離脱が可能なのだ。

「ああ、成程」

確かにPKされなければ、PKKする必要もない。相手に狩場を取られてしまう結果とはなるけれど、確かに『OVERLOAD』の

皆は進んでPKをやりたがる人はいなそうに感じる。  
ギルドルールのPKKのくだりも、本当にやむを得ない場面に応じた内容なのだろう。

「神谷もPK来たらすぐ逃げなよ？」

「おっけー」

まあ、ギルドの皆で狩りをしていれば、集団でいること自体が牽制になって手を出してくるPKも少ないだろうし、大して深くは考えずに二つ返事をした。

『風巳： これからPT合流しておk？』

『シシリア： クエスト終わったー！！！！』

『LILLI： おkですよー！！』

『黒白猫： じゃあ地上で待ってるよー』

どうやら上位クエストを終了したらしい風巳さんたちも合流することになった。ギルメンが揃って狩りをするとかっぱり心強いものがある。それに加えくしねさんも風巳さんも高レベルの<sup>フリースト</sup>神官なので補助魔法を随時かけてもらえるのも嬉しい。くしねさんは「クイックムーブ」、ウインドウォール」、ウインドフォース」などの能力上昇系に特化している。一方で風巳さんは「フォースダウン」や「マテリアルダウン」、マナロスト」などの能力減少系特化型だ。<sup>フリースト</sup>神官の補助スキルはあまりにも数が多い為に1人で覚えきるのは例えレベルが200に到達したとしても不可能だ。  
そこでギルドにいる<sup>フリースト</sup>神官はそれぞれ取得するスキルを特化して覚え

ることが多い。何よりも強力かつ凶悪なのが、くしねさんによって能力上昇を受けつつ、風巳さんの能力減少によって弱体化したモンスターを蹴散らすことができるということだ。能力値を2倍に引き上げることは至難の業だ。それこそ補助スキル値をMAXにしても到底なしえない。だが、そこに相手の能力を半減させるスキルを重ねがけすれば、上昇値は1.5倍で済む。特化型の神官がメンバールーストにいることはギルドの能力値を跳ね上げる。まして、OVERLOADの2人のように示し合わせて違うスキルを取っているならなおさらだろう。

ノイトマを降りていく途中でかなりの人数の狩りと出くわした。やはり夏休みだけあって、ギルド総出で狩りを行っているところも多いようだ。暗黙の了解というか、なるべく近寄らないようにして通り過ぎる。タゲを取ることが出来る距離まで近づけば、例えそんなつもりはなくてもPKとして警戒されることだってあり得る。

…そういえば『ジエネシス』始めたばかりのころ、好奇心でどっかの城に入ったら地下降りてすぐにPKされたことあったなあ。まあ、あれは沸き場で先客に気が付かずモンスタ横殴りしてた俺が悪いんだけど。白チャで怒られたもんなあ。

くしねさんの後ろをおっかけつつもどんどん地下へと潜っていく。

「人凄いけど、これだけいればかえってPKなんか来ないんじゃない？」

「ね？」

この様子ではソロ狩りをしている人なんて皆無だろう。補助魔法をガンガンにかけながら大人数で狩りをしている中で、そのうちの1

人をPKなんてしたらどうなるか位は予想がつく。よってたかってボコボコだろう。まあ、護符を発動させている時点でデスペナの心配もないし、あんま気にしないで狩ろう。

『風巳： 降りてくるの大変だった…』

『シシリア： 何かいつもより沸いてる？気のせいかな』

『黒白猫： プレイヤーの数凄いらねー。回転率いいんじゃない？沸く傍から倒されてるけど』

『LILIE： 久しぶりにノイトマキましたけど、やっぱり沸き方が凄いですね』

『にあ： 人も凄い！』

『NANAKO： でもよくワンフロア取れましたね』

『にあ： さっきまで知り合いが狩ってたの場所譲ってくれたんだよね』

『にあ： マスター』

『風巳： 何です？』

『にあ： 男爵が今度ギルドウォーやるうってさ』

『LILIE： あ、そうそう。それが条件だそうですね』

『黒白猫： ほら、ライアさんも入隊したし！GW経験させたげた



いじゃん』

「…神谷可愛がられてるよね」

チャットを見てか、野崎が呟く。

「可愛がられてる?」

「うん、神谷がインしてない時に風巳さん私につぶやき飛ばしてくるんだけど。どうしたの?って感じで。くしねさんもリリさんも結構神谷のことギルチャで話してるよ」

え、マジで?

「風巳さんが言ってたけど、チャットだけでも何かその人の空気って滲み出るんだって。」

『ライアさんはすごく素直そう』って言ってたよ?」

「おおっ…マジか…」

「私は『それはどうですかねえ』って返しておいたけど」

「えーーーー!?」

「神谷って意外に頑固じゃない?」

「…あー、でもそうかも」

「そっけでしょ?」

ふふん、といった感じで野崎が言つのを聞きながらチャットを打つ。

『ライア： ギルドウォーですか！やりたいです！！』

『NANAKO： GW久しぶりですね』

『風巳： いいですね。久しぶりに男爵さんのところとやりまじょうか』

『シシリア： いいね！どうせなら派手にやりたいね！』

『にあ： 男爵さんに選りすぐりのメンツで来てもらおうっ』

『LILIE： 千歳さんと再戦したいなあ！』

『黒白猫： 前やった時は中途半端な活躍だったからマジで頑張るわ！』

『風巳： じゃあ早速男爵さんにチャット飛ばしておきましょうか』  
ギルドウォーか。『ジェネシス』の目玉の一つともいえるギルド同士の大戦闘。もちろんソロで今までできて俺はやったことない。どんな感じなのだろうか？

そんなことをぼんやりと考えていたときだった。

「あっ」

ヘッドフォン越しに野崎の短い悲鳴が響く。

「え！？どした！？」

「……………最悪、油断してた」

野崎がくやしそうに呟いたのと同じタイミングでギルチャが流れる

『黒白猫： PK』

『風巳： 右上』

『LILLI： 今行きます』

『シシリア： 今行く』

『にあ： 3人』

あまりにも淡々としたチャットの流れが、かえって異常な事態に見える。

「…野崎やられたの？」

「…ちょっと気づくの遅かった。今風巳さん達が戦ってるから、神谷は早くワールド出なよ」

「……………30秒ちょうだい」

「は？」

ライアが右腕を掲げる。金色に全身を光らせながらMPを全てつぎ

込んで『バーサーカー』を発動させる。

少しだけ黙っていた野崎が、あきらめたように呟いた。

「……………能力値減少特化の神官と召喚士と戦士の3キャラね」  
フリースト サマナー ファイター

「あいよ」

野崎の言ったことには語弊があった。OVERLOADの皆は確かにPKが来たら一目散に逃げるんだろう。でも、もし逃げる前にギルメンがPKされたら？

それからワールドに逃げるメンバーなんかOVERLOADにはいないでしょ、野崎。

## 応酬

沸き続けるモンスターを無視してフロアを走り抜ける。目指すのはマップ右上の開けた空間だ。

走り抜けながらメニュー欄から選択しエフェクトをオフにした。と同時にライアを包んでいた金色の光が消える。すでにPKとの戦闘に入っているであろうフロアに突入すれば、恐らくそこは補助魔法と攻撃魔法の飛び交う場となっているはずだ。余りの情報量の多さにパソコンが処理しきれずにラグが生じるかもしれない。それに魔法のエフェクトはプレイヤー相手をタゲる時にも邪魔になりやすい。

そしてそのままメニュー欄の下へカーソルを落とし、『盾』表示のアイコンをクリックすると『剣』表示のアイコンへと変える。と同時にライアの名前が赤色へと変わった。

PKモード。この瞬間からPTメンバーを除く他プレイヤーへの攻撃が可能となった。

右上のフロアに辿り着く。風已さん達ギルメンの他に、見慣れないプレイヤーが3人。中央付近に倒れているキャラクターがいる。NANA KOだ。

「相手結構固いよ。膠着状態かも」

「野崎倒れたまんまじゃん」

「うん、このままワールドに出てもいいんだけど。ちょっと様子見」

「そう?」



斬りかかる寸前に「フォースダウン」をかけられたが、気にせず  
攻撃を当てた。ダメは100前後しか出ない。癒ヒールと祈ブレイをかけ続けて  
いる相手を沈めるには余りにも心もとない数字ではある。右クリツ  
クでブレードウェーブを叩き込んだ。出たダメは200を少し上回  
った程度だ。次に単体への三連斬撃を叩き込む「スラッシュ」を放  
つが、これも250前後。

相手の神官も「マテリアルダウン」をかけてから殴りかかってきた。  
みるみるうちにHPが削られるが、くしねさんが祈ブレイをかけ続けてい  
るおかげで場にいるメンバーのHPは一定状態を保っている。相手  
もそれは同じだ。回復を担う相手の動きを封じ込めば、他のメンバ  
ーの回復に支障が生じる。実際、回復に専念出来なくなった相手の  
HPは少しずつ削れていく。

するとライアに向かって3体の精霊エレメンタルファイターと戦士が襲いかかってきた。  
まあ、そうなるわな。

「野崎、ごめん。悪いんだけど、ギルチャで今から言うこと打って  
くんない?」

「え?うん」

「くしねさんに頼んでウィンドフォースとウィンドウォールかけて  
もらいたいんだ」

「分かった」

『NANAKO: くしねさんWFとWWお願いします』

ギルチャに返事はない。そんな余裕はないのだろう。だが、次の瞬

間ギルメン達にウィンドフォースとウィンドウォールがかけられる。みるみるうちに削られていたライアのHPの減りが少し鈍くなる。相手はライアのHPを削ろうと躍起だ。ライアを取り囲む精霊達<sup>エレメンタル</sup>がうつつうしい。

にあさんと風巳さんが駆け寄ってライアを取り囲む精霊達<sup>エレメンタル</sup>と戦士のHPをゴリゴリ削ってくれる。召喚士<sup>サマナー</sup>と戦士<sup>ファイター</sup>の注意がまたライアから少し逸れたのだらう。相手の神官<sup>プリースト</sup>を目指してライアが通り抜けられるくらいの隙間が出来た。

相手の神官<sup>プリースト</sup>をタゲると一気に近づいて通常攻撃を当てる。ウィンドフォースで上げられた攻撃速度の斬撃はみるみるうちに相手のHPを削っていく。相手も慌てて回復をかけるが、少し怯んだようだ。タイミングが遅い。

悪くないタイミングだと思う。通常攻撃に加えて「スラッシュ」を放つ。右クリックを押してライアがスラッシュを放つ為に剣を構えるモーションに入ろうとする。

その瞬間を見計らって更に右クリックを叩く。

「え？」

野崎が呆気にとられた声を出す。相手の神官<sup>プリースト</sup>が膝をついたからだ。

「え？今の何？」

倒れ込んだ神官<sup>プリースト</sup>を見ながら野崎が茫然といった様子で呟く。



「…スキルキャンセル」

「え？」

「スキルつてどの技も出すときモーションあるでしょ？右クリックしてから実際に出るまでたぶん0.5秒とか1秒とか？そういう時差あるじゃん。その間のタイミングで更に右クリックするんだわ」

野崎に話しかけながらさらに相手の戦士ファイターに近寄る。

「そうすると一度の右クリック攻撃に二撃分のダメが乗るんだよ。おまけに攻撃のモーションは一回で済むわけ。完全に成功するとそのモーションすら表示されないんだけどさ。だからスキルキャンセル」

言いながら相手の戦士ファイターにスキルキャンセルをかけたブレードウェーブを叩き込む。斬撃の波が二重となって相手に襲いかかる。ごっそりと減ったHPに相手は慌てたようにポジションを飲み続けている。

「打撃職しか使えないしさ。やたらMP食っただけだから狩りでは使わないし使えないけど。対人ではかなり使えるよ」

「何それ……初めて知った……」

野崎は本当に驚いていたようだった。あれ？結構有名じゃないんだこの技？

あっという間に崩れた戦況に更に追い打ちをかけるようにPK達のHPが瞬く間に削れた。何事かと思えばリリさんとシシリアさんが到着したようだ。リリさんの全体魔法の火力は凄まじいものがある。

耐えきれずに召喚士が沈んだ。と同時に召喚されていた精霊達も消滅する。自由になった風巳さんにあさんが戦士に襲いかかるが、とどめをさす後一步というところで相手の戦士は姿を消した。どうやらワールドへ逃げたらしい。

『にあ： 逃げた』

『風巳： 皆さんごです』

『シシリア： 俺ぜんぜん活躍してねえwww』

『LILII： NANAKOさん大丈夫です？』

『NANAKO： やっぱ皆さん強いですねえ』

『黒白猫： ちょwwまだ復活してないのwww』

『NANAKO： 見るのに夢中になってました』

『シシリア： 敵は取ってやったからな！！b』

『にあ： いや何もやってないって自分で言ってたばっかでしょ！』  
『？』

『風巳： OVERLOADに手を出すとこうなるんですよ…』

『ライア： ！？』

『黒白猫： かぜみん黒いの出てるよ』

『風巳：(〇ノ艸)』

『にあ： いやそんな可愛い顔文字使ってもダメ……って何それ！  
可愛い！！』

『黒白猫： あらやだ可愛い！！』

『LILLI： 可愛いW』

『シシリア： いやいや皆騙されるなって！！』

『風巳：(ノノ\*)。』

『シシリア： 可愛いよ！！』

『ライア： え——————！！……？？？』

『LILLI： WWW』

『にあ： WWWWWWWWWWWWWWWWW』

『黒白猫： WWWWWWWWWWW』

あつという間にいつも通りの雰囲気に戻ったギルチャに思わず頬が緩む。

『NANAKO： 復活してきますW』

「……神谷、ごめんね。復活しないでただ見てて」

野崎が申し訳なさそうに言う。

「ん？いいんじゃないの。下層まで降りてくる前に決着ついてたでしょ」

「……スキルキャンセルかあ。私知らなかった。超強いね」

「対人戦では重宝するかもだけど……。MPの減りが異常だし、上手くないかとダメージ通常のままMP2発分減ったりするし、デメリットも多いけどね」

「あ、そうなんだ。でも神谷がまさか倒すとは思わなかった」

「ちょっと野崎さん？」

「あ、そういう意味じゃあ無くてね。相手レベル高そうだったから」

「一人くらいは倒してやろうと思ってさ。やられっぱなし癪だし」

「やられたの神谷じゃなくて私だけどね」

「いや、だから余計に」

「……」

ん？今俺何て言った？

「……ありがとう……？」

「……いえ、どういたしまして……？」

何故か疑問形の応酬の後、俺たちは狩りを再開した。

## 脊髄反射

頭が痛い。目がシバシバする。結局深夜まで『ジエネシス』をやり続けたせいで目を覚ましたらすでに10時だった。体内時計が狂い始めてるな。

狩りを続けたおかげですでに結構な数の「魂の欠片」が手に入った。でもアイテムと交換するのはあえてやっていない。20個程貯めてから交換する予定だ。野崎がバツグを手に入れたように、俺も是非でもバツグが欲しい。その為には一気に交換したほうが当たる確率が何となく上がりそうだ。いや、完全にイメージだけだ。

今日5個位集めて、交換しに行こう。そんなことを寝起きに考えていたときだった。

枕元に置いておいた携帯が震えた。画面を開いてみるとメールが届いている。

あ、よっちゃんだ。

『神谷つち元気ですか？夏休み満喫してますか？私は元気です』

メールの文章を読んで思わず微笑む。よっちゃんはメールの文章までふわっふわしてるなあ。満喫してるよ。…いや、してないか。ネットゲームの生活だもんな。

寝っころがったままメールを打とうとして、はたと思い出す。そういえば夏休みに入る前によっちゃん達と映画見に行く約束してたんだ。やっべ、まさやん達一切誘ってない。…っていうかもうタスキミグ的にアウトっぽい。まさやんとか合宿行ってるだろ。

うっわどうしよう。内心焦りながらも返信する。

『久しぶり。ごめんよっちゃん連絡しないで。映画の件、まさやんとかあんま都合つかないかも』

嘘じゃない。ギリツギリで嘘はついてないよね。都合つかないどころか連絡も取ってないけど。

すぐに携帯が震える。よっちゃん返信はえーな。あんなにおっとりしてるのに携帯打つのはめっちゃ早いんだな。今度石田に教えてやるう。ギャップにやられて石田死ぬかもしれないし。石田の死因はギャップ死。俺は何を言ってるんだ。

『そうなんだ？神谷っちも忙しいの？』

全然忙しくないんだよっちゃん。悲しいね。

『いや、俺は暇』

予定をガッツリ入れたんですよ。でも正直旅行以外は大してイベントごとないんですよ。メールを送って1分もたたないうちに返信が返ってくる。携帯を握り締めたままのよっちゃんを想像して思わず微笑んでしまう。

『ほんと？今日は？』

『今日も暇だよ』

『なら神谷っち今から映画見に行こうよ』

『え、今から？』

『忙しくないなら』

『暇だけど他の人今から誘っても来るかな』

『私はふたりでも大丈夫だよ』

メールの内容に思わずどきっとする。よっちゃんは男女分け隔てなく接することのできるとても可愛らしい女の子だ。そんな子からこんなメール貰ったら普通にびびると思う。石田なんて一回死ぬんじゃない？人間一回しか死ねないけど。まあ、それはそれとしていくら俺でもこれはちょっとびびるわ。

だって普通男女2人で出かけるってデートってことでしょ？あれ、俺よっちゃんにデートに誘われてるの？

……無い無い無い。抗体持っていないからすぐそっちに思考が行くなあ。野崎と通話するようになって多少女の子に対する接し方も分かるようになって来たと思っただらこれですよ。ほんと、勘違いにも程がありますね。だってよっちゃんが俺を異性として見る要素皆無だし。あ、自分で言っただけで凹んできた。でも、よっちゃんはあるに女の子らしいのに、何故か俺が女の子に対して持つ抵抗を全然感じないから、すげー話しやすい。たぶんだけど、そんな印象をよっちゃんも俺に対して持っていてくれるんじゃないだろうか？つまり、気の合う友達として。

なら、二人で遊ぶのも普通にあり得る。全然あり得る。おっけー。

『いいよー！よっちゃんてどこら辺が出やすいんだっけ？池袋出られる？』



…あれ？何故か返信がぱたと止まってしまった。丁度いいのでリビングに行くことにする。

昼飯何だか朝飯何だかよく分からない飯を用意していたら、携帯が震えた。よつちゃんからだ。

『池袋出られます。見たい映画が14：45からなので14時に池袋駅の東口で待ち合わせしましょう』

妙に丁寧な返信内容に笑ってしまう。

「何携帯見ながらニヤニヤしてんの」

ソファで不機嫌そうにテレビを見ていた美雨が話しかけてくる。

「いや、午後から遊ぶんだけど、メールの内容がおかしくて」

「誰？矢野さん達？」

「いいや、よつちゃん」

「は？誰」

「えーと、クラスの友達」

「……女の子？」

え、何怖い。何でそんなこと分かるの？思わず絶句していると美雨の不機嫌そうな表情が見る見る変わっていく。それも良くない方に。

…玩具を見つけた子供の顔に。

「凶星？」

「いや、そうだけど。え、何！？近い」

美雨はガバッと勢いよくソファから跳ね上がると勢いよく近づいてきた。うわ、面倒くせえ！

「何それ！え、二人？二人きり？」

「うん」

「えー！？デートじゃん！デート！」

「……いや、普通に友達だし」

「はー！？何言ってるの頭おかしいんじゃないの！？」

「いやおかしいのはお前のテンションだろ」

思わず発した突っ込みで美雨が不機嫌そうに眉をひそめる。何なの。何でそんなに食いつくの？

「何しに行くの？」

「え？映画見に行く」

「その後は？」

「は？」

「……映画だけで帰るの？」

「え、そのつもりだけど」

「何それ」

美雨は渋い顔をしながら呟く。

「え？何それって」

「映画なんてすぐ終わるし！その後は！？ご飯位食べて帰ってきなよ！」

「……あー、ね？」

確かに、映画観終わっても多分6時行かないかもしれない。映画だけ見て帰るってのも何か……確かにちよつと無いよな。

「池袋ならお店だっていっぱいあるじゃん」

「確かに。今日夕飯要らないって言うておいて」

「おっけー」

美雨がにんまりと笑う。何でこいつこんな上機嫌なんだ。



「え？何で二回言ったの？」

よっちゃんが首をかしげる。いや、マジでちょっとびっくりした。いや、よっちゃんすげえ可愛いな何だこれ。ふわっふわしてんな。いや、そういうレベルの話じゃないな。ふわあっふわあっしてるな。髪型可愛いな。若干化粧してるのかな。え？女の人って化粧でこんな変わるもんなの？何かキラキラしてるんだけど。大丈夫なの？

何か一瞬で色々考えたけど、よっちゃんがあまりにも可愛いので拳動不審になる。

「いや！ごめん。ちょっとびっくりしたっていう……」

「え？」

「私服だし」

「えー？神谷っちだって私服じゃないか」

にこにこ笑うよっちゃんにますます緊張度が上がっていく。

「あ、はい。そうでした」

「何で敬語なの……！」

にこにこ笑いながら肩を殴られる。え！？普通に痛い……！！

「……私何か変？」



よっちゃんはにっこりと微笑むとすつと離れながら何事もなかったかのように歩き出した。

「早く行こう。きつと並んでるよ」

俺は無言で頷くとカルガモのようによっちゃんの後ろを付いて行った。

反旗（前書き）

よっちゃん視点です



## 反旗

携帯を持ったまま、固まる。

神谷つちからの返信は軽かった。思わず眉を潜めるくらい軽かった。返信のスピードも、凄く早かった。ちつとも悩んでくれてると思えなかった。

分かってる。神谷つちは私のことを意識なんてこれっぽっちもしてくれていないのだ。神谷つちにとっての女の子は、ほとんど恐怖の対象なのだ。神谷つちが私のことをすんなりと受け入れてくれたのは、私が細心の注意を払いながら、敵意も、害意も、他意もないのだと、純粹に友達になりたいのだと示したから。そう思わせることに成功したから。だから神谷つちは私が投げかけたのと同じ位の友情を示してくれている。

でも、私にだって我慢の限界というものはある。

神谷つちがいつまで立ってもお芝居を続けるというのなら、私はそれに付き合っ**て**あげるつもりはない。

何故なら私は神谷つちのことが好きだからだ。そして、神谷つちが思うほど、お人よしではないからだ。

私を懐に忍ばせたことを、うんと後悔させて、そして良かったと思わせてみせる。私は携帯を置くと、クローゼットを開けて、服を選び始めた。



そんな折に奇しくも席が前後になって、私はあまりのタイミングの良さに叫びだしそうだった。神谷っちが、何を考えてるのか、話しているうちに何か分かるのかもしれないと思ったからだ。はっきりいってしまえば、その時あったのはただ単純に興味があったからで、私が神谷っちに対して個人的な好意を持っていたわけではなかった。……なかつたはず。

後ろを振り返って、少しずつ話しかける。初めの頃の神谷っちの反応は、私が思つたより良好だった。私は、あまり特徴のない顔をしてると思つただけけれど、笑顔だけには自信があった。そして私は笑顔を保つことにも自信があった。神谷っちに対してにこにこ話しかけ続けていくうちに、話しかけられると少しだけ目を見開いて、視線をそらしていたのが、とつとつと話して、だんだんこっちに視線が向いてきて、つられたように笑うようになっていった。

何だか、凄く可愛いなと思つた。

それに話してみると神谷っちは話下手なんかでは無く、とても話し上手で、聞き上手だった。初めは私が一方的に話して聞き役に徹していたみたいだけど、少し心を開いてくれたのか私の話に突っ込んでくれたりするようになった。あいさつをしてくれるようになった。更に時間が経つと、私のことを「大野さん」から「よっちゃん」と呼んでくれるようになった。

何だか、凄く嬉しかった。

私はある日とうとう、核心に触れることにした。神谷っちと仲のいい矢野君の彼女さんの話題が出た時だった。このタイミングしかないと思つた。

「……そういえば神谷つちはさ、どうなの？」

私が努めてさり気なく聞いた質問に、神谷つちは不思議そうに答えた。

「どうなのって？」

「付き合いたいなーとか、ないの？」

その時の神谷つちの表情は、何だか変だった。困ったように眉が下がった。本当に一瞬だったけど泣きそうな顔になった気がして、私の心臓が驚くくらい跳ねた。

「ないない。あり得ないでしょー。俺は全然無い」

笑いながら首を振る。ほとんど拒否反応に近い。何だかその反応にムツとしてしまって、私は少しだけ意地悪を言ってみた。

「でも、神谷つち結構女の子に人気あるよ？神谷つちのこと好きな人、いるんじゃないかな？」

ストレートに事実を告げる。どう出るだろう？

「あ、本当？マジカー！それは普通に嬉しい！！」

え？

「よっちゃんこそ、人気あるけどね。よっちゃんのこと好きな人いるでしょー」

えええええ。はぐらかされた。凄い強引なやり方で。てつきりまた「無い無い」っていうと思ったのに。まるでそんなこと知ってるみたいな言い方、したなあ……。

そこまで考えて私ははた、と止まってしまった。もしかして、と思う。

「神谷つちはさ、何で彼女欲しいなーって思わないの？」

「んー？うーん、いやー、欲しいけどね。まあ、でもなあ。俺には無理でしょ」

ああ。やっぱりだ。この人、諦めたいんだ。

実際に自分がどう思われてるかなんて、関係ないんだ。むしろ、好意的に見られてるなんて知りたくないんだ。だから自分の中で無意識的に、そういう情報だけは否定しちゃうんだ。だって、そんなことを知ってしまったら、障害が無くなっちゃうから。

でも何でだろう？何でそんなことをするんだろう？

「……でもうん、彼女出来たらかなり嬉しいだろうなあ。凄いなあ。だってさ、自分が好きな人が自分のことを好きなわけでしょ？それってあり得ないよね……。凄いことだよなあ」

言いながら神谷つちが微笑む。私は何ともない風に更に探りを入れてみた。

「そうだねえ！凄く幸せなことだよ。でもきつと、神谷つちだっ



「……あ」

思わずベッドから跳ね起きる。そう。まるで子供だ。いじけて、欲しくせに要らないと言ってみせたり、でも誰かが欲しがると自分も欲しくなったり……。――

神谷つちはきつと、すごく恋愛に憧れているんだ。でも、恋愛の難しさも分かっているんだ。

だから自分からそういつ話をわざと遠ざけてるんだ……。欲しがらないように。

欲しいから、近寄らない。憧れてるから、諦める。無意識に自分を騙してまで。

でも、でもそれじゃ神谷つちはいつ人を好きになって、いつ付き合えるの？

「……神谷つち、間違ってるよー」

私はベッドに転がりながら呟いた。何だかひどく悲しかった。神谷つちのアホ、とも思った。胸が苦しかった。

ああ、私は神谷つちのことが好きなんだと思った。





神谷つちはそれまでオロオロしていたけど、意を決したようにこっちを向いた。

「……ごめん何かね、何かよっちゃんが可愛くてびびりました」

……。

可愛い。

神谷つち可愛い。可愛い。可愛い。好き。

「神谷つち」

じっと見つめると神谷つちは顔を伏せてしまった。でも私の方が身長はずっと低いから覗き込むような形になる。

「私服かつこいいね」

効果はてきめんだった。神谷つちの顔がみるみる赤く染まる。照れると顔が赤くなるって本当なんだなあ。

何だか私は嬉しくて楽しくて仕方がなくなってしまった。にっこりと微笑んで神谷つちを見つめる。

神谷つちは気づいてないけど、私はもう神谷つちにとっての無害で心許せる異性の友達では無いのだ。「よっちゃん」ではなくて「大野良美」なのだ。

だから、今日はそれを分かってもらおう。私は心の中で気合を入れ、

歩き出した。

## はじめての

池袋駅を出て映画館に向かう。何か話さなきゃいけないと思いつつも、最初の一言が浮かばない。だけど、こうやって一緒にいる以上つまらないなんて思っただけは欲しくない。確かに俺は女の子に対してかなりしょっぱい態度しか取れないけど、よっちゃんは俺にとって心開ける数少ない女の子の友達だし。

「よっちゃん、夏休みどっか行った？」

あんま変に意識するのはやめよう。っていうかよっちゃん普通に美少女だわ。これは何かもう、意識しないのが無理でしょ。意識して普通みたいなの。あ、何かそう思ったらかえって落ち着いてきたかもしれない。よっちゃんの顔も見れるように……。目が合って、ちょっとだけ笑うよっちゃん。あ、ダメだ。ごめん調子乗った。見れない。全然見れない。もう諦めて会話に集中しよう。

「私？買い物とかは皆で行ったよー。後は家族で避暑地に行く予定あるよー」

「お、いいねー。どこ行くの？」

「軽井沢だよ。うちはほとんど毎年行ってね、皆でテニスするのね」

「マジか。よっちゃんセレブっぽいな」

「セレブじゃないよ！普通だよ」

「いやいや、軽井沢でしょ？完全にセレブ入っているね。そもそも

今日の格好が若干のセレブだからね」

「えー？」

「何か今日のよっちゃんお嬢様っぽいもん、優雅だわ」

「優雅？そんな事なかなか言われないなあ。でもありがとー」

ふにやりと笑うよっちゃん。ああ。いつものよっちゃんだ。いや、当たり前だけど。何だかほっとして、やっと普通によっちゃんを見れるようになる。

「神谷つちがオシャレと聞いていたからね、頑張ったつもりだよ！」

「いやいやいや、俺はオシャレでもなんでもないから」

「そんなことないよー？さっきも言ったけどねえ、可愛いよ。神谷つちの雰囲気は凄いい合ってる」

「……男に可愛いはあんま褒めてないんじゃない？」

「えー？そうかな？可愛いと思うよ私は」

いや、よっちゃん。そんな可愛い可愛い連呼されても反応困るんですけど。

「……ねえ、神谷つち。可愛いよ？」

「いやゴリ押し？3回も言うことじゃない？」



「ほら、神谷っち。会話の鮮度はどんどん落ちていくんだよ」

よっちゃん改め大野良美さんがニヤニヤと笑いながらこちらを見つめてくる。え！？キヤラ変わってるじゃん！

「え……ちょっと待ってね？ん、うん！！んん！？」

何の余裕も無くなってテンパっていると、いきなりよっちゃんが嘔き出した。

「……あははははは！神谷っちテンパリすぎ」

「え！？」

「じゅめんね、ちょっと意地悪が過ぎたね？」

「……うわ、何だよー！すげえビびった！マジで言わないとダメかと思った！……」

「たまにはこういうのもアリかなって思ったのさ」

「いやマジびびったあー！俺が今まで生きてきた中で一番、自分のどこが可愛いのか考えてたわ！！口に出してたら何かもう色々失ってたわ！！」

「あはははは！！でもそれちょっと聞きたかったかもだよ？」

「いや、本当に勘弁して下さい！！」

馬鹿話を続けるうちに目的地の映画館に到着した。お目当ての映画

の券を買う。席はそこそこ埋まっていたけど、スクリーンからの距離が適度にあつて、かつ2人分が空いている場所があつたのでそこを買った。うん、上映時間まで思ったより全然時間が出来てしまった。会場まであと30分くらいはある。

「どーする?」

よっちゃんに券を渡しながら尋ねる。

「じゃあ近くの喫茶店かどこかに入ろうよ!」

「おっけー」

映画館から10メートルも離れてない喫茶店に入る。パツと見満員にも見えたが二階席があるみたいだ。レジに並びながらメニューを眺める。

「よっちゃん何飲む?」

「私はアイスティーかな」

「何にしよ。……俺コーラでいいや」

レジで会計を済ませるとトレーに乗ったアイスティーとコーラを持って二階へあがっていく。思ったより空いていたので禁煙席まで行く。と席に着いた。

「……神谷つち今日いきなり誘ってごめんね?」

席に着くとよっちゃんが申し訳なさそうに言った。

「ん？いや全然。暇してたし。っていうかまあ常に暇だけど。よっちゃんこそ、俺だけで良かったの？三国さんとか、戸田さん呼ばなくて」

「うーん、矢野君たちが来ないなら、2人呼んだら今度は神谷つちがかわいそうかなって思って」

「ああ。確かに」

思わず笑うと、よっちゃんもふにやっと笑った。コーラが思ったよりも温かったので勢いよくストローでかき混ぜる。カラカラカラと涼しげな音が響いた。

「神谷つちと2人で遊びに行く日が来るとは思わなかったよー」

「あー、ね？……っていうか俺、女の子と2人きりで遊ぶの生まれで初めてかも」

「え！？」

よっちゃんが固まる。あ、引かれた。いや、でも事実なのだから仕方がない。

……今の言い方はく俺、女の子と遊んだこと全然ないんで、ぶっちやけ超意識してます>と取られるか、もしくはく俺、全然女の子慣れしてないんで、ぶっちやけ超意識してます>と取られるかどちらかだなんてどのみち意識してるんじゃないか！びっくりするわ！

やってしまった感はあるけれど必死でフォローに回る。俺が俺をフォロー。泣きそう。



「いや！つってもそんな！変な意味じゃなくて！！」

完全に变じゃねえか！！よっちゃん何とも言えない表情になってるし！

「……びっくりした！神谷っち。今は本当にびっくりしたよ」

へええええと言いながらよっちゃんがこっちを見つめてくる。あれ、こっつて見るとよっちゃん目力すっげえな。いつもかなりの至近距離で顔つき合わせてるはずなのに。何かあれだ。初めてジェネシスの話した時の野崎みたいな目だこれ。

「いや、まあそうなんだわ。悲しいことにね……」

「そっかー。……そっかー」

よっちゃん下向いちゃいましたよこれ。いや、そうなるよね！俺がよっちゃんだとしてもリアクションに困る話だからね！もう思ったことすぐ口に出すのやめよう！本当にやめよう！！

「そっかー、じゃあ初デートだね」

「え？」

カラカラとストローで転がしていた氷が、勢い余ってコップから飛び出していった。

## 無自覚と再発見

コップから飛び出した氷が勢い良くよっちゃんのグラスの近くまで滑って行った。

目をまんまるにしてよっちゃんがこちらを見つめてくる。

「うわごめん、俺の氷めっちゃ元気だわ」

「……」

「活きがね……こう、活きが」

もう自分でも何言ってるのか分からない。もし万が一、今この瞬間よっちゃんがテーブルの氷を拾って手の平に乗せつつ、俺の顔面にアイアンクローしたら一瞬で溶けると思う。しねえよ!! よっちゃんはそのようなことしねえよ!!

とにかく落ち着け。つかドックドクいつてるんだけど心臓が。何?人間ってこんな瞬間的に心臓動かせるものなの? 凄いや血流が。俺今顔真っ赤だよたぶん。

一瞬固まっていたよっちゃんの表情が見る見るうちに崩れた。体を折り曲げて笑いだす。

「活きって何!? っていうか神谷っち顔真っ赤じゃないか!!」

他のテーブルの人たちからも視線を感じる。感じるっていうか実際見てる。超見られてる。うわ、あいつの氷活き良いなーって思われてる。泣きそう。笑い続けるよっちゃん。楽しそうに笑う子だなあ

本当。

「……………はーっ、笑いすぎて疲れたよ……………」

ホントにちょっとぐったりした感じでよっちゃんが笑い終わった。片や俺は若干の涙目だった。

「……………うん、楽しい」

独り言みたいによっちゃんが呟く。そんなに楽しんでくれたんなら俺も何かもう満足です。

「何かずるいけど、……………うん、まあいいや」

「え？」

「神谷っちは、ずるいなー」

「え、ごめん」

「ほんと、笑いの神様がついてるんじゃない？敵わないなー」

そういつてまた笑うよっちゃんに、俺もようやっと落ち着きを取り戻す。よっちゃんの発言に思いつき動揺したけれど、あまり深く考えるのはやめよう。何かドツボにはまりそうな気がするし。我ながら自意識過剰だわ。

「……………あ、すごい。もうこんな時間だよ神谷っち」

そう言っつてよっちゃんが携帯の時計を見せてくる。開場までもうそ



「え、いらないよ！」

「だって悪いよ」

「いや、俺がでかいの買いたってただだから！何か映画館でかいサイズのポップコーンを食べるのにおこがれがあつてさ。映画館来たら絶対頼んじゃうんだよね」

「あ、でも分かるよー。私も映画館ではポップコーン食べたくなる」

「でしょ？超でかいでしょこのポップコーン。テンション上がるでしょ？」

「うん、何か上がってきたよ！」

「さーすがよっちゃん！！よっしゃー！見るぞー！！楽しみだー！！」

ポップコーンでテンションが上がりまくる。自分でも自分のスイッチが分からん！！

「神谷つち子供みたい。可愛いなあ」

ふにゃつと笑いながらよっちゃんがそんな事を言う。またこの子は……。

「いやだからそれ褒めてないからね」

よっちゃんはほんとほんわかしてるなあ。あんま本人意識して言っ  
てないんだろうけど。何かよっちゃん意識してる人（石田を筆頭と



「あー、ね？」

違うんですよ。ちょっと説明させてもらえます？この映画、家族の絆がテーマみたいになってて。健気な子供が頑固なおじいちゃんと交流して少しずつ心通じ合っていくんですよ。こんなん普通にダメですって。反則ですって。

「……よっちゃんこの後大丈夫？」

「え？」

「飯食べて帰ろうか」

「！うん！」

よっちゃんほんと表情がぱっと明るくなるよなあ。可愛い子だよホント。学校でいるときはふんわりしてるから今日はちょっと攻めの姿勢で来られてびびったけど、二人きりだとまあこんなもんなのかもしれない。よっちゃんの発言を思い出す。確かにまあ、今日のこれはデート……って言うてもいい気がする。すいません調子乗りました。

この今の状態見られたら、石田にマジで何かされるかもしれない。すっかり忘れてたけど石田も映画見たいって言ってたしな！。むしろ俺が誘ったんだった。石田！頑張れ！！

「よっちゃん何か食べたいものとかある??？」

「え、んー……何だろう？私は別にサイゼリアとかでいいよ？」

「サイゼかー。んー……」

まあ俺もそれでいいんだけど。つーか映画は地味に高いから財布が寂しくなるな。

『礼さ、二人でご飯食べるんなら店位決めてから出なよ!!』

頭の中で美雨の言葉を思い出す。

『ご飯おごってあげる位の甲斐性は見せてよね』

はいはい。大通りから少し進んで、お店の前に立つ。

「よっちゃん、ここどう?」

「あ、おいしそうだね」

「おっけ、じゃあここにしよう」

そこはちよこちよこ入ったことのあるハンバーガー屋さんだった。お店の中はかなりこじんまりとしているけれど、雰囲気が入っている。カウンターで値段を見たよっちゃんが少し戸惑ってた。

「わ、値段すごいねえ……」

ここのハンバーガーは1,000円超えがザラにある。

「ここのハンバーガー超おいしいから。よっちゃん何食べる?」



「えーつとねえ……。何がおすすめののかな？」

「やっぱりこのモツツアレババーガーでしょ。これおいしいよ」

「じゃあ、それにしようかなあ。あとアプリコットアイスティー」

「俺も一緒。飲み物は克蘭ベリー……。あ、よっちゃん席取っ  
いてよ。2階上がれるからさ」

「あ、うん！はい、神谷っちお金……」

財布を取り出したよっちゃんをやりわりと止める。

「あ、いいよ。払っとく」

「え、でも……」

「先に席取っておいてよ」

「……うん！」

元気に返事をしてよっちゃんは2階に上がっていく。まあ、友達と遊びに行って奢りとかはないもんなあ。まあ、いいか。何か本当のデートみたいになってるなこれ。

窓際の席に座りながらハンバーガーを頬張る。

「……おいしい！何かバンズがふわふわしてるー！あ、でも外は力  
りかりしてる……」

「おいしいでしょ！？しつかり食べてる感じするよね。肉も超うまい」

「神谷つちよく来るの？」

「んー、ノブいるじゃん。あいつが結構色々店知ってて。色んなとこ連れてってもらうんだよね。って言ってもあいつケーキとかシュークリームとかドーナツとかワッフルとかクレープとかさ、そういうの方が好きみたいだけどね」

「えー？そうなんだ。遠藤君凄いなえ」

「ね！たぶん夏休みだから色んなとこ行ってるんじゃないかな。何かそんなようなことメールで言ってたし」

そういえばノブからこないだメールで『カフェコムサで中村さんと会った！しかも一緒にケーキ食べた。超可愛くて死ぬかと思った』って来たな。めんどくさいから返信しなかったけど、今頃中村さんと一緒に色んなとこ食べ歩いてたら面白いな。ちなみに中村さんは野崎の仲良しグループの子で、ウツシャツシャって感じでいっつも笑ってる。この説明聞いたらノブがガチでキレそう。

「映画よかったねー」

「ね、普通に感動しちゃったよ。何か俺おじいさんという存在に弱いらしい。ぐつとくるもん」

「あはは。映画の途中で神谷つち見たら泣きそうになってるの堪えてたもんね」

「うわ、そんなとこ見ないでよ」

「可愛かった」

「うおーい！だから、可愛くないから。よっちゃんのほづが可愛  
いから」

思わず仕返しのつもりでそう呟くと

「……………あは」

やっべ若干変な空気になったー！！何でこつ俺は引かれることしか  
言えないんだ。

「……………神谷つちはさ」

「ん？」

「私が欲しい言葉をくれるね」

「……………そつっ？」

「あ  
うん、そつだよー！私普段可愛いなんて言われないから嬉しいな  
」

「いやいや、よっちゃん本人に言ってないだけだからね、それ。皆  
陰でこそこそつと言ってるんだよ」

「あはは！……………あー、私……………うん」



「いいから!!」

そのまま美雨にしょっぴかれて何故か反省会になった。

## 正直者の鼓動

妹の部屋に詰め込まれるように押し入れられた。

「座りな」

年下の妹から感じるプレッシャーが凄い。多少の身の危険を感じ美雨のベッドの枕元に飾られているピンクパンサーを人質……違うわ、物質にすると俺はピンクパンサーを抱きながら美雨の顔色を窺った。妹の部屋に入ることには……無いことは無いけどあんまり無い。むしろ美雨の方がこっちの部屋に来ることの方が多いからだ。だからなのか、何だかアウエー感が凄い。っていうか何かこの空気怖い。助けてピンクパンサー。

「ちょっと、あんまりぎゅってしないでよ。潰れるから」

すぐさま俺の手からピンクパンサーが奪い返される。あ、俺今凄く無防備。勝てない。いや、別に戦わねーけど。

「……で？どうだったの？」

さっきと同じ質問を繰り返す妹に辟易する。

「……いや、だから別に普通。普通に遊んだだけだし」

「普通、クラスの男友達と二人きりで遊んだりしませんー」

間延びした口調にイラツとする。

「いや、それは美雨がクラスの男子と遊ばないだけじゃねーの」

「別に遊びたいとか思わないし」

「仲良い子とかいないの？」

「普通に話す相手はいるよ。別にクラスで浮いてるわけじゃないもん。でも、学校の外で遊ぶってなったら別だよ？もし誰かに見られたら変な噂立つかもじゃん。それでも二人で遊ぶって、別に噂になってもいい！！って思わないと無理じゃない？」

「……………そうかあ？」

2人で遊ぶってなって意識しなかったって言ったならそれは嘘だけど、でも、よっちゃんに限ってそれは無いと思うけどな。

「何か、ちょっとアピールされたりしなかったの？」

「アピール？」

「そうそう。相手の好意感じる時とか無かったの？」

美雨の言葉に今日一日の場面がフラッシュバックする。

『そっかー…じゃあ初デートだね』

『可愛いなあ』

……………いやいやいや。

「……何か、あつたでしょ？」

美雨がしたり顔でこっちを見つめてくる。何だその顔!!

「……無い無い」

有り得ないから。そう言おうとしたらいきなり美雨が手を引つ張つて部屋の隅まで歩かされた。クローゼットの横にある全身鏡の前に立たされる。

「自分の顔見てみ？」

「……何？」

「超赤い」

「うわマジだ超赤い」

「……礼さあ。どんだけ純なの」

「いや、でも!!でもよっちゃんはさ、すげえいい子なんだよ。別に男女関係無しに接する子でさ。席も近いから結構喋るし。あ、しかも元々皆で遊びに行こうって言ったのが、なし崩しに2人で遊ぼうって流れになっただけだしさ……」

「今日はどっちが誘ったの?向こうなんじゃないの?」

「……向こう…です」

「……脈あるんじゃないの?」





『†Silver†： ライアさんお久しぶりです!!』

『NANAKO： こん』

『ライア：こんですー!!』

星龍さんもシルバーさんも久しぶりだ。野崎のログイン率の良さに思わず笑ってしまう。他のメンバーが見当たらないのを不思議に思っ  
つて、チャットを打つ。

『ライア：あれ、マスターとかはいないんです?』

『星龍： あ、今ちよつど皆離席してて』

『†Silver†： 風巳さんとあさんがインしてますけど、  
今席外されてます^^』

『ライア： あ、把握です』

『星龍： ここんとちよつとバイトのシフト固めて入れてて、  
インできなかったんですよね』

『ライア： お疲れ様です!!』

『†Silver†： 僕ももっとIN出来ればいいんですけど…  
…。塾が忙しくて』

あー、そういえばシルバーさんも学生みたいなこと言ってたなあ。

『ライア： 塾ですか。大変ですね』

『Silver： あ、全然大変じゃないんですよ。僕、エスカレーターなので。ただ、成績は落とせないんですよ』

『NANAKO： シルバーさんって頭良さそうですけどね』

『Silver： 全然ですよ^^』

『星龍： 塾とか懐かしいなあー！ 俺今ぜんっぜん勉強してねえ！！バイト漬け』

『ライア： www』

『NANAKO： 星龍さん今は何のバイトなんですか？』

『星龍： フヒヒ』

『NANAKO： ！？』

『星龍： 何を隠そう』

『ライア： ？？』

『星龍： 風巳さんのところでバイトしてますwww』

『ライア： ！！！？』

『NANAKO： ええ！？』

『†Silver†： 本当ですか!?!』

『星龍： うんwww……っというか割りと前からwww』

『NANAKO： 知らなかった……』

『ライア： え、じゃあお二人は顔見知りっというか……』

『風巳： 毎日こき使ってますね』

『ライア： うわもう超びっくりしたああああああ』

『星龍： wwwwwwwwwwww』

『NANAKO： びっくりしたwww』

『†Silver†： 風巳さんこんばんは!!』

『風巳： 〃(〃)ノ(〃)』

『星龍： マスター、マジでイメージ通りでびっくりするよw』

『ライア： うわーwwwいいなあwww見てみたいです』

『風巳： 〃(〃)ニヤニヤ』

『NANAKO： 風巳さんは何か……凄い紳士なイメージです』

『ライア： あ、ほんとそんな感じですね』

『tSilver†： 僕もそう思ってます』

『風巳： 紳士……』

『星龍： www』

『風巳： ちょび髭とか？』

『ライア： いやwww』

『NANAKO： ww』

『風巳： ご期待には添えないかもしれませんが』

『tSilver†： 大丈夫ですよw』

『星龍： めっちゃ背高いよ』

『風巳： いらいら、龍二。その位にしときなさい』

『星龍： ちょwww本名www』

『ライア： wwwwwwwwwwwwwwwwww』

『NANAKO： wwwwww』

『tSilver†： wwwwwwwwwwww』

『風巳： うっかり）＊、（・（・（＊）ネー』



『ジエネシス』の掲示板でも覗こうかと思っていたらスカイプのチャットが飛んできた。野崎だ。

『おつー』

短めの発言とともに棒人間が激しく踊っているモーションアイコンが表示される。発言のテンションとアイコンが合ってなさすぎるだろー！思わず笑いながら返信をする。

『おつかれー。ていうかそのアイコン何www』

『ダンス』

『いやそれは分かるけどなwww』

すると今度は棒人間が荒々しく両手を広げて片足を上げているモーションアイコンが送られてくる。

『何だそれwww』

『忍者』

『どこがだよwww』

全然忍べてねえじゃねえか！何故かツボにはまってしまって声を出して笑っていると、スカイプの通話がかかってきた。一瞬固まって、急いでヘッドホンを用意する。

「……ごめん、忙しかった？」

「いやいきなりだったからびっくりしただけ。どした？」

「ん、……ふふ。これ」

言いながらチャットが送られてくる。荒ぶる棒人形。噴出してしま  
う。

「だから！！これ忍者じゃねーじゃん！！」

「荒ぶる鷹のポーズだよ、これ」

「あはは！！ほんとだよ！」

こんな夜中にでかい声出して笑ったら絶対やばいのに、面白くて仕  
方ない。しばらく馬鹿みたいに笑った後、ふと素に戻る。

「……はー、うけた。……あれ、野崎何か用あった？」

「うん。これ神谷に見せたかった」

「それだけかよー！！」

思わずまた噴き出す。

「うん、それだけ」

野崎もモニター越しに笑ってるのが分かる。しょうもないけど、し  
ょうもない事も話せるのは単純に嬉しかった。



「あと、伝え忘れてたから。ギルドウォーのこと」

「あー！そつだ、それ風巳さんから聞くの忘れてた。どうなったの？」

「えつとね、とりあえず風巳さんがめぼしい日程を3日設定してくれたから、そこで皆が都合いい日を探すつて。日にちとか時間は、ギルドのホームページの掲示板に乗ってるから」

「あ、マジか。了解」

「ん。……星龍さんと風巳さんつて実際に面識あったんだね」

「ねー！マジでびびつた。……つていうかバイト先が風巳さんとなんでしょ？…それで風巳さんの方がイン率高いつてどういうこと？」

言いながら笑ってしまう。風巳さんちゃんと仕事しているんだろうか。

「あはは！意味わかんないね確かに」

……楽しそうに笑う野崎の声を聞くと、何だか嬉しくなつて、もっと笑わせたくなる。

……何か、俺だめじゃね？

美雨に言われたことを思い出す。

『……脈、あるんじゃないの？』

今日によっちゃんの態度を思い出す。俺だってさすがにあれ？って思ったよ。でもさ。

「……神谷？」

「……ああ、ごめん超ぼんやりしてた」

「寝たのかと思った」

「寝ないよ！会話中に寝るとかどんだけだよ」

「ほんとだよ！寝んなよ！寝たら怒るし！！」

「はいはい」

でもさ、人の気持ちなんてやっぱ、本人にしか分かんないじゃん？したら、まあ、まずは自分の胸に聞いてみるじゃん？脈があるとか無いとか、そういうんじゃないかってさ。

俺自身が頑なに、無い無いって思うのは何なんだろうって。何で、その話題振られるたびに何かやましい気持ちになんのかなって。

……っーか俺、野崎のことが好きなんじゃねえの？

どうなんですか？そこんどこ。俺は自分の胸の当たりに手を置いてみた。

「……神谷？……ほんとに寝たりしてない？」

手のひらから伝わるのは中に誰か入ってんじゃないか位バクバクし

てる俺の心臓の鼓動だった。

うっわ。マジかよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4312r/>

---

オンライン・オフライン

2012年1月2日04時46分発行